

---

# ラビリンスの終焉

南 晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラビリンスの終焉

### 【Nコード】

N9014R

### 【作者名】

南 晶

### 【あらすじ】

実の兄である圭介と14歳の時から関係続ける玲。結ばれることができない二人は、ひっそりと寄り添って生きていくつもりだった。

が、30歳を目前にした玲の心に変化が起きる。

結婚、出産、女性として当然の欲求に、血が繋がる兄の圭介は応える事ができない。

そして玲に恋心を抱く一人の男の出現から、ラビリンスは崩壊していく……。

## 1話（前書き）

以前書きました「ラビリンズで待ってて」の続編です。  
読まなくても分かるようになってますが、そちらも読んで頂けたら  
幸いです。

禁断の兄妹シリーズ第2弾、お楽しみ下さい。

## 1話

「玲、誕生日おめでとう。」

バターンと音を立てて玄関のドアが開いた途端、大きな花束が目に見え、飛び込んで来た。

ジャージ姿でソファに寝転がってたあたしは、花束を抱えて入ってきた長身の男を唖然として見つめた。

天然の茶髪に日焼けした褐色の肌。

スラリとした長い手足。

そして、あたしの大好きな色素の薄い琥珀色の瞳。

日本人離れたエキゾチックな風貌と言えば聞こえはいいが、最近日に焼けすぎて東南アジアの露天商みたいだ。

その男、高田圭介はその美しい瞳を細めてにっこり笑った。

呆然とするあたしに近づき、いきなり抱きしめソファに押し倒す。

柑橘系のコロンの香りと、微かなタバコの匂いがあたしの胸を締め付けた。

「玲、30歳の誕生日は記念日にしたいって言ってただろ？オレ何でもするから欲しいもの言って。」

いつものようにあたしの耳元で低く囁く。

熱い息が首筋にかかって、ゾクとする。

あたしがその声に感じるのをもう知ってるんだ。

あたしは何だか必死な彼が微笑ましく思えて笑った。

バカな圭介。

あたしの欲しいモノは、圭介からはもらえないって分かっているくせに。

でも嬉しかったからあたしは、彼の体を抱きしめ返す。

「じゃあね、まずあたしを愛してくれる？」

あたしの囁きに彼は無言で応えた。

ソファに押し倒したあたしの上に馬乗りになって見下ろす。

歳の割りに童顔な顔が少し真面目になって近づき、ゆっくりと唇をあたしの唇に押し当てて舌で濡らしていく。

やがて彼の舌はあたしの中に侵入し、あたしの舌を絡める。

昔から変らない、あたしの大好きなキス。

その間にも彼の大きな手はあたしのシャツの中で蠢いている。

彼の手があたしの胸の敏感な部分を優しく掴んで弄び始め、あたしは思わず彼の背中に爪を立てて堪えた。

圭介は少し痛みに顔を歪ませたが、開放してくれない。

彼の手は容赦なくジャージの中に侵入する。

もうこれだけで、あたしはどろどろに溶けてしまう。

「・・・や、け、圭介・・・。」

あたしは息を荒くして切ない声で彼の名を呼ぶ。

圭介はそんなあたしの顔を愛しそうに見つめ少し笑みを浮かべた。

あたしが彼のものになっていることに満足してるみたいに。

「玲。何して欲しい？」

「あ・・・圭介・・・。あたし、あたし・・・。」

激しくなった彼の指の動きに合わせてあたしの下半身は痙攣を繰り返す。

「あ、あ、ああ・・・。」

快感でコントロールが効かないあたしの体を圭介は強く抱きしめ押さえ込む。

大声を出して暴れそうなたたしにまたキスで口を塞いだ。

あたしは堪らず彼の背中にしがみついた。

快樂の波に流されていけないように。

達してしまったあたしから体を離すと、圭介は着ていた黒いＴシャツを乱暴に脱ぎ捨てた。

褐色の滑らかな肌に筋肉のついたしなやかな体。

あたしの大好きな体だ。

その体にはあたしと同じ血が流れている。

「あたしね。欲しいものがあるの。」

あたしはまだ荒い息をしながら彼を見つめた。

ジーンズのジッパ―に手をかけていた圭介は、突然声を掛けられ我に返ったようにあたしを見下ろした。

「欲しいもの？何？」

「当てて。」

「え……。」

圭介は困ったような、悲しいような、いつもの顔をした。もう答えを知っているからだ。

何度、この問答を繰り返してきたことが。

でも、あたしは圭介の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「子供が欲しい。できれば圭介の……。」

そこまで言わせないように彼はあたしを抱きしめる。

そしていつものように耳元で囁く。

少し濡れた声で。

「ごめん、ダメだ。生まれた子供がかわいそう。」

「でも、あたし、あたし……。」

「言いたくないこと、オレに言わせたい？」

圭介の強くなった語氣にあたしはやつと気付いて口を閉じた。

彼のきれいな瞳が赤くなって潤んでいる。

困らせ過ぎた。

「……ごめん。悲しいこと圭介に言わせたくない。」

あたしは俯いてボソッと謝った。

圭介は少し弱気な笑みを見せて、裸のままあたしの横に腰を下ろした。

「……どうしたの？しばらく言わなかったのに。なんかあった？」

「別に、だつてもうすぐ30歳なのに。あたしは母にはなれない女で終わるのになって……。」

「……ごめん。オレも父にはならないから……。」

圭介はあたしの頭をそつとなでた。

そしてふと我に返る。

「玲、もうすぐ30歳って言った？」

「そうだよ。」

「今日誕生日だろ？」

「・・・うん。」

あたしは今度は本当に申し訳なさそうに肩をすくめた。

「あたしの誕生日、来週なんだけど・・・。言い出す機会がなくて・・・。」

「ら、来週・・・。」

圭介は髪を掻き揚げて溜息をついた。

「オレって最悪だな。」

「でも、嬉しかったよ、お兄ちゃん。」

あたしは彼の裸のままの胸に顔をくつつけた。

圭介は長い腕であたしの頭を抱きしめる。

耳にびったりついた彼の胸から心臓の音が聞こえる。

あたしの大好きな音。

あたしの大好きな男、高田圭介はあたしの実の兄だった。

## 2話

あたしが中学生だった時から、圭介との関係は続いている。

6年の上で中学高校と寮生活をしていた圭介が、大学生になって実家に帰ってきたときから、あたしたちは男女の関係になった。

最初はあたしが無理やり迫って圭介にキスしてもらって、それから圭介のことが大好きになって、結局30歳になる今までこの関係が続いている。

歳が離れていたのと、お互いの成長期に別居していたからだと思う。

あたしは一度も彼を兄として見た事がない。

多分、圭介も同じだろう。

何度もこの関係を断ち切ろうと別れてみたりしたけど、どちらともなく戻ってしまう。

あたしたちは出口のない迷宮から出る勇気がないまま現在に至っている。

誰にも知られず、お互い独立した関係で寄り添って生きる。

それは認められた関係には絶対なれない、あたし達が一緒にいられる唯一の方法だった。

圭介は勘違いのお詫びにもう一度あたしを悦ばせてくれてから、開けた窓にもたれてタバコを吸い始めた。

9月も半ばなのに外の熱が冷房のきいた部屋に入ってくる。

あたしは彼の横にぴたっとくっついた。

圭介は慌てて手を振って煙を飛ばす。

「ごめん。煙入った？」

「ううん、一本ちょうだい。」

あたしは彼が口に咥えていた一本を奪い取って口に入れた。

圭介は露骨に顔をしかめる。



「おまえまだ吸ってんの？」

「時々よ。圭介ほどじゃないって。」

「タバコは良くないよ。特に女性には。」

「なんで？」

「・・・なんでって・・・。」

圭介は黙り込む。

このリアクションも想定範囲だ。

あたしは自嘲的に言い返す。

「子供産む時、影響があるって言うんでしょ？だったらいいじゃない。あたしは子供産まないから。」

「・・・絡むね、今日は。それってオレに挑戦してる訳？」

圭介は窓にもたれて腕を組んだ。

あ、ちよつと怒ってる。

あたしは自分でもよく分からないモヤモヤした不安と不満を圭介にぶつけていた。

言っても仕方ないって分かっているのに彼の優しさに甘えてしまう。

その優しさが更にあたしを苛立たせるのだけど。

圭介はあたしの腕を突然掴んで、あたしの口からタバコを剥ぎ取った。

乱暴な仕草で灰皿に押し付ける。

低くて怒ってる声で、でも悲しい顔で圭介は言った。

「オレにどうして欲しい？オレが嫌になっただなら構わない、そう言えよ。」

「そうじゃないっ！！」

あたしは圭介の胸にすがり付いた。

圭介はあたしの長い黒髪を手ですくって優しく口付ける。

大きな手がいつの間にか溢れて出た涙を拭った。

「・・・玲。このままじゃ嫌？オレは子供がいなくても玲がいれば満足だけど。」

彼の低い声を聞きながらあたしは一生懸命このモヤモヤを言葉で表

現しようと考えた。

何て言ったらいいのか・・・。

「・・・子供だけの問題じゃないのよ。多分ゴールが欲しいの。」

「・・・？ゴールって？」

圭介は首を傾げてあたしを見た。

「決着つけたいの。上手く言えないけど。」

「・・・何を？」

圭介は心底分かってない。

当然か。

この焦燥感はきつと女にしか分らない。

「圭介は男だから分かんないよ。あたしは女だからけじめというか、節目というか、ゴールが欲しいの。」

「・・・例えば、婚約、結婚、妊娠、出産、入学、みたいな？」

センスのない圭介が口にする何だか陳腐な感じがしてあたしは黙り込んだ。

でも、まあそういうことだ。

圭介と次のステップに行きたい。

あたしはこの迷宮から出ようと始めていた。

ああ・・・と少し納得した顔をして圭介はまた腕を組んで窓にもたれる。

「でも、それはオレが相手じゃ無理でしょ？」

「無理かな・・・？」

「無理です。」

圭介は少し笑って、でもきっぱり言い放つとあたしの頭を大きな手でなでた。

「女の幸せっていうのを玲は本能的に欲しがってるんだよ。年齢的にもそういう時期なのかもね。でもオレとじゃ無理だよ。悪いけど・・・。」

「じゃあ、どうしたらいいの？」

「オレ以外のどんな男とでも、それ全て普通にできるよ。玲がそういう人生を望むならオレは応援する。お兄ちゃんだからな。」

「やだ!!」

あたしは圭介にキスして口を塞いだ。

このやり取り、何回しただろう。

でも、ここから先に進めないんだ。

そしてあたし達はまた迷宮で立ち止まる。

でも、いつまで？

### 3話

気が付くと朝だった。

遮光カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

あたしはしばらくボンヤリとベッドに座り込んでいた。

昨日の夜、またヒステリーを起こしたあたしは圭介とベッドに入ってから泣き続けて、そのまま寝てしまったみたいだ。

リビングのテーブルには昨日圭介が間違えて買ってきた誕生日の花束が花瓶に生けてある。

コーヒーの香りがまだ漂っていて、空腹を覚えたあたしはフラフラ立ち上がった。

テーブルにはロールパンが一袋と、冷めたコーヒーが入ったカップが置いてあり、その横に汚い字で書かれたメモ書きがあった。

会社行ってくる

適当になんか食べてて

「適当につて、何にもないし・・・。」

あたしは冷蔵庫を開けて溜息をついた。

独身貴族のあたしたちはどちらも料理をするという習慣がない。

二人とも胃に入ればいいというのが基本スタンスなので食に関してあまり関心がない。

この辺はさすが兄妹。

ざつくばらんな性格はよく似ている。

あたしは諦めて素っ裸のままバスルームに入った。

熱いシャワーを浴びながら鏡を見ると、泣き寝入りしたせいで瞼が腫れている。

圭介と全く違う切れ長の真っ黒な目だ。

大きな二重瞼の彼の目に対してあたしは一重の横に長い黒目。髪も真っ黒で、圭介のサラサラ天然茶髪と似ても似つかない。彼が多国籍エキゾチックならあたしは完全オリエントルだ。

ビジュアル的に共通点がないのが、血の繋がりを意識しなかった原因の一つかもしれない。

自分と似過ぎてたら恋愛感情は起きにくいだろう。

圭介の会社は世界中に拠点のある総合商社だ。

最初は地方公務員だったのに海外駐在員になれると思って、わざわざ転職して入った会社だった。

最初の10年は確かに世界中を飛び回ってた彼だが、歳を取ってそれなりに会社の中でポジションが出来てくると日本の本社の国内営業部に配属された。

国内でのシェア拡大は会社の課題で、君にはもつと勉強して上のポジションを狙ってもらわなければならない、と上司に言いくるめられて圭介は日本に戻ってきた。

このマンションに圭介が住み始めてから2年くらいになる。

ツアーコンダクターの仕事をしているあたしにはいい拠点だった。

オフの時はあたしはこのマンションで圭介と暮らしている。

住所不定のこの仕事は確かに都合が良かったが、歳を取るに連れて辛くなる。

自分の体調が悪い時まで団体を率いて歩き回るこの仕事に疲れてきた。

子供が欲しくなったのも、安定した生活に憧れるようになったのも最近だ。

「守りに入ってるのかなあ・・・。」

あたしはシャワーに打たれながら自分の体を見た。

あれ、なんか胸小さくなってるない？

もとから小さかったのに更に張りが減ってるような・・・。  
痩せた白い胸に昨夜圭介がつけた赤い痣が散らばっている。

この萎んだ貧乳をずっと圭介に見られてたんだ。

当然なのだが、今更ながらあたしは恥ずかしくなって一人赤面する。  
グラビアアイドルのそれと比べると同じ女性のものとは思えない可  
哀相な胸。

あたしが男ならこんなの絶対ゴメンだ。

圭介はあたしがいつまでも若くないって分かっているのだろうか。

子供だっていつでもできる訳じゃない。

女には色んな意味でリミットがある。

衰える体力を肌身を感じる。

あたしはいつまでも綺麗じゃない。

とてつもなく惨めな気持ちになってあたしはシャワーに打たれ続け  
た。

涙も一緒に流れてくれるように。

## 4話

この先2ヶ月は仕事の予定がないあたしは昼間はのんびり本を読んだりショッピングをしてりして過ごす。

そんなに暇ならメシ作ってくれよ、と圭介はボヤクがあたしは作るのが嫌いだ。

生活費を出す代わりに圭介が帰宅するまでに弁当を二人分買っておくのが精一杯。

あの夜から圭介は帰るのが遅くなった。

仕事が忙しくなったらしいが、あの夜から何となく気まずい空気が漂っていて、顔を合わせずに済むのはありがたかった。

今までも何度もこんなイザコザは起きているが、この辺が兄妹の良い所で時間が経つとお互い忘れたように元に戻る。

どんなにこじれようと血が繋がっている以上、完全に別れるという不安がない。

いつかは戻るという根拠のない自信がある。

親子が喧嘩してもすぐに仲直りしてしまうのと同じだ。

だからあたしは圭介が遅く帰ってきてても寝たフリをし、朝出かける時も寝たフリして時間が経って仲直りできるのを待った。

圭介があたしに声を掛けたのはあの夜から1週間後のことだった。

朝、コーヒーを入れる音がしてあたしは目を覚ました。

あ、もうすぐ出勤か。

もう気にも留めないあたしが二度寝に入ろうとした時、布団の上に重力がかかった。

「玲、起きてるんだろ？いい加減に顔見せろよ。」

頭の上から声がしてあたしは布団から顔を出した。

あたしを布団で簀巻きにしたその上に圭介が馬乗りになっている。

「・・・寝てたんですけど。」

「じゃ、起きろ。」

「・・・やだ。」

あたしは糞虫みたいに布団に潜り込む。

圭介はいきなり布団を力任せに引っ張った。

簀巻きになつてた布団からあたしは転がり落ちる。

出勤前の開襟シャツにネクタイ姿で仁王立ちになつてゐる圭介がそこにいた。

「何すんのよ、お兄ちゃん。」

「こんな時だけ妹ヅラするな。まだ怒つてんのか？」

「・・・別に。」

圭介に真っ直ぐ見つめられてあたしは言葉を濁した。

別に怒つてゐる訳じゃない。

圭介のせいじゃないし。

「分かつてるよ。お前の言いたい事。でもオレには何もできないからごめん。」

「謝らないで。あたしこそ困らせてごめん。」

小さな声であたしは言った。

圭介はやつと笑顔になつて胸ポケットから名刺サイズのカードを取り出す。

イベントホール BLUE MOON

各種パーティー受け付けます

住所 xxx町xxx

電話 xxx-xxxx

「何これ？」

「ビュッフェ式で食事もできてライブもできるんだって。」

「だから？」



「玲の誕生日パーティー、ここで今夜7時からだからな。メシ食わずに来いよ。」

圭介はウィンクしてみせる。

あ、あたしの誕生日。

あの日から1週間経った？

「今日だった？」

「今度は間違いない。オレがお母さんに電話で確認した。」

呆然とするあたしを抱きしめ彼は耳元で囁いた。

「今度こそ誕生日おめでとう。」

## 5 話

9月の夜7時はまだ薄明るい。

この時間になってもねつとりした熱気が街を覆っている。

今年は記録的猛暑だったせいかまだまだ秋の兆しは見られない。

あたしは膝丈スリムジーンズにサンダル、黒のキャミにボレロを羽織ってイベントホールBLUE MOONの前に立った。

レンガの壁に蔭が良い感じに這っていてアンティークな雰囲気の小さな店だ。

映画に出てくる中世の酒場って感じ。

圭介はこんなオシャレな店来るんだ。

この街の住人でないあたしはこんな店に来たのは当然初めてだった。そもそもフリーの仕事柄、交友関係もあまりないあたしが人が集まる所に行くのは稀だった。

行くのは仕事の仲間とミーティングする時くらいか。

ドアの横においてある木の樽の上に看板が載っている。

高田玲様

BIRTHDAY PARTY

pm7:00

自分の名前が店頭に置いてあるのを見てあたしは少々気恥ずかしくなった。

少し緊張してあたしは重い扉を開けた。

「誕生日おめでとございます!!!」

パパパーンとクラッカーの鳴る音と複数の人の大声にあたしは驚い

て目を瞑った。

「玲さん、お待ちしてました。」

「こっちですよ。」

両脇に若い女の子が二人ついてあたしを誘導する。

顔を見ても誰なのか全く覚えがない。

あたしの不審そうな顔に気付いたのか一人が笑って言った。

「あ、ご心配なく。あたしたち高田主任の部下ですよ。」

「いつもお世話になってます。」

今時の若い女の子という感じの茶髪にパーマをかけた二人は軽いノリで言って、あたしをホールの中央のテーブルに座らせる。

テーブルの周りには20人程の若い男女がにこやかに拍手している。

「大丈夫です。みんな高田さんの会社関係者です。」

「どれでも好きなの連れてっていいですよ。みんな高田主任よりイケメンですから。」

どう見てもイケてない四角い体型で角刈りの男性が言ったので、みんなどつと笑った。

テーブルの真ん中には巨大なバースデイケーキが置いてあり、ご丁寧に30本の蝋燭が針山の如く刺さっている。

これじゃ、会社関係者にあたしが30歳になることが分かつちゃう。いまいちデリカシーに欠けている圭介がやりそうなことで、あたしは苦笑した。

突然、店の照明が消されて真っ暗になったステージにスポットライトが照らされた。

ヒューヒューと囁し立てる声と口笛が周りから飛び出した。

光の中に圭介が立っている。

出勤前と同じ開襟シャツにネクタイ姿、肩からエレキギターを提げている。

圭介はマイクに向かうとまっすぐあたしを見て言った。

「玲、誕生日おめでとう。先週、誕生日間違えたこと会社の連中に話したらリベンジするべきだって、皆がこの会を企画してくれました。今日は記念日になるように楽しませるから。」

そこで一息ついてホールを見回す。

「みんな、妹の為に協力してくれてありがとう。ついでだからお前らも楽しませてやるぜ！！今日は無礼講だが妹に手え出すんじゃないぞ！！」

ウオオオオと歓声があがり、みんな一斉に拳を突き上げた。

それを幕切りに圭介の高速ギターが会場に響き渡った。

いつの間にスタンバイしてたのかドラムとベースが脇を固め、大音響に加勢する。

昔の映画で、過去にタイムスリップした少年がダンスパーティーで弾いた有名なロックナンバーだ。

周りは熱狂し拳を振りながらジャンプし続けている。

ノリの良すぎる社員達にあたしはこの会社の行く末が少し心配になる。

「高田シュニーン！！」

「かっこいいっす！」

野次が飛ぶ中、圭介は歌い出した。

初めて聞く圭介の歌声。

ハスキーな高音で、普段喋る時の低い声とは別人みたいだ。

英語の発音は完璧で、さすがは商社の元海外駐在員。

悔しいけどかっこいい。

あたしは誇らしくて、この男に愛されてるんだって皆に言いたかった。

圭介のギターに合わせて突然ピアノのソロが入った。

軽快なタッチで、圭介のギターに全く引けを取らない。

ギターに合わせると言うより、張り合うような目立つ弾き方だ。ウオオオオとまた野次が飛ぶ。

「岡崎くん!!」

「いいぞ！主任に負けるな!!」

岡崎君と呼ばれたピアノ奏者はチラリとあたしを見た。

え、男の人？

ピアノを弾くのは女性だと単純に思い込んでいたあたしは、その人を見てぎよつとした。

あたしと目が合い、慌てて鍵盤に視線を落とし演奏に集中する。

会社帰りらしい開襟シャツにネクタイ姿でピアノを弾くその人は紛れもなく男性だった。

## 6話

曲が終わると会場が明るくなり、皆テーブルの上の料理をつつき始めた。

さつき案内してくれた若い女の子が取り皿と箸をあたしの前に並べながら、にっこり笑って話しかけてくる。

「いつも主任にはお世話になってます！」

「あ、はあ……。兄がお世話になってます。」

とあたしも気の抜けた返事をする。

「高田主任って独身なんですよ。彼女いるんですか？」

あたしは思わず硬直する。

そうか、普通の人はまさか妹と関係してるなんて思わないから聞くのだろうけど。

あたしは冷静を装った。

「さあ、兄とはプライベートな話はあまりしないから。」

「そうですね。でも、いなかったら、あたしが立候補してもいいですか？。」

全く悪びれず、彼女はガンガン押してくる。

妹のバックアップが欲しいのだろう。

それが恋敵とも知らずに。

「いいよ。兄が選んだ女性ならあたしは応援するしかないから。」

作り笑いをしてあたしはグラスに入ったワインを一口飲んだ。

乙女心は分からなくもないが、当然内心は穏やかではない。

「やったあ！これからもお願いします！」

彼女はキャピキャピ騒ぎながら仲間の女の子の元に行った。

将を射んとすれば……。だ。

さしずめ、あたしは馬か。

不愉快だったが、圭介との関係を口に出せる訳もなく、黙っているしかなかった。

その後も気の良さそうな会社員達があたしが退屈しないように、入れ替わりやって来ては接待してくれた。

さすがは国内営業部集団だ。

ちよつとしたVIP扱いに悪い気はしなかった。

これも圭介の人徳のなせる業なんだろうな。

「玲、どうだった？オレのギター。」

あたしがほろ酔い加減になってきた頃、汗を拭きながら圭介とさっきのバンドメンバーがあたしのテーブルに集まってきた。

「この1週間必死で練習したんだよ。こいつなんかベース初心者。」

小柄な若い男の子が照れくさそうに笑う。

「高田主任のお願いですからね。何でもしますよ。」

帰りが遅かったこの1週間、この会の為に練習してたんだ。

あたしは圭介の気持ち嬉しかった。

そして圭介の会社での人望の厚さに驚いていた。

あたしが同じことをやったとして、どれだけの友人が集まるだろう。

昔からあたし達は陰と陽だった。

太陽みたいに明るくて温かい圭介の周りにはいつも人が集まる。

比べてあたしは暗くてどちらかといえば一人でいる人間だ。

嬉しい反面、圭介が違ふ世界の人みたいで寂しさを感じた。

「高田主任、妹さんと似てませんね。」

突然、よく通る低い声が会話を遮った。

声の大きさに思わず一同振り向く。

皆の視線の先に、さっきのピアノ奏者が立っていた。

圭介と同じくらいの長身、白い整った顔にウェーブのかかった黒髪、

そして銀縁眼鏡。

言うなれば、育ちの良い秀才顔。

商社マンというより政治家の秘書みたい。

圭介はうんざりした声で言い返す。

「岡崎、お前はまた空気読まない発言を突然しやがって。しかも声デカいんだよ。」

「これが地声ですから。そして本心で思ったので。」

ピアノ奏者は真っ直ぐあたしを見詰めている。

あたしは視線のやり場に困って俯いた。

「主任の妹さんがこんなに美しい方だとは驚きました。主任もそれなりにイケてますが、そんなチャライ雰囲気ではない。妹さんは本物の美しさです。」

圭介のパンチが彼のみぞおちに入る。

「おまえ、サラっと言ってくれね。誰がそれなりのチャライ雰囲気だって？」

「主任は最近日に焼けすぎです。どこの国の人か分からないですよ。妹さんはアジア伝統の美しさを持ってらっしゃる。」

「うるせえ、ほっとけ。おまえは思ったこと口に出しすぎだ。さっきのピアノだって目立ち過ぎだ！」

「ぼくはクラシック専門でロックンロールはよく分かりませんので。」

「

あたしは二人の掛け合いを呆然と見ていた。

あたしという時より、明らかに元気で楽しそうな圭介。

全く物怖じせず淡々と話し続ける政治家秘書。

二人の間に堅い信頼関係ができてるのは一目瞭然だった。

ボンヤリ眺めているあたしを見て秘書が突然言った。

「妹さんの誕生を祝ってピアノで一曲プレゼントさせてください。さっきのよりはマシですよ。」

「マシってどういう意味だよ！てか、妹に手出すな。」

すかさず圭介が突っ込む。

秘書はニヤッと挑戦的に笑った。

「主任のガンズ・アンド・ローゼズの早弾きコピーより女子にはウ



ケますよ。先輩のギターは女子には理解し難いです。」

「オレのことはほっとけって言っただろ！」

「女子にウケるこの曲を妹さんに捧げます。」

秘書はくると身を翻すと、颯爽とステージに戻っていった。

この天然キャラ、完全に圭介を上回っている。

あたしばかりか、周りの会社の人達も呆然と彼の次の言動を見守った。

職場じゃ間違いなくトラブルメーカーだろう。

彼は周囲の反応に臆することなく、堂々とピアノに向かう。

座るポジションを整えた後、よく通る声で言った。

「美しい玲さんに捧げます。」

## 7話

見かけはお堅い秘書。

本職は会社員。

そしてピアノリストの岡崎君は、真面目な顔になって鍵盤に視線を落とした。

音楽に疎いあたしでも聞いたことのある曲だ。

昔流行ったドラマで、死んだ彼が忘れられないヒロインが好きだった曲。

柔らかい穏やかなタッチで曲は始まる。

なのに会場全体が彼のステージの為に存在しているような、圧倒的な存在感。

そこにいる誰もが全てを忘れて、彼の奏でる音楽の世界観に引き込まれている。

こんなピアノ聴いた事なかった。

囁くような、訴えるような、泣き叫ぶような、あらゆる感情を持った音。

曲が終わった時、あたしの頬には涙が伝っていた。

一同我に返ると、惜しみなく拍手を始めた。

あたしと同じように涙した女の子達が一斉にハンカチを出し、化粧を直す。

岡崎君はおもむろに立ち上がると、芝居がかった礼をしてステージを降りた。

「玲、泣いてるよ。」

圭介に肩をつつかれ、あたしは慌ててハンカチで顔を拭く。

「だ、だって感動したんだもん。こんな演奏初めて。」

「オレのガンズよりマシか？」

ふてくされた圭介の言い方に、あたしは苦笑いした。  
圭介のギターはスゴイのかも知れないけど、正直あたしにはよく分からない。

確かに女子にウケる事を岡崎君はよく分かっている。

「妹さんの為に頑張りました。どうでした？」

岡崎君が颯爽と戻ってきた。

「ありがとう。なんか感動して泣いちゃった。」

「まあまあ及第点だな。だからって妹を落としたと思うなよ。」  
あたしと圭介は同時に返事をする。

兄妹ならではのタイミングに、周りから笑いがこぼれた。

その間も、岡崎君はまっすぐあたしを見ている。

視線が合うと真面目な顔が少し緩んだ。

あ、この人笑うとちょっとかわいい。

整った白い顔と、堅物そうな銀縁眼鏡が彼の本質の邪魔をしている。  
その笑顔にはまだあどけなさが残っていて、歳もあたしより下だと確信した。

「喜んでもらえて嬉しいです。子供の頃から嫌々やらされてきた甲斐がありました。いつでもリクエストにお応えします。」

「岡崎、リクエストに応じるにはお兄様の許可を要することを忘れるな。」

圭介が岡崎君の胸を叩いて突っ込む。

「そうですね。確かに。」

突然、岡崎君は姿勢を正して圭介と向き合った。

背の高い二人が正面から向い合っている図は、なんだか迫力がある。  
一同、何事かと思わず集まってくる。

周囲の状況に全く動じることなく、岡崎君は圭介に言った。

「お兄さん、妹さんとお付き合いたせて下さい。」

## 8話

何だかんだでパーティーは盛り上がり、あたし達が帰宅した時には12時を回っていた。

締め切った部屋にやっと冷房が効き始める。

あたしは窓でタバコを吸ってる圭介を横目にさっさと服を脱ぐと、バスルームに直行した。

湯が張られたバスタブに体を沈める。

熱い湯が酔いの冷め始めた体に心地よい。

あたしは湯気の中、さっきまでの出来事を思い出していた。

岡崎君の告白に少しトキめいてしまったのは否定できない。

何故なら、あれがあたしの人生で初めてされた告白だったからだ。

圭介との付き合いが長かったせいで普通の男性ときちんと付き合い合ったことが、実はこの歳になるまでなかった。

彼氏いない歴30年。

あたしはこの現実に愕然とした。

「お兄さん、妹さんとお付き合いさせて下さい。」

頭の中にさっきのシーンが蘇る。

岡崎君の渾身の告白だった。

だが、

「させるか、バーカ！」

圭介は中指を立てて岡崎君の鼻先に突き出した。

どちらともなく二人は胸倉をつかみ合って取っ組み合いを始め、周囲は突然の乱闘に大いに沸き、大騒ぎの内に告白はうやむやになった。

もしかすると、ウケ狙いの冗談だったのかも。

もしくは過剰なリップサービス。

ひよっとすると、圭介と打ち合わせ済みのコントだったりして。だとしても、あたしは不思議と悪い気がしなかった。

約束どおり、圭介はあたしの30歳の誕生日を記念日にしてくれた。

「玲、入るよ。」

風呂場のドアが開いてから圭介の声がした。

いつも一緒に入ってしまうのだが、今日は咄嗟に小さな胸を抱きしめ慌ててお湯に身を沈める。

「やだ、入って来ないで！エッチ！」

「は？」

まさかの拒否に圭介は裸のまままで立ち尽くす。

「なんで？」

「見られたくないの。後から入ってよ。」

「オレがお湯入れた風呂ですけど？」

「あたしが先に入ってるでしょ！」

「で、なんでオレが後なんだよ。」

「もーいいから出てってよ！」

萎んだ貧乳を見られたくないなんて死んでも言いたくない。

圭介はデリカシーが足りないんだから。

さすがに頭にきたのか、圭介は出て行くどころかズカズカ風呂場に入ってきた。

「何？その言い方。大体オレが入れた風呂に何でおまえが先入ってるんだよ。」

「タバコ吸ってる人が悪い。あ、やだっ！何すんの！」

圭介は湯船に手を突っ込み、あたしの腕を掴んで引っ張り出す。

素っ裸のままあたしは圭介に腕を掴まれ、バスルームの壁に押し付けられた。

冷たい濡れた壁の感触が、押し付けられた背中に伝わる。

礫にされたあたしの体を圭介は遠慮なく見つめた。

恥ずかしくて、あたしは横を向いて彼の視線から逃れる。

「何で急に見られたくないんだよ？」

圭介の少し困った声がした。

「・・・だつて・・・あたし・・・。」

もう若くないし・・・と言いかけ口を閉じた。

## 9 話（前書き）

今回 R 指定です。

苦手な方はご遠慮下さい。



## 9 話

あたしの濡れた体を見つめる圭介の視線が痛い。

色素の薄い瞳が問題の貧乳を捉えて離さない。

恥ずかしさと、変な興奮を覚えてあたしの鼓動が激しくなる。

圭介は左手であたしの腕を掴んだまま、もう片方の手であたしの胸を触った。

濡れて敏感になった胸の先端に、圭介の乾いた手の感触が伝わる。

「ん．．．ん」

あたしは声を出さないように必死で堪える。

そのあたしの顔を見て圭介は微笑む。

「声出せよ、玲。聞きたいから。」

「や、やだ．．．あ．．．」

彼の大きな手は二つの胸の先端を交互に弄ぶ。

快感に座り込みそうになるあたしを、圭介はまだ離さない。

やがてその手はあたしの下半身に伸び、一番敏感な場所を探り始めた。

「あ、あ、いや．．．」

我慢できず、あたしは思わずせつない声をあげる。

圭介は少し意地悪くあたしの耳元で囁いた。

「言えよ。今更何を見られたくないんだよ。」

優しい顔に似合わない低いサディスティックな声。

あたしはこの声にまた感じてしまう。

下半身を愛撫する彼の指の動きが激しくなり、あたしの体はのけぞった。

「．．．圭介のバカ！あ、ああ、あ．．．」

絶頂に達したあたしは湯船に座り込んだ。

圭介はまだ許してくれない。

自分も湯船に入ると、あたしの体を抱き起こして向き合った姿勢で膝に座らせた。

まだ敏感になっているあたしの胸の先端を口に含む。

彼の舌の感触を感じて、あたしは大きな背中にしがみ付いた。水面下で彼はあたしの中にもう侵入している。

「ね、圭介……。あたし……。まだきれいかな？」

喘ぎながらあたしは質問を投げかける。

「……。きれいだよ。」

荒い呼吸で圭介は返事する。

あたしの胎内で圭介が動くのを感じ、あたしは思わず彼の背中に爪を立てる。

二度目の波があたしの体に押し寄せてくる。

突然、しがみ付いていたあたしを引き剥がすと、圭介はあたしの顔を見た。

色素の薄い瞳にあたしが映る。

「見せて、玲……。顔見たい。」

荒い呼吸のまま彼は懇願した。

快感の波に溺れながらあたしの胎内は圭介で満たされる。

彼のこの瞬間の表情が大好き。

あたし達は果てた後も温かい湯船の中で抱き合っていた。

「ね、さっきの話。」

「何？」

「どのくらいあたしきれい？」

「……。引っ張るね。今日は。」

圭介は少し笑って言った。

「理性もブツ飛ぶくらい。16年付き合っても全然飽きない。禁忌も犯しちゃう程いい女。」

生温くなった湯船の中であたしは嬉しくて彼の胸に抱きついた。

「今日はありがと。最高の誕生日だった。」

あたしは素直に感謝して圭介の首筋にキスする。

「喜んでくれたならやった甲斐あった。会社の連中にも言っとくよ。店の段取りしたのあいっらなんだ。」

「圭介のライブも初めて見たし、お店も素敵だったし、ピアノの生演奏も感動したし、二人の男があたしの為に闘ってくれたのも初めてだった。一生忘れられないよ。」

その言葉に圭介の眉間に皺が寄る。

「岡崎のヤロー。大衆の面前で告白しやがって。オレは許さないからな。」

「コントじゃなかったの？」

「じゃないよ。あいつはいつだって本気なんだよ。で、すげえいい奴。オレが普通のお兄ちゃんだったら、お前に紹介してやってもいい。」

「・・・もしかして妬けた？」

いたずらっぽく言ったあたしの質問に、圭介は弱気な笑みを見せた。あたしの髪を掻き上げ、額にキスをする。

「・・・羨ましかった。だってオレはあんな告白できない。」

不思議なことに、その時あたしの頭の中には岡崎君が弾いたピアノが鳴り響いていた。

思い出した。

あの曲の名前は確か「別れの曲」。

思い出したけどそんなことはどうでもよくて、あたしはまた彼の胸でまどろんだ。

## 10話

そのメールが来たのは、あのパーティーの夜からちょうど一週間後のことだった。

交友関係も少ないあたしのメールアドレスを知っているのは圭介と実家の母くらいだ。

よって滅多にこないメールが届くとびっくりしてしまう。

登録してないアドレスだった。

あたしはドキドキして携帯のボタンを押す。

件名 突然のメールすいません。

本文 先週のパーティーでお会いた岡崎です。

一週間、高田主任を説得して玲さんのアドレス教えてもらいました。

お時間ありましたら食事でもどうですか？

パーティーの会場だった店で今夜7：00にお待ちしてます。

お時間ありましたらと聞いている割には、既にスケジュールが決め  
てある。

文面からそう読み取れた。

つまり、あたしが断らないと思っている。

相当な自信があるらしい。

草食系なる無性欲男子が増えてる中、珍しいタイプだ。

「面白いじゃない。」

あたしはニヤリとしてこの挑戦を受けることに決めた。

多分圭介は今日のことは知らないだろう。

知らせて圭介の気を悪くさせるのも面倒だ。

あたしは黙って行くことに決めた。

ご飯だけ食べて、適当にあしらって帰ってくればいいや。

きつとかっこいいからどんな女も誘えば付いて来ると思ってる。

あたしがそんなに簡単じゃないってことを思い知らせてやんなきゃ。

化粧をしながらあたしはそんなことを考えていた。

不思議なことにあたしの頭の中ではもう彼のピアノが響いている。

眼鏡の奥のまっすぐな瞳が脳裏に浮かんだ。

「確かにピアノはかつこよかったな。」

あたしは思わず口から出た自分の声にギョっとする。

あれ、あたし逢いたいと思っただけ？

早くなる鼓動にあたしは気付かないふりをした。

ちょっと出かけてきます。

外で食べてくるので、適当にやってて。

玲

それだけメモに殴り書きしてあたしはマンションを出た。

9月も終わりに近づき、夜は少しだけ秋の涼しい風を感じるようになっていた。

車を持ってないあたしはバスで中心街まで出る。

オフの時だけ滞在するこの街をあたしはそれなりに気に入っていた。薄暗くなった街に色とりどりの光が灯り始める。

今年の流行のカントリー風ロングワンピースにブーツサンダルと、服装

に拘らないあたしなりに若作りしてみた。

そういえば圭介と出かける時に服の事なんか考えたことあったっけ？  
確かにあたし達は男女の関係なんだけど、それ以前から家族であつたためにこういう初期のデートなるものはしたことがなかった。

言うなれば馴れ合った夫婦のような。

これがあたしの老化の原因に違いない。

考えているうちに、蔦が絡まるレンガ造りのBLUE MOONが見えてきた。

貸切のイベントがない時はただのバーらしい。

あたしは一週間前と同じように重い扉を開いた。

薄暗い店内には2、3組の客が食事を楽しんでいる。

静かなジャズが流れていい雰囲気だ。

白いシャツを着たウェイターが待ちわびたように歩み寄ってきた。

「いらっしやいませ。岡崎様はあちらの席でお待ちです。」

店の隅の更に薄暗い席で、会社帰りらしい男性が手を上げるのが見えた。

開襟シャツにネクタイ。

そして銀縁眼鏡。

一週間前と全く同じ格好で岡崎君は立ち上がった。

「来てくれるって思っていました。突然メールしてすみませ  
ん。でも、ありがとうございます。」

「あ、でも食事だけですけど。」

想定外に感極まっている彼を見て、少しあたしは怖気づく。  
その気もないのに期待させちゃったかな。

岡崎君は椅子を引いてあたしに勧めながら朗らかに言った。

「それだけで構いません。美人と食事できればそれで満足ですから。」



## 11話

至近距離で見ると、岡崎君は確にかっこいい。

育ちの良さが分かるというか、気品のある整った顔立ち。

背筋が伸びてシャキッとした姿勢が、堂々とした雰囲気を見せる。長い手足を持て余すように、足を組んだり頬杖をついたり、どちらかといえばダランとした雰囲気の主介とは別の種族の人みたいだ。主介が大型ネコ科動物なら、彼はさしずめ軍用犬か。

自信満々で誘ってきたと思いきや、あたしが来たのが心底意外だったようだ。

嬉々としてにさっきのウェ이터を呼んだ。

「玲さん、何でも注文言っして下さいね。この店ぼくの行きつけですから。」

「じゃあ、パーティーの段取りしてくれたの岡崎君？」

彼ははっと顔を上げる。

「ぼくの名前覚えてくれたんですね。」

「あ、だってメールに書いてあったし。」

「でも、感激です。本名は岡崎悠樹です。悠樹って呼んで下さっても結構です。」

「あ、はあ……。じゃあ、飲み物はカシスソーダお願いします。」

あたしはさりと受け流した。

苦笑しているウェ이터に岡崎君は臆することなく注文する。

「じゃ、カシスソーダとウーロン茶、適当につまみも持ってきて。

あ、玲さん。この人ぼくの友達ですから何でも文句言っして下さいね。」

「時々、ピアノの生演奏をやってもらってるんですよ。悪い人じゃ



ないことは保障します。」

援護射撃したつもりだろうか、ウェイターは意味深に笑って言った。

ウェイターが消えると、岡崎君は語り始めた。

「先週は失礼なこととして申し訳なかったです。まず、お詫びしたかった。いや、その前に一度でいいからお話したかったんです。」

「あ、失礼なんて……。楽しかったし、皆も盛り上がったから気にしてないよ。」

「でも、あれは真剣に言いました。主任が了解してくれたらぼくは玲さんとお付き合いしたい。誰か特定の人がいらっしやいますか？」

聞く順番が違うでしょ……。

あたしは確信した。

女に慣れてない。

この人は自信に溢れているのではなく、多分経験の乏しさ故、思ったことを何でも言うてしまうのだ。

「付き合ってる訳じゃないけど、ずっと好きな人はいるの。だから、付き合うのはちょっと無理。」

あたしは申し訳なさそうに首をすくめた。

岡崎君は一瞬硬直したが、すぐ気を取り直した。

「付き合っていないなら、まだチャンスありますよね。ぼくに乗り換えてもらえるように頑張りますよ。」

「圭介が許さないと思うよ。」

「ぼくが命がけで説得します。きっと分かってくれます。主任は器の大きな男です。」

家族以外の人間の口から圭介の話をされると、何だかヘンな感じだ。あたし達との関係を知らない岡崎君は更に続ける。

「ぼくは自分が能力的に主任に劣っているとは思ってません。」

でも、主任にどうしても勝てない理由があるとしたら人間の器の大

きさです。

主任は自分を犠牲にしても人を助ける人です。自分の利益を省みず人を助ける。トラブルの尻拭いも全部自分が負ってしまう。それが結果的に出世に繋がったのだと思います。」

「はあ……。」

誰の話だ？

ベッドでゴロゴロしている圭介が実はそんなにスゴイ人だったとは。あたしはイマイチ納得できずに気の抜けた返事をする。

「36歳で主任になるってウチの会社じゃありません。高田主任はぼくの目標で、恩人です。」

「恩人？」

岡崎君は照れたように少し笑った。

あ、やっぱりかわいい。

「ぼくは、高田主任が日本に帰ってくるまで会社で完全に浮いた存在だったんですよ。何を喋っても生意気だつて言われるし。でも、高田主任は、ためえ生意気なんだよって言いながら面倒見てくれました。」

なんかその絵が頭に浮かんだ。

圭介は昔から面倒見が良いのだ。

あたしが中学生の時にせがんだ初めてのキスも、面倒見の良さの延長線上だったのだと思う。

そのうちに先ほどのウェイターが戻ってきて、料理をテーブルに並べ始めた。

色とりどりの野菜サラダが載っているオシャレなお皿。

一口サイズの揚げ物とソーセージにはマスタードが添えられている。この辺は女の子の好みを把握している。

圭介だったら枝豆とビールがジョッキでくるだろう。

「では玲さんの美しさと、二人の再会に乾杯。」

岡崎君はウーロン茶のグラスを上げた。

あたしは苦笑いしてカシスソーダに口を付けた。

## 12話

「岡崎君は歳いくつなの？」

あたしは聞いてみたかった事の一つを口にした。

「ぼくは今年で28歳です。玲さんより年下になるのかな。」

岡崎君はすまなそうに言った。

それは想定範囲内。

あたしは質問を続ける。

「兄弟は？」

「ぼくは姉が二人います。二人とももう結婚して子供がいますよ。最近会ってないけど。ピアノも姉達がやってたのでついでにやらされてたんです。」

「へえ、お姉さんと仲良かった？」

あたしはちよつと興味を持って聞いてみる。

「まあ、話するようになったのは大人になってからですかね。子供の頃は相手にもされませんでした。」

やっぱり普通の家庭はそうなんだ。

あたしは更に突っ込む。

「お姉さんのこと好きになったりしなかった？」

「・・・は？」

岡崎君は怪訝な顔をした。

「だ、だからさ。お姉さんを女性として見ることってないの？」

「その質問は初めてされましたけど、ないですね。玲さんはドラマの見過ぎだと思います。」

「・・・だよね。」

あたしは期待が外れたような、ほつとしたようなヘンな心地でカシスソーダを飲む。

よくある話ですよ、なんて答えを期待してたんだろうか。

「玲さんは主任のことが大好きなんでしょうね。」

「・・・!!」

ゲホゲホとあたしはむせ返った。

今何て言った？

「主任みたいにいい男が常に傍にいたら、他の男を見る目が厳しくなるのは自然だと思います。」

「ああ、そういうこと？そうね。それはあるかも。」

あたしは作り笑いを浮かべて取り繕った。

岡崎君は真面目な顔で続ける。

「でも、ぼくにも一度だけチャンスを下さい。少し付き合ってもらってダメだって言われたら諦めます。主任にも許可取りますから。」  
初めて男の人にこんなことを言われてあたしは困惑していた。

少し付き合えば好きになれるものなのだろうか。

この人を好きになれば、あたしの望むものはみんな叶うのかもしれない。

でも、圭介は？

あたしは圭介を忘れられるのだろうか。

「オレが相手じゃ無理でしょ。」

いつかそう言った圭介の弱気な笑みが脳裏に浮かんた。

残念だが、それは事実だ。

圭介とは結婚も出産もできない。

彼の理性が絶対許さない。

黙り込んだあたしを見て岡崎君は慌てた。

「あ、そんなすぐに結論出さなくてもいいですよ。最初はやっぱり友達からなんですかね。ぼくはあまりこういう段取りに慣れてなくて、スミマセン。」

クールで落ち着いた岡崎君が、汗をかきながら必死で気持ちを伝えようとしている。

子供みたいに純粹でいい人なんだ。

ただ、ちよつと生き方が不器用なんだろう。

あたしは安心させるように笑みを見せた。

「ピアノ。」

「はい？」

「岡崎君のピアノ聴きたいな。」

「あ、はい。いいですよ。」

彼は勢いよく立ち上がった。

「あたし岡崎君のピアノすごく好きになったみたい。」

あたしの言葉に彼は子供のような無邪気な笑顔を見せた。

眼鏡の奥の瞳がキラキラしている。

「それは光栄です。音楽つて人の性格が出るんですよ。」

「へえ？」

「技術の差はあってもその人の基本性格が出るとぼくは信じてます。

せつかちな人は走り気味になるし、アグレッシブな人のタッチは強

いものです。」

「なるほどね。」

「だから、玲さんがぼくのピアノを好きになったということは、ぼ

くを好きになる可能性は充分あるということです。」

「強引だね。」

あたしは笑った。

でもそうかもしれない。

彼のピアノの音色は、真っ直ぐで純粹な彼の性格がよく出ていた。

「他のお客さんもいるからバラードでいきますよ。」

「何でもいいよ。任せる。」

岡崎君は薄暗い店の中でライトを浴びているグランドピアノの前に

座った。

あ、音楽に疎いあたしでもこれは知ってる。

ビートルズのイエスタデイだ。

この店の雰囲気によく合っている。

穏やかな旋律が心地よい。

圭介を忘れられる？

圭介以外の人と結婚して、子供ができて、それであたしは幸せになれる？

それがあたしが欲しいもの？

あたしは美しい音色に身を委ねながら、ライトを浴びているピアノ奏者を見つめていた。

## 13話

岡崎君があたしを車でマンションまで送ってくれた時には11時になっていた。

3階の圭介の部屋の窓から明かりが洩れている。

あ、もう帰ってる。

心配してたかな？

「今日はありがとう。ごちそうさまでした。楽しかったよ。」

急いで助手席から降りようとしたあたしの腕を岡崎君は軽く掴んだ。

「また誘ってもいいですか？」

真剣な顔であたしの返事を待っている。

「いいよ。最初は友達からね。」

あたしは優しくその手を払った。

するりと外に出てドアを閉める。

スモークガラスの向こうで岡崎君がガッツポーズをしたのが見えた。

あたしは彼の車が見えなくなってから、マンションの階段を駆け上がった。

「ただいま。圭介帰ってる？」

あたしはワザと大きな声を出して部屋に入った。

その途端、ものすごい力で腕を掴まれ体が持ち上がった。

「い、いたたた！ な、何すんの！」

悲鳴を上げるあたしを圭介は表情も変えずに見ていた。

色素の薄い瞳が充血してバンパイアみたいだ。

間違いなく、ものすごく怒ってる。

「どこに行ってた？」

無表情のまま低い声で問いかける。

岡崎君にアドレス教えたの圭介だし、大体察しているんだろうけど。



それで怒ってるんだろうか？

「ま、前の誕生日会の店よ。メールもらって……。」

「岡崎か？」

「……うん。でも圭介が教えたんでしょ、あたしのアドレス。」

「……行くとは思わなかったからな。」

圭介はあたしの腕を尚もねじ上げる。

あたしは痛くて、顔をしかめた。

「ちよつと、痛いよ。放して。」

「あいつと何してきたんだよ？」

「何って……食事しただけよ。バカみたい。妬いてるの？」

頭にきたあたしはわざと挑戦的に言い放つ。

途端、腕を掴んでいた圭介の手の力が抜けた。

もがいていたあたしは、勢い余って尻餅をつく。

掴まれた腕が赤くなっている。

圭介は赤い目であたしをじっと見ていた。

「……妬いてるよ。バカで悪かったな。」

低い声でそれだけ言うと、くるりと背を向けて部屋から出て行った。

取り残されたあたしは座り込んだまま呆然とするしかなかった。

3DKのマンションで部屋から出て行っても、ベッドは一つしかないので再び顔をあわせるしかない。

しかも、今日は金曜日で明日は圭介も休みだ。

圭介は先にベッドに入っている。

何とも気まずい状態で、あたしも同じベッドに入るしかなかった。

こんなとき不便だから、別の部屋にもう一つベッドを置いとけばよかったのに。

圭介と顔を合わせない様にあたしはベッドの外側を向いて横になった。

「……圭介、寝た？」

あたしは暗闇の中、小さな声で囁く。

「・・・起きてるよ。」

ぶつきらばうに返事が返って来た。

「怒るくらいなら、なんで岡崎君にアドレス教えたの？」

「あいつがしつこくて断りきれなかった。でも、行くと思ってなかった。」

「行かないで欲しかったの？」

「・・・いや、行った方がいいと思ってた。」

「何、それ？」

あたしは吹き出した。

「圭介、言ってることが支離滅裂だね。」

「分かってるよ。でも、玲の希望が全部実現するならその方がいいかと思つて。でもよく考えたら嫌だった。」

暗闇の中、彼の顔は見えない。

でも、きつといつもの弱気な顔してる筈だ。

あたしは圭介を抱きしめたくなった。

「あいつに何て言われた？」

布団の中から声がした。

「一度だけ付き合つて欲しいって。それでダメなら諦めるって。圭介の許可も取るって言ってたよ。」

「あっそ・・・。で、おまえどうすんの？」

「お友達からって言った。でも、圭介が嫌なら断るよ。」

「・・・。」

しばらく沈黙が続いた。

もう寝たのかと思つた時、やっと声がした。

「いいよ、玲。あいつと付き合ってみるよ。それでおまえがオレから離れるなら、本当はそれが一番いいんだから。」

あたしは圭介の低い声を黙って聞いていた。

圭介から離れる。

今まで想像したこともない事だ。

でもそれがこのラビリンスから出る唯一の方法であることを、あたしは知っていた。

### 13話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。

ここで、一部が終了、新たな展開に入っていきますので引き続き  
宜しくお願いします。（^^）／

## 14話

風の音で目が覚めた。

昨日の天気予報で台風がきてるって言うてたっけ。

遮光カーテンを少し開けて外を見るとマンションの前の歩道に植えられた街路樹が、ゴウゴウ音を立てて揺さぶられている。

曇っているが空は白み始めていた。

傍らで穏やかな寝息が聞こえた。

玲はあどけない顔で布団に包まって眠っている。

長い黒髪、切れ長の黒い目、全然肉がついてない少年みたいな手足、甘い声……。

「なんで妹なんだろう……」

オレは玲を起こさないようにそっとベッドから降りた。

今日は土曜日で会社も休みだ。

だけど、今日だけは玲と一緒にいたくなかった。

昨日の決心が鈍ってしまうのは間違いないし、もしかすると今日も岡崎のヤツが連絡してくるかもしれない。

「オレの女に触んな！」

なんて言ってしまったら、恥ずかしいのは玲だ。

兄と近親相姦してたなんて他人に知られたらあいつの人生はメチャクチャになってしまう。

最初にみだらな行為をしたのがあいつが14歳の時だ。

それから、あいつが部屋に来てオレを求めるのをいつも待ってた。

20歳だったオレはそれが犯罪に成り得ることは自覚してた。

玲は女だから、オレとの関係をなんかロマンチックに捉えている。

昼ドラみたいに禁断の愛だと思ってるんだろう。

玲はイマイチ世間知らずで甘えっ子だ。

実際、他人が聞いたらオレ達は変態だ。

後ろ指差されることになるのは間違いない。

だからせめて責任は取ろうと、当時付き合ってた女の子とも別れて

玲だけを見てきた。

望まれる限り、オレは傍にいるつもりだった。

「子供が欲しいの。」

この前、あれを言われてからオレの覚悟が揺らいだ。

結局、オレの一人よがりじゃないのか？

本当に彼女に必要なものをあげることができないのに、責任を取ってるって言えないだろう。

オレが彼女を拘束して勝手にくつついているだけなんじゃないか？

この1ヶ月ずっと考えてた。

そんな時、会社で岡崎のヤツが言い出した。

クライアントを訪ねた帰りだった。

営業車を運転しながら、岡崎は突然言った。

「高田主任、妹さんのメルアド教えてください。」

悪びれた様子もなく、岡崎は堂々と言った。

こういうところが人に嫌われる所以だ。

オレも少しウザかったけど、岡崎のことは嫌いじゃなかった。

こいつは嘘がつけないから、信用できる。

「なんで？」

助手席でタバコを吸いながらオレは横目で睨む。

「メールを送りたいからです。」

岡崎は前方を見ながら返事をした。

バカにしてんのか？

と、言いたくなるがこれもこいつの本気だと分かっている。  
オレは苦笑いした。

「妹に手を出すつもりなら、オレを倒してからにしろ。」

「主任は倒せません。尊敬してますから。」

真面目な顔で岡崎は言う。

嘘がつかないのを知っているから、褒められると照れくさい。

オレはタバコの煙を窓の外に吐き出した。

「本気か？」

「本気です。先日のパーティーでひと目見て、この人だと思いました。」

真っ直ぐ前方を見ながら、岡崎はハンドルを切る。

横顔が少し赤くなっている。

生意気に照れてる。

オレと一緒にいたって所詮、生産性のない交わりが続くだけだ。

進展も終わりもない。

節目が欲しいって玲は言った。

オレと違って、岡崎は白黒けじめをつけないと気が済まないタイプだ。

こんなしつかりした男なら、フラフラしている玲をしっかりと抱きとめてやれるのかもしれない。

オレは携帯を胸ポケットから取り出した。

玲が行くわけない、と心の中では安心していたから。

オレはジーンズにシャツを着て、薄暗い玄関を出た。

エレベーターでマンション地下の駐車場まで降りる。

黒いワゴン車が久しぶりにやって来た主人を待っていた。

運転席に座ってエンジンをかけると、オレの好きなエアロスミスが

カーステレオから流れてくる。

玲がうるさがるので、車の中でしか聞けないオレのお気に入りアルバムだ。

岡崎のピアノにうつとりする玲の顔が浮かんだ。

それを掻き消す様にポリユームを上げる。

何がショパンだ。

ロックが好きで何が悪い。

騒音上等！

オレはアクセルを拭かしてまだ夜明け前の街に飛び出した。



## 15話

台風が近づいている。

生暖かい強い風が車に横殴りで吹き付ける。

雨は降ってないが、開けた窓からタバコの煙が逆流してくる。

オレは窓を締めてタバコを吸うのを諦めた。

曇った空はそれなりに明るくなってきた。

玲に何も言わずに来たけど、大丈夫かな。

メールでもしておこうか、なんて考えをすぐ打ち消した。  
話をしてしまったら元の木阿弥だ。

人気のない街を通り過ぎ、オレは海に向って走った。

1時間ほど走っただけで太平洋岸に出られる。

オレはいつも通り、海岸線に隣接した臨海公園の駐車場に車を止めた。

玲が帰ってくるまではオレは毎週末ここに来ていた。

倒した後部席にはサーフボードが無造作に置いてある。

サーフインはこの街に来てから始めたので、今だに上手いとは言い  
難い。

だが、一人で海の中にいる孤独感と開放感がオレは好きだった。

つまり波に乗ってる時間より、浮いてる時間の方が長いんだけど。

これがオレの日焼けの原因で、日本人に見えない所以だ。

海はかなり荒れていた。

真っ黒な波がどんどん生まれては飛沫を上げ消えていく。

オレは何も考えず、ボードを担いで海に入った。

たちまち波はオレの胸の高さまで来た。

確かにいつもと全然違う強さだ。

オレはボードにつかまりパドリングで沖の方へ向う。

突然、ボードが向きを変えた。

有り得ない方向に向って引っ張られていく。

初めての経験だった。

白い飛沫が海の中央に向って集まっていく。

オレは海岸に立ててあつた看板を思い出した。

渦潮注意！

遊泳禁止！

遊泳できるところでサーフィンできるかと、今まで気にしてなかった

あの看板。

これがそうか。

感心している間もなくオレは大波を頭から被り、海中に飲み込まれた。

ヤバイ。

完全に溺れている。

何とか顔を出して息をする間もなく、次の波が頭から襲い掛かる。

自分では岸に向って泳いでいるつもりなのだが、体は渦の中央に向ってどんどん引き寄せられている。

巻き込まれたら終わりだ。

オレはボードを捨て、垂直に海底に向って泳いだ。

どうやって辿り着いたか全く分からない。

半分意識を失ったようにオレは泳いでいた。

浮いたまま流されて来たというべきか。

足の裏に砂を感じ、オレはやっと立ち上がった。

ヨロヨロと砂浜まで上がって、そこでオレは仰向けに倒れた。

満身創痍とはこのことだ。

海水の飲みすぎで口の中が塩分でヒリヒリする。

オレを待っていたかのように大粒の雨が降り出した。  
痛いくらいの大粒の雨が素肌に降り注ぐ。

オレ、何やってんだろ？

死にかけてやっと我に返った気がした。

早く動かないと潮が満ちてくる。

分かってるのに、体が動かない。

冷たい雨にさらされている体はだんだん体温が下がっている。

眠気を感じて目を閉じかけた時、雨が突然遮られた。

目を開けると、傘を差した人の顔があった。

「大丈夫？ 溺れたの？」

女の人の声だ。

さっきの見たれたかな。

かっこわる……。

オレはボンヤリ考えながらまた目を閉じた。

途端、オレの頬にビンタが飛んできた。

一瞬、眠気が飛んでオレは目を見開いた。

「寝ちゃダメよ。ホントに死ぬよ。ホラ、立って。」

優しい声の持ち主は信じられない力でオレを抱き上げた。  
オレの腕を自分の肩に掛けると引きずるように歩き出す。

「私の家に行くよ。あなたも歩きなさい！」

オレは言われるままに両足を交互に動かした。

女の人なのに遅しいなあ。

オレは自分を支えるこの強い肩に、今は全面的に頼るしかなかった。

## 16話

砂浜を引きずられるようにオレは歩いた。

堤防を乗り越えるとガードレールの向こうに車道が見えた。

車の通りは全くない。

車道を横断したその先は何もない雑草が生い茂った空き地が広がっている。

背の高い黄色い花をつけたセイタカアワダチソウの中に小さな洋風の家が見えた。

「大草原の小さな家」みたいだ。

「休んで良くなるなら休んでもいいけど、なんなら救急車呼ぼうか？」

女性の声が耳元で聴こえた。

「大丈夫です。溺れて水飲んだだけですから。」

オレは笑って言おうとしたが寒さで声が震えている。

多分顔も蒼白だろう。

大丈夫でないことだけは確かだ。

「じゃ、少し休んでいったら？」

女性はそれだけ言うつ黙ってしまった。

オレは自分の無様な格好を想像して泣きたい気分だった。

何考えてたんだろう。

普通の状態だったら、台風の海に入るなんて考えなかった。

苛立ちを抑えることが出来なくてヤケクソになって海に飛び込んでしまったのか。

文字通り死にかけて、見知らぬ人に迷惑をかけている。

これから玲が本当にオレから離れて、他のヤツと付き合い始めたらどうなるんだろう？

オレは正気でいられるのかな？

家に着くと、タイル張りの綺麗な玄関にオレを待たせて女性は中に入った。

バスタオルとバスローブを持ってきてオレに渡すと、

「シャワー浴びたら？」

と、奥のドアを指差した。

「あ、すいません。」

オレは恐縮しながら足の砂を払って家の中に入る。

ピンクのタイル張りのバスルームは掃除が行き届いていてホテルみたいだ。

「別荘なのかな？」

オレはシャワーを浴びながらそんなことを思った。

海に隣接した場所といい、家の造りといい、仮の住居という感じが。熱い湯を浴びて何とか心地着くことができた。

気分は最悪だけど、体の震えは治まった。

「お礼言わなくちゃな・・・。」

担いでもらいながら、オレは顔さえよく見てなかった。

もはや命の恩人だ。

オレはバスローブを体に巻きつけ外に出た。

カントリー調のドアが並ぶ廊下に出ると、味噌汁の香りがした。洋風の家にそぐわないが、懐かしい香りだ。

一人暮らし始めてから、味噌汁なんて飲んだことない。

廊下の突き当りに掛かっているレースの暖簾をくぐるとキッチンだった。

さっきの女性が鍋に向っている。

味噌汁の香りはここからしていた。

「あの、ありがとうございました。何とお礼言ったらいいのか・・・」

オレはおずおずと声をかける。

女性はオレの声に気がつき、振り返った。

かなり大柄な人だ。

大柄なオレが思うんだから、女性としてはかなり大きいだろう。ウェーブのかかった黒髪を背中ですてきなルーズに束ねて、ちょっと外国人っぽい雰囲気だ。

インドのサリーみたいなロング丈のサマードレスが似合っている。日焼けした顔にはそばかすが散らばっている。でも、彫りが深くてきれいな顔だ。

「朝ごはんにするとここから少し待ってて。」

その人はあごでダイニングテーブルの椅子を指した。

オレはおずおずとそこに移動する。

やがて女性は茶碗とさっきの味噌汁が入った碗をトレイに載せ持ってきた。

テーブルにのつた炊飯ジャーを開けると、炊きたてのご飯が湯気をあけて現れる。

そのホカホカご飯を茶碗につけてオレに差出した。

「まず、食べたらず？お腹が減っていると変な事考えるんだよ。」

やっぱり自殺しに来たと思われるのかな・・・。

一応サーフィンが目的だったけど、そう思われても仕方がない。

「あ、はあ、すいません。」

オレは気恥ずかしくなりながらマヌケた返事をした。

ぼんやり見ているオレの前にご飯と味噌汁が並べられた。

久しぶりのまともな朝ご飯を前にオレは感動すら覚える。

「入ってるアサリはさっき浜で取ったの。毎朝散歩しながらアサリ取るのが日課なんだ。」

女性は箸で味噌汁を指して言った。

「あ、じゃあ、今日は邪魔してすいませんでした。」

オレは素直に謝る。

「別にいいけど。人が死んだところで取れたアサリなんて食べるの嫌でしょ？まだその気なら次からは他の場所ですてね。」

女性は笑顔を見せて言った。

オレは言葉もなく頷く。

オレ死ぬ気だったのかな？

死んでもいいとは思ったかも。

バカにも程があるけど、本当に死ぬことは想像してなかった。

温かい味噌汁を口にとると健康的な食欲が戻ってきた。

母親が作ったみたいな味だ。

「おいしいです。」

オレは思わず声に出した。

「でしょ？強靱な精神は強靱な肉体に宿るの。強靱な肉体には健康的な食事が必要。ちゃんとご飯食べてない人はくだらないことで悩むのよ。私、栄養士だからうるさいんだ。」

女性は自慢げに言った。

なるほど、タダの味噌汁じゃなくて野菜も入ってて健康に良さそうだった。

「かつこいいですね。ぼくは料理は全くダメなんで尊敬します。」  
素直に出た褒め言葉だったが、女性は赤くなって手を振った。

「資格があるだけで、仕事は要するに給食のおばさんだよ。手当てが人より1万円多くつくだけ。あたしこの先の車の組立工場の中の食堂で働いてんの。」



そう言えば、海岸線を岬に向って走った所に、社員寮や工場があった覚えがある。

じゃあ、この家に定住してるのか。

「ここ別荘かと思いました。」

オレは疑問を口にする。

「あ、元別荘を買ったんだ。バブルの時代に建てられてそのままになつてた中古物件だったの。海から近すぎて車が痛むけど、破格だったから買っちゃった。」

「・・・もしかして一人で住んでるんですか？」

「そう。バツ1だもん。女が一人で生きてくにはそれなりの覚悟と準備がいるからね。ローンも払っちゃったよ。」

女性は一瞬豪快に味噌汁を飲み干した。

## 17話

さつき降り始めた雨は勢いを増し、窓ガラスに叩きつけられている。台風 of 暴風雨だ。

風が窓に吹き付けられるたび、ガラスがカタカタ音を立てる。

溺れる前まではまだ薄明るかった空は真っ黒な雲で覆われ、部屋も薄暗い。

玲、怖がってないかな。

オレは窓に流れ落ちる滝のような雨を見つめてボンヤリ考えた。

「夜には上陸するかもね。もう止まないよ、今日は。」

女性も窓を眺めながら独り言のように言った。

「あ、今何時ですか？あの・・・」

オレは言いかけて女性の名前も知らないことに気付いた。

うわ、なんてこった。

メシまで食つといて自己紹介もしてない。

営業マンとしてあるまじき失態だ。

「今？あらもう11時ねえ。」

女性は大きな目を見開いてオレを見た。

これからどうする？と言いたげな顔だ。

「あの、本当にありがとうございます。ぼくは高田圭介といいます。よろしければ後日お礼に来たいと思いますので、お名前聞いてもいいですか？」

オレは今更だが、丁寧に挨拶した。

女性はキョトンとした顔でしばらく絶句していたが、やがてプッと吹き出した。

「何？突然会社の人みたいに。あなた意外に礼儀正しいのね。」

意外に、と言われたのはむしろ意外だったが、彼女にとってみればサーファー崩れの自殺志願男だ。

この出会いではそう思われても仕方がない。

オレは苦笑いして答えた。

「一応、これでも会社の人ですよ。あなたのお名前は？」

「私は中野奈津美。お礼なんていいよ。なんか楽しいしね。」

あはは・・・と彼女、奈津美さんは笑った。

日焼けした顔に白い歯がきれいだ。

「ねえ、お礼なんていいけど何で死にたかったのか聞いていい？」

奈津美さんは無邪気に、好奇心に溢れた顔で聞いてきた。

食後の熱い緑茶を飲んでいたオレは一瞬硬直する。

オレを助けた彼女には知る権利はあるし、知りたいのも当然だ。

だけど、まだ全てを話す勇氣はなかった。

玲との関係は今まで誰にも話したことがない。

だから、普通の人が聞いた時の反応をオレは想像することができなかった。

嫌悪感を持つかもしれないし、軽蔑されるかもしれない。

もしかすると、なんだそんなことか、って言われるだけかも。

でも、まだこの会ったばかりの女性に話すのは憚られた。

嫌われるのが怖かったのかもしれない。

「死ぬ気だったんじゃないです。いい波きてると思って飛び込んだら渦に巻き込まれて溺れたんですよ。」

当たらずしも遠からず、オレは無難な返事をした。

ヤケになってたけど死ぬつもりはなかったから、少なくとも嘘ではない。

「あ、なんだ。そうなの？あたしてつきり・・・。ごめんね。」

奈津美さんは手で口元を押さえて驚いた。

その表情が意外にかわいい。

この人の歳、幾つ位なんだろう。

「実はね、ここに住んでると時々来るのよ。そういう人。ホントにヤバそうな人には、海が汚れるからヤメテ！って怒鳴ってやるんだけど。」

「ああ、なるほどね。」

オレは納得した。

オレが初めての救出者じゃないんだ。

奈津美さんは続けた。

「でも、死にたい気持ちも分かるからね。悩みのない人はいないし。だからせめてご飯食べて元気出してもらいたいって思うんだ。おいしいもの食べた後にヘンな事考えないからね。」

オレはこの話を聞いて、心が温かくなった。

お母さんみたいな包容力。

オレも玲もおいしいもの食べたのなんていつだったんだろう？だからオレ達は病んでるのかな？

「どうする？車で来たんでしょ？帰るなら車まで送るけど。」  
オレははっと我に返る。

奈津美さんの顔が至近距離にあつて、オレを見つめていた。

ドレスの上からでも分かる豊満な胸の谷間が、身を乗り出した時にチラリと見えて、オレは思わず目を逸らす。

玲のポリウームの少ない胸しか見たことがないオレには刺激が強過ぎる。

「え、あ、そうですね。奈津美さんは今日はお仕事あるんですか？」  
オレは動揺しながら、胸元を見ないように言った。

「今日、土曜日だもん。休みだよ。ついでに明日も。本社のカレンダーに合わせてるから休み多いんだ。」

奈津美さんは舌を出して笑う。

「圭介くんは？仕事ないの？」

「オレ？ないよ。土日休みだから。」

あ、ヤバイ。

いきなり名前で呼ばれて、思わずタメ口が出てしまった。

慌てて口を押さえたオレを見て、奈津美さんは笑った。

「いいよ、普通で。私そんなに歳じゃないから。」

「あ、すいません。じゃ、・・・普通に話すね。」

ヘンな返事をしたオレを見て、奈津美さんはまたあはは・・・と笑った。

なんか完全に子供扱いされてる。

この人には絶対敵わない。

そう思った。

彼女がいるこの空間がオレには心地良かった。

## 18話

「圭介は動物に喩えると黒豹だね。」

動物占いなる変な本が流行ってた時、玲が言っていた。

「オレってそんなにワイルド？」

気を良くしたオレが言っていると玲は残念そうに首を振った。

木にダランと寝そべっている時の豹が、オレがダラダラしてる姿に似ているそうだ。

オレは大いにガツカリした。

かく言う玲はオレに言わせればシャム猫だ。

我儘で気が強くて、でも一人で何にもできない。

気まぐれで、寂しがりで、愛されてないと生きていけない愛玩用小動物。

奈津美さんは、玲と対極にいる女性だ。

女性に対して失礼だけど大型草食系動物、言わば象みたいだ。

大きくて、優しくて、その大きさでつまらない物なんか跳ね返してしまう。

一人で生きていける野性の強さを、この人は持つてる。

温かい緑茶をお替りしながら、オレは結局その後も雨を眺めながら彼女とたわいもない話を続けた。

ふーん、とか、ほんと〜とか、適当に相槌を打ちながら奈津美さんはオレのヨタ話を楽しそうに聞いてくれた。

雨が本当に強くなって外が真っ暗になった頃、オレはようやく立ち上がった。

「そろそろ帰るよ。これ以上いると明日まで帰れなくなりそうだ。

今日は本当にありがとう。また改めて御礼にくるから。」

オレは右手を差し出した。

奈津美さんも立ち上がって、オレの右手を握り返す。

温かい大きな手だ。

かなり長身の上、肉付きが良いせいで、一回り大きく見える。

「奈津美さん。」

「なあに？」

「デカイですね。オレもデカイけど、こんな女性初めて見・・・ぐ！」

オレの腹にパンチが入る。

「もうよく言われるんだから、言われなくても分かってますって。」  
奈津美さんは殴るマネをして舌を出す。

冗談のパンチなんだろうけど、半端でない腕力にオレは少し咳き込んだ。

「車まで送るね。そのバスローブは貸しとくから着て帰っていいよ。」

彼女は車のキーを掴んでウィンクして見せた。

オレはバスローブの中は全裸だったのを思い出し、慌ててはだけた両襟を合わせる。

玄関を出た途端、すごい雨が顔を叩きつける。

奈津美さんが開いた傘が風に煽られ、逆の方向に開いている。

「もう、走るしかないよ。圭介君、あそこまで走って！」

奈津美さんは傘を捨て、草むらに止めてある軽自動車に向ってダッシュした。

オレも後に続いて雨の中に飛び出した。

何とか車の中に入った時には、二人ともずぶ濡れだった。

「あーあ、もうしょうがないな。車どこに置いたの？」

濡れた髪をかきあげて、彼女は助手席のオレを見た。  
生地の薄いドレスが雨に濡れて体に張り付いている。  
体の線がはっきり見えてオレはあることに気付いた。

ノーブラ・・・？

「え、ああ、車ね。臨海公園の駐車場。」

赤面しながら、オレは前を向いて返事をした。

中学生みたいだけど、スケベだと思われたくない。

って、36歳にもなって何言ってるんだ、オレ。

「えー、こっから少し距離あるよ。結構流されて来たんだね。」

奈津美さんはオレの動揺に気付いた様子もなく、エンジンをかけた。

臨海公園の駐車場にはポツンとオレの車だけが止まっていた。

その横に奈津美さんは軽自動車を横付けする。

「もう暴風警報でてるよ。気をつけて帰ってね。」

彼女は手を振った。

「またバスロープ返しに来るよ。御礼もしたいし。あの・・・。」

オレは口ごもった。

「なに？」

「本当はすぐくやけになってた。まさか死にかけるとは思ってたかったけど。でも、何か落ち着いた。

ありがとう。」

「人生、そんな時もあるって。」

奈津美さんはオレの肩をポンポン叩いた。

自分の車に乗り移って、彼女の車が雨の中去っていくのを見届けた後、オレは取り合えずＴシャツとジーパンに着替える。

時計はもう4時を回っていた。

この雨の中、急いで帰っても多分6時だ。

玲は今日何か食べたかな。

オレは奈津美さんの温かい味噌汁を思い出した。

今日は玲の為にオレが料理してみようか。

上手いかどうか分かんないけど。



オレはそんなことを考えながら、嵐の中を高速に向って車を走らせた。

## 19話

暴風雨の中、高速道路を走って何とかオレは玲の待つマンションまで辿り着いた。

地下の駐車場に車を停めて、時間を見るとやはり6時を回っている。台風、怖がつてたかな。

いや、まず黙って出て行ったこと怒ってるだろう。今日の事なんて言おうか。

オレは言い訳を考えながらエレベーターに乗った。

マンションのドアの鍵は掛かっていなかった。

「ただいま！玲、いるかあ？」

オレは大きめの声で呼んでみる。返事がない。

靴を脱いで部屋の中に入ると、リビングのソファにちょこんと座っている玲が見えた。

いつものジャージ姿ではなく、ふんわりしたチュニックを着ていた。唇を噛み締め、神妙な顔でオレを睨んでいる。

やっぱり、怒ってるよな。

「玲、ごめん。今日・・・。」

オレが声を掛けたとしたその時、玲は駆け寄って抱きついてきた。首に腕を巻きつけてしがみつくと、貪るようにキスをする。

オレはそれを黙って受け止めた。

キスを続けながら、玲はオレの着ていたシャツを掴み強引に脱がす。細い手がオレのジーパンの中に差し込まれ、弄び始める。

オレはされるがままになっていた。

「圭介、いつもみたいにして・・・。」

キスをしながら玲が切ない声を出す。

オレは少し躊躇した。

これでは、昨日の決心と今日死にかけた意味がなくなってしまう。兄としては、止めるべきなのは分かった。

「玲、もうやめよ・・・」

「お願い！ねえ、圭介・・・」

玲の声が大きくなり、オレの下半身に触れていた手に力が入る。結局、オレは玲に逆らえなかった。

自分でもこの流される性格が嫌になる。

彼女の意思に抗えず、オレは言われるまま玲の体を抱きしめた。

キスを受け止めながらチュニツクの下から手を入れ、細い体を愛撫し始めた。

その時。

ゴトン、と窓の方で音がした。

オレはギョっと思わず手を止めた。

誰がいる？

音がした方を振り返ると、オレがいつもタバコを吸ってる窓のところに人が立っているのが見えた。

いつもの白い顔を更に白くさせて、そいつは驚愕の表情でオレたちを見つめていた。

足元には今音を立てて落とした携帯電話が転がっている。

そのまま固まったオレに抱きついたまま、玲はそいつに向って言い放った。

「これで分かったでしょ？こういうことなの。だから、あたしにはもう関わらないで！」

何がどうということなんだ？

オレは状況が把握できないまま呆然としていた。

何がどうなって、どうしてこいつがここにいるんだ？

しかもオレ、こいつの前で何してた？

上半身裸でジープンの中に手をつ込まれたままの状態で、オレは何とか声を出した。

「・・・岡崎？」

そこに立っていたのは、まぎれもなくオレの部下だった。

## 19話（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。  
ここで一応2部が終了です。

宜しければ今後もお付き合い下さい。

感想など頂けると嬉しいです。（^^）

## 20話

初めて好きになった女性が目の前で実のお兄さんと性行為をしていたらどうする？

しかも、そのお兄さんが自分が尊敬する職場の上司だったら？

それが今、目の前で繰り広げられている。

ぼくは必死で今の状況を分析しようとしていた。

まず、第一にアダルトビデオ以外で他人が性交渉に及んでいるところを見たことがない。

いや、それはぼくだけではない筈だ。

殆どの一般人はリアルに他人の行為を見たことはないに違いない。

目の前で行われる男女の光景を、ぼくは呆然と見つめていた。

最初は彼女が無理矢理コトに及んで、ぼくを失望させようと試みているのだと思った。

だけど相手の男、高田主任は慌てることなく彼女を受け止めそして・・。

まるで日常茶飯事のようだった。

いや、そうなんだろう。

二人の動作は自然だった。

当然のように抱き合い、一つになって、そして認めたくないけどお似合いだった。

きれいだとさえ思ってしまった。

そこにぼくが入れる余地は全くないのを見せ付けられたのだ。

それならそれでいい。

ぼくの完敗だ。

普通の男女だったならそう思って潔く身を引いただろう。

でも。

でも、あんたたち兄妹じゃないのか？

こんなのアリか？

ぼくは姉さんとこんなことできるだろうか。

いや、無理だ。

二人いるぼくの姉は、弟にとっては人ですらなかった。

ヤツらは弟のおやつやお小遣いをくすねていく、油断のならない天敵だ。

どうしてこんなことができてしまう？

しかもこの半裸の男性は、昨日一緒に営業に行った高田主任だ。  
この現実をどう受け止める？

「岡崎？」

主任が彼女に絡みつかれたまま、ぼくに聞いた。

「はい。岡崎です。」

ぼくは何を言ったらいいのか分からなくて、我ながら間の抜けた返事をした。

おもむろに床に落ちた携帯電話を拾い上げてズボンのポケットにねじ込む。

「すみません。分析に時間がかかりますので今日は失礼します。」

ぼくは頭を下げ、まだ抱き合ってる二人の前を通って部屋を出た。

表情が少ないぼくは、多分いつもと同じ顔をしていただろう。

でも、人生初めての出来事に動揺していた。

靴を履かずに出てきたことに気付いたのは、車に乗ってアクセルを踏んだ時だった。

初めて彼女、高田玲さんを見たのはBlue Moonで誕生日会を

した時だった。

「オレ、妹の誕生日間違えて花買っちゃったんだよな。」

職場で何気なく口にした高田主任の言葉に女子社員が食いついた。

「えゝ！ありえない。かわいそうですよ！」

「主任、リベンジするべきです。記念日にしてあげなくちゃ！」

こいつらは主任と飲める場所が欲しいだけだ。

主任に気のある女子が言い出すと、今度は彼女達と一緒に飲みたい男性社員が援護射撃する。

「そういうことなら、オレ達企画しますよ。」

「盛大にやりましょうよ。」

「場所は、岡崎、おまえ選んでおけよ。」

突然、自分に白羽の矢が立ってぼくは困惑した。

まあ、いいか。

友人が勤めてるあの店なら気が利いてるし、料理もそこそこだ。何より売り上げに貢献してやれる。

ぼくは幹事を請け負った。

それがイレギュラーなど皆無なぼくの人生を根底からひっくり返す出会いに繋がっていくとは、その時はまだ思ってもみなかった。



## 21話

ぼくにとって、高田主任は尊敬する上司であり、男として憧れる人物であり、いつか越えたい目標だ。

だから、たかが誕生日会の余興のライブでもピアノで彼のギターに負けるわけにはいかなかった。

冷静を装いながら、僕はかなり必死に弾いていた。

その演奏の最中に彼女と目があつた。

きれいな女性だ。

漆黒の長い髪、白い肌に切れ長の目、細い首筋。

何より気を引いたのは何故か悲しげなその雰囲気だった。

この女性は本当の孤独を知っている。

ぼくが待っていたのはこの人だったのかもしれない。

いろんな所で孤立した存在だった僕にはそう思えてしまった。

でも、ホントに似てないな。

それも正直な感想だ。

それから思い切って主任にアドレスを聞いた。

それが昨日の営業車の中のことだ。

主任は案外あっさり番号とアドレスを教えてくれたのだ。

ぼくは主任が応援してくれるのかと、期待さえしてしまった。

その晩、ぼくはBlue moonに彼女を呼び出し、告白した。

ぼくのピアノが好きだと言ってくれたし、帰り際に友達からならと、一応了承は得た筈だ。

ぼくは本当に友達から始めるつもりでいた。

翌日の昼過ぎ、ぼくは改めてお礼の電話をした。

台風が接近していて、かなり雨が強くなっている。

まさか外出はしていないだろう。

昨日はお疲れ様、今度はいつ逢えます？なんて月並みなことを聞く予定だった。

長いコール音の後、やっと携帯が繋がった。

「あ、玲さんですか？」

「……うん。」

「昨日はお疲れ様でした。」

「……うん。」

元氣のない彼女の声にはくはすぐ気付いた。

「玲さん、何かありましたか？」

「……。」

「もしかして、泣いてます？」

ぼくの質問の後、電話の向こうから彼女が声を殺した泣き声が聞こえた。

「どうしたんですか？」

「……圭介が……いなくなったの。起きたらもういなくなってたの。」

彼女のすすり泣きをぼくは何と言ったらいいか分からず、黙って聞いていた。

「もしかして、ぼくとの交際のこと、何かあったんですか？」

「圭介は付き合えて言っただわ。でもごめんなさい。あたし……。」

「ぼくは慌てた。」

何があったか知らないが、ぼくの事で主任が彼女に辛く当たっているなら放っておけない。

この先、深い付き合いになったら主任はぼくのお兄さんになるのだから。

ここは良好な関係を保っておきたいところだ。

「分かりました。今からすぐにそちらに向います。詳しい事情はそ

の時に。」

ぼくは携帯を切って車のキーを掴んだ。

交際を反対されただろうか。

だったら、昨日何故ぼくにアドレスを教えてくれたのだろう。

とにかくぼくのせいで、二人の関係が悪化するのには耐え難い。

ぼくは昨日彼女を送ったマンションに向って、雨の中車を走らせた。

## 22話（前書き）

今更ですが、このお話は前回書きました「ラビリンスで待ってて」の続編です。

読まなくても面白いように書いているつもりですが、二人の若き日々を知りたい方はそちらも読んで頂けたら幸いです。

## 22話

マンションの前の歩道に車を乗り入れた。  
この嵐の中で歩道を歩く人も、駐禁を取り締まる警察もいないだろう。

ドアを開けた途端、雨が顔を叩きつける。

ぼくは車から飛び出してマンションのエントランスに飛び込んだ。  
たった5、6mの距離なのに、もうズブ濡れだ。

眼鏡から水滴が滴ってくる。

濡れた頭をかき乱しながら、携帯電話を取り出しコールした。

彼女は今度はすぐに出てくれた。

「玲さん？岡崎ですが、今マンションにいます。何号室です？」

「本当に来てくれたの？」

彼女は驚いた声を出す。

「ぼくのことと主任とモメたのなら、ぼくの責任です。来るのは当たり前です。」

「・・・ありがとう。でも圭介まだいないよ。」

「分かってます。せめて何があったのか教えて欲しいんです。外で話すなら車出しますから。」

「いいよ、入って。三階の305号。」

それだけ言うと、電話が切れた。

ぼくはエレベーターの三階のボタンを押した。

「入って。何にもないけど。」

ドアの前で玲さんは、ぼくがエレベーターを上がって来るのを待っていた。

ふんわりしたチュニックに細い足によく似合うレースのついたレギンス。

昨日の黒い切れ長の目が、泣いたせいで赤く腫れている。  
涙の似合う女性っているんだな。  
こんな時なのにぼくは冷静に別のことを考えてしまった。  
悪い癖だ。

「失礼します。」

玄関に入ると、ラベンダーの香りに混じってタバコの匂いがした。  
リビングの中はソファと小さな丸テーブル、そしてテレビがあるだけ。

隅っこに、主任が先日誕生日会で使ったエレキギターとアコースティックギターが並んで立ててあるのが見えた。  
きれいだけど、なんと言うか生活感のない部屋だ。  
ぼくは観察しながらソファに腰掛けた。

「濡れてるよ。」

玲さんがタオルを手渡してくれた。

ぼくは恐縮してそれを受け取り、まず眼鏡を拭く。

「眼鏡取った方が若く見えるね。」

彼女はぼくの顔をまじまじと見つめながら言った。

「よく言われますが、ないと全く見えませんので。」

全く見えなかったが、彼女の視線を痛いほど感じてぼくは赤面した。  
「来てくれてありがとう。心配かけてごめんね。でも、大したことじゃないの。」

彼女は続けて言った。

「圭介は岡崎君のこと信頼してるし、お付き合いには賛成してるよ。  
でも、あたしやっぱりダメなの。」

岡崎君と付き合うことはできません。ごめんね。」  
ぼくは眼鏡を掛けなおして彼女の顔を見た。

少し微笑みを浮かべて彼女は優しく、そしてきっぱりと言った。

「理由を聞いてもいいですか？」

内心は当然、失望で心が折れそうだったが、ぼくも努めて冷静な声を出す。

「あたしずっと好きな人がいるの。その人とは絶対結ばれることはないけど、やっぱり好きなの。だから他の人を好きになれない。」

「どうして、結ばれることができないのですか？まさか相手は既婚者？」

深刻な顔で聞いたぼくを見て彼女は笑った。

「よく言われるけど、不倫じゃないよ。でも、一緒にはなれないの。」

「

一緒になれない人を想っていても幸せになれないと思いますけど。想ってるだけで幸せなんですか？」

多分、ぼくはまた余計なことを言ってしまった。

彼女はぼくのその一言を聞くと、両手で顔を覆った。

細い肩が震えている。

ああ、もう。

だからぼくは会社で嫌われるんだ。

いつも言ってから気が付く。

「玲さん、すいません。ぼくまたくだらないことを・・・。」

「いいの！だって本当だもん。」

彼女はしゃくり上げながらぼくを見上げた。

「本当は幸せじゃない。一緒にいても虚しくなるときがあるの。このままどんどん年取って、そのうち子供もできなくなるわ。あたしだって女の子だから一度くらいウェディングドレス着たいし、婚姻届け出したい。」

「だったらぼくにしておいた方がいいですよ。ぼく子供意外と好きですから。」

玲さんは涙を流したままキョトンとしてぼくを見た。

ぼくはまた変な事を言ってしまった？

しばし硬直した後、彼女は吹き出した。

声を上げて笑い転げる。

ぼくは何がおかしかったのか冷静に思い返していた。

「岡崎君、いつも本気で言っちゃうんだね。」

「はい、本気です。ぼくはいつ子供できてもいいですよ。」

そこで初めて自分が言った事に気が付き、ぼくは赤面した。

まだ交際も始まってないのに。

気が早すぎるぞ、悠樹。

「岡崎君となら楽しい家庭になりそうなのだね。残念。」

彼女はそう言って立ち上がった。

「笑ったらお腹減った。ピザでもとろうよ。あたし今日何にも食べてないんだ。」

「あ、ぼく作ります。料理得意なんですよ。」

ぼくも慌てて立ち上がった。

ピアノ以外にも特典があることをアピールしておきたいところだ。

「ありがたいけど、何にもないよ。ビールとパスタくらいしか・・・」

「」

「パスタあれば大丈夫です。台所借りますよ。」

リビングとつながったアイランド式のキッチンにぼくは立った。

冷凍のコーンとサラミ、乾燥パスタ、ツナ缶。

本当に何にも入ってない冷蔵庫を見てぼくは啞然とした。

この二人何食べて生きてるんだろう。

ツナ缶を使った和風パスタにコーンバターとサラミのコンソメスープ。

メニューはこれでいこう。

キッチンに立つぼくの周りを、彼女は子猫のようにウロウロしながら観察していた。

背の高いぼくの後ろから爪先立ちで鍋を覗き込む。



そんな姿が子供みたいでかわいらしい。

やがてダイニングテーブルにぼくの作ったパスタ定食が並んだ。  
外はもう真っ暗になっている。

台風は勢いを増し、窓の外で木がゴウゴウ音を立てて揺さぶられていた。

「もう夕ご飯だね。」

「少し早いけど。お腹が減ったらまた夜食作ります。」

ぼくは彼女の反対側の席に着く。

きっとここは高田主任の席なんだろうな。

ぼくの Pasta を彼女はおいしそうに食べ始めた。

そのおいしい顔を見ているだけでぼくは満腹になった。

ぼくの作った料理を彼女が笑顔で食べる。

こんな日常が実現したら、どんなに素晴らしいだろう。

「岡崎くんとこんな風にいられたら楽しいだろうな。」

玲さんは突然言い出した。

「はい、ぼくもそう想ってました。」

彼女は寂しそうな笑みを浮かべる。

「ごめんね。嬉しいけどダメなの。」

「やつぱりぼくに替えるわけにはいきませんか?」

ぼくはさすがのように彼女に問いかけた。

玲さんは思いつめた顔で黙り込んだ。

しばし沈黙が続いた後、彼女は意を決したような顔でぼくをまっすぐ見つめた。

「岡崎君には話すね。あたし圭介のことがずっと好きなの。男性と

して、  
ね。」

## 23話

彼女は神妙な顔でぼくの反応を見ていた。

「はあ……。まあ主任はかつこいいですけどね。男から見ても。」

ぼくは言われた意味がよく把握できず、無難に返事をした。

妹が兄を好きって、まあ普通じゃないのか。

改まって言うことでもないだろう。

ぼくの的を得ない反応に彼女は若干苛立ちを見せた。

「だから、あたしの好きな男は圭介だってこと！だから岡崎くんとはお付き合いできないの。」

ぼくは首を傾げて考えた。

「分かりました。でもお兄さんを好きでも戸籍上、婚姻はできないかと。」

「分かってるよ。そんなこと。」

「それにお兄さんと子供を作るのは少し問題があるかと。」

「もー！岡崎君、あたしの言ってる意味、分かってるの？分かってないの？」

彼女はヒステリックに怒鳴った。

多分この時ぼくは分かってなかった。

言葉の意味は分かっても、それが実際どういうことなのかを理解していなかった。

理解しないまま、ぼくは冷静に返事を続けた。

「分かってますよ。でも、お兄さんが好きでもぼくは構わないけど。だって家族ですから縁切る訳にもいかないし。」

「岡崎君、分かかってない！全然分かかってないよ……。」

彼女が肩を落として脱力した時、玄関からドアを開く音がした。

「玲！いるかあ！」

聞き覚えのある低い声がした。

高田主任が帰ってきたようだ。

ぼくは女性が一人の時に部屋に入り込んでしまった事実をどう釈明しようかと、腰を浮かせて立ち上がろうとしたその時、彼女の細い手がぼくの腕を掴んだ。

ぼくを睨む彼女の目に強い意志を感じる。

ぼくを引っ張って体を寄せると、彼女はぼくの耳に囁いた。

「隠れてて。どういふことが教えてあげる。」

言われるままにぼくは窓際に誘導され・・・。

そして本当の意味を知った。

月曜日の朝、ぼくは悶々として会社に向った。

台風はあの土曜日の夜のうちに進路を変え、日曜日は秋晴れが広がった。

オフィスの周りの街路樹は台風一過、落ち葉を撒き散らし、アスファルトの上に山ができている。

もう10月だ。

あの夜のことは夢だったのだろうか。

一夜明けると衝撃は曖昧な記憶に変わり、今朝になると更に記憶は薄くなった。

デスクに座って、いつも通りメールのチェックから始める。

やかましいハデな女子社員達（ぼくはこいつらが苦手だ）の甲高い声が聴こえてきて、日常が始まる。

高田主任のデスクをチラリと見る。

パソコンがまだ立ち上がってない。

もしかして、休みか？

と、思った時、会議室から課長と高田主任を含む、何人かが出てきた。

何だ、会議だったのか。

ぼくがその後もぼんやりメールを見ていると、後ろからクリアファイルでいきなり頭を叩かれた。

振り返ると、そこには高田主任が立っている。

夢だと思ったかったあの光景が、主任の顔を見るなり鮮明に脳裏に蘇って、ぼくはまた赤面した。

「岡崎、おまえの担当のオランダ産球根。」

ぼくの反応に気付かぬフリをして、いつも通りの顔で高田主任は話し出した。

「は、はい。今日コンテナが入る予定です。」

「それが昨日の台風で遅れてんだってよ。この猛暑で品質にも影響があるかもしれない。とにかくクライアントに詫び入れだけに行くぞ。出荷の予定を変更してもらわないと……。」

ぼくは青くなって立ち上がった。

会社の営業車の鍵を掴んでぼくは高田主任と駐車場に向った。

キーを差し込んだ時、主任はぼくを制してウイंकしてみせる。

「今日は代わるよ。事故でも起こされたら大変だからな。」

「だっ、大丈夫です。よけいな気遣いは……。」

反論しかけたぼくの前に、主任は大きめの紙袋を突きつけた。

「……これは？」

「おまえの忘れ物。」

あの夜、マンションに忘れていったぼくの革靴がそこに入っていた。  
「……！」

やはり夢ではなかった。

ぼくは激しく動揺し声も出せず、大人しく助手席に乗るしかなかった。

運転しながら主任は窓を開け、ポケットからタバコを取り出し口に咥える。

ぼくは何を喋っていいものか分からず、黙っていた。

「何か言えよ、岡崎。」

先に口火を切ったのは主任だった。

運転しながら横目でぼくを観察している。

目を細めた時の表情とか、横顔は確かに玲さんに似ている。

血が繋がってるんだから当然か。

こんな時にまた場違いなことをぼくは考えてしまう。

「気持ち悪いだろ？」

自嘲的に言っていると主任は笑った。

「いいえ、そんなことはないです。」

「別にいいよ、正直に言っても。」

「むしろ、きれいだと思います。その、二人が愛し合ってる姿が。」

「……………」

ぼくは率直な感想を口にした。

「……………あつそ。ありがとう。」

主任はぶっきらぼうに言って、髪をかきあげる。

普段は真面目な人なのに、時々見せるやさぐれた雰囲気の色気がある。

男のぼくでもかっこいいと思う。

「……………いつからなんですか？」

この際だから思い切って突っ込んでみた。

主任も今日はそのつもりだろう。

余裕のある態度は開き直ってる証拠だ。

「オレが二十歳の時から。あいつは14歳だった。」

前方を見てハンドルを切りながら、主任は返事をする。

14歳？

ませてないか？

ぼくが14歳の時なんて女の子と話すことも恥ずかしかったのに。

「・・・それは犯罪ですね。」

「自覚してるよ。でも、やめられなかった。通報するか？」

「いえ、もう時効でしょう。」

「・・・だな。」

タバコの煙を窓の外に吐き出し、主任は話し続けた。

「オレは変態で犯罪者でいいんだ。でも、玲は普通の女の子だからな。これ以上オレと一緒にいてもダメなんだ。女性として幸せになつて欲しいからさ。」

「・・・はあ。」

「玲のこと、嫌いになった？」

横目でまたぼくをチラリと見る。

間違いなくぼくを試している目だ。

「いいえ。」

ぼくははつきり言った。

衝撃のワンシーンの前の穏やかな夕食。

子供のような彼女の食べる姿。

あの時確信した。

ぼくは彼女が好きになったのだ。

「主任の許可が下りれば、ぼくは彼女にもう一度、交際を申し込めます。お兄さん相手じゃハンディはあると思いますが、ぼくには結婚できるというメリットもある筈です。」

「へえ？まずオレよりいい男でないと、玲はなびかないと思うけど

？」

主任はニヤリと不敵に笑って見せた。

「ぼくも負けじと睨み返す。」

「シヨパンがガンズに負けるはずありません。兄だろうと何だろうと、他にいい男が現れたら彼女だって忘れる筈です。ぼくは頑張ります。」

怒るかと思いきや、主任はあはは・・・と声を上げて笑った。

「オレ、そう言ってくれるヤツを待ってた気がする。玲にも言ってくよ。またピアノ弾いてやってくれ。」

主任は右手でハンドルを操りながら左手でぼくの肩に軽いパンチを入れた。

ぼくはその拳を手で受け止める。

「それは許可が下りたってことですか？」

「許可するよ。でも、おまえが男として振られたなら、オレにはどうしようもないからな。頑張れば？」

ぼくを見ていた横目で器用にウィンクして、主任はまたタバコを啜えた。

話終わって、あの夜からの胸のつかえが降りた気がした。

やっぱり器が大きい人だ。

この犠牲的精神も、少し人生投げているような脱力感も、こういうバックグラウンドがあって形成されたものなんだろう。

きつと妹を守ろうと、今まで自分を捨ててきたに違いない。

「じゃ、仕事の話でもするか。この猛暑で多分コンテナの中の半分は腐ってる。損害の賠償はどうするか……。」

ああ、その話があった。

ぼくは宙を仰いで溜息をつく。

だがむしろ気分は爽快で、ぼくたちは怒り心頭に違いないクライアントの元に向った。



その夜、彼女から携帯に電話があった。

ぼくは飛びついて着信ボタンを押す。

「はい、岡崎です。」

しばらく沈黙があった後、彼女の小さな声がした。

「・・・あたし。玲です。この前は驚かせてごめんなさい。」

「いえ、あの、主任から許可もらいました。正式に一度お付き合いして下さい。」

ぼくは一気に言い切った。

電話の向こうで少し困惑気味な彼女が目に見えかぶ。

「・・・圭介に話聞いたけど。あたしが好きなのは圭介なの。あなたを好きになれるか分からない。」  
言うと思った。

ぼくは用意していた持論を展開した。

「主任がお兄さんなのは仕方ないですが、もっといい男が現れたら交換するべきです。ぼくは主任より気に入ってもらえるように頑張ります。だから天秤に掛ける為にも一度お付き合い下さい。」

「ポジティブだね。」

玲さんはあははと笑った。

ああ、分かった。

似ているのは話し方だ。

ぼくは玲さんを好きになる前から、主任のことが好きだった。主任のことが好きな彼女を好きになるのは、自然なことだったのかもしれない。

「いいよ。じゃ、どっちがお徳か付き合ってみる。」

彼女の明るい声がした。

よし！

ぼくはこぶしを握り締める。

でも、これだけは言っておかなければ。

「シングルベッド発注しておきますから受け取って下さい。ぼくの最初のプレゼントです。」

そして主任への先制攻撃だ。

電話の向こうでは・・・と笑う声が出た。

## 24話

バスローブを巻きつけた圭介君が黒いワンボックスに乗り込んだのを見届けて、私は家に向って車を走らせた。

体にベッタリ張り付いたサマードレスが冷たくなって体温を奪っていく。

私はくしゃみをして、暖房をつけた。

彼はどこから来たのだろう。

台風が上陸する前に帰ればいいのだけど。

私はさっきまで助手席に座っていた不思議な遭難者を思い出していた。

この海岸沿いの別荘に住み始めてから、生死の瀬戸際の人に何人も出遭った。

つまり、この海に死に場所を求めてやって来る自殺志願者。

夜中に一人で浜辺を歩いていたり、スーツのまま車で浜に来るのは要注意だ。

圭介君もそんな一人だと、私は疑わなかった。

海水パンツも履いてたから、少し考えたらサーファーだって分かっただろう。

でもその時、私は彼と共鳴したと感じた。

私は死にたがっている人と共鳴するのだ。

嵐が来る前に、私はアサリを取ろうと浜に出かけた。

すでに海は真っ黒に色を変えて暴れていた。

雨降り出す前に帰らなくちゃ。

思った矢先に、海の中からよろよろと出てくる男性を発見した。  
大波に足を取られながら、何度も海の中に転がってその人は浜辺に  
辿り着いた。  
咳き込みながら砂の上に身を投げ出してその人は動かなくなった。  
私はその人を担いで家に連れて帰った。  
それが圭介君だった。

彼は大柄な人だった。

大柄な私が思うのだから、男性の中でも大きいに違いない。

日焼けした肌、長い手足。

色素の薄い琥珀色の瞳がきれいだった。

日本人離れた風貌だ。

れっきとした成人男性なのに、少年のような雰囲気を持っていた。

その時、私は既に彼を自分の子供の面影と重ねていたのかもしれない。  
い。

この海で死んでしまった息子の直弥に。

家に到着した時、私が駐車していた場所に既に別の車が止まっていた。  
た。

私は顔をしかめる。

あの男が来ている。

昨日が給料日だったから、もう狙ってきたのだろう。

私が車から降りると、止まっていた車のドアが開いてあの男が飛び  
出してきた。

車の中で私が戻るのを待っていたのだ。

彼は私の腕を掴んでニヤニヤ笑った。

その醜悪な表情を見るだけで吐き気がする。

「この雨の中、待ってたんだ。茶くらい出してくれてもいいんじゃない  
ねえの？」

私は無言で睨みつけると、掴まれていた腕を払った。  
背も低く、やせ衰えた男だ。

名前は篠田康弘。

給料日が来る度にたかりに来る私の元旦那だ。

白髪の間じり出した髪は最近更に薄くなつて、実年齢よりもっと老けて見える。

こんな小さな男に私はいまだに振り回されている。

私が家に向つて走り出すと彼も後を追つてヒョコヒョコ雨の中を走ってくる。

鍵を開けるのを待つて、彼は遠慮なく玄関に入り込む。

私の許可もなく靴を脱いでさつさと家の中まで上がってしまった。

私はうんざりして怒る気にもなれず終始無言でいる。

勝手にキッチンまで上がり込むと、彼は早速インネンを付け始めた。酒びたりで正常な時の方が少ないクセに、私のことについては目ざとい。

変化を見つけては恐喝するネタにしようと神経を尖らせているからだ。

「おい、奈津美。誰かいたのか？」

まだテーブルに並んだままの二人分の食器を見て、彼は大声を出す。

「男連れ込んでたんじゃないだろうな！おい！」

私は無視を貫き、自分の部屋に引込む。

よろめきながら康弘は私に追いつがった。

背中に抱きつく両手で私の胸をまさぐり始める。

「おい、調子に乗つてんじゃねえよ。お前、男ができたのか？」

耳元でアルコール臭い息がかかる。

その声と臭いでもう吐きそうだ。

「康弘さんにはもう関係ないでしょ。お金ならあげるからさつさと

帰ってよ。」

「ふざけんじゃねえよ！」

彼はキレて私を床に押し倒した。

私の腹部の上に馬乗りになって首に手を回す。

苦しくて私は咳き込んだ。

「分かってんのか？お前は俺の人生をメチャクチャにしたんだ。お前が直弥を殺してくれたお陰で俺がどんなに転落したか。お前のせいで直弥は死んだんだからな！」

アルコール臭い息を吐き散らして、康弘は怒鳴り続ける。

私は耳を塞いだ。

いつもこうだ。

静かに前向きに生きていこうと思う度に、この男は現れ私を壊していく。

先に壊れた自分と、死んだ直弥を忘れさせないように。

ただ、暴言を吐かれたなら私は平気だっただろう。

でも、直弥のことを言われると私は怖くて力がなくなる。

それを知っててこの男は恐喝を続けるのだ。

「やめて、もう言わないで。許してよ・・・。」

「ああ、やめるよ。すること済んだらな。」

乱暴にドレスの胸がはだけられ、私の素肌が顕わになった。

彼は上からそれを見下ろし、あの醜悪な笑みを浮かべる。

そしてジッパーを下げると勝ち誇ったように言った。

「俺を満足させる。いつも通りな。」

私は自殺願望がある人が分かってしまう。

共鳴するのは私が一番死にたい人間だからに違いない。

あるいは、死んだ直弥が海から私を呼んでいるのかもしれないけど。

圭介君も死にたいほど辛いことがあったんじゃないかな。

いつも通り満足すると、康弘は入ったばかりの給料袋から札を何枚か取り出して荒々しく家から出て行った。

私は裸で床に転がったまま、彼の琥珀色の目をぼんやり思い出していた。

## 25話

また日常が始まった。

組立工場の昼時間に間に合わせるべく、給食を作るのが私の仕事だ。朝10:00出勤、昼休みは2:00、夜勤者のための夜の給食を作って、片付けして帰宅するのが夜9:00。

1日の半分働いているが、好きな仕事なので苦にもならない。一人身だし、家に帰ってすることもない私にはその位が調度良かった。

時間が余ってしまうと余計なことばかり考えてしまうし、あの男が家に来る回数が増えるのが一番恐ろしいことだった。

帰宅してから一人でゆっくり風呂に浸かり、ベッドに横になって本を読むことだけが、私の至福の時だった。

朝は7:00には起きて浜に出掛ける。

散歩がてらに、アサリやワカメを味噌汁に使う分だけ取って帰るのだ。

海は毎日違う表情を見せる。

穏やかな時もあれば、荒れている時もある。

全部ひっくるめて海なのだと思う。

海を観察しながら散歩するのが私は好きだった。

圭介君が帰ってから2週間ほど経った頃だろうか。

ある日、浜に打ち上げられているサーフボードを見つけた。

直感的に彼のものだと思った。

あれから何の連絡もないけど、また来るだろうか。

彼の所有物が分からないまま、私はボードを担いで家に持ち帰った。もしかしたら取りに来るかもしれない。

何となく私は期待していた。



10月も半ばになった頃、やっと海にも秋の気配がしてきた。裸足で砂浜を歩くのが冷たく感じるようになった。波も日ごとに強くなっている。

仕事のない土曜日の朝、私はいつもよりゆっくり散歩を楽しんでいた。

朝日が反射する波がきれいだ。

ふと、前方を見ると砂浜をこちらに向って歩いてくる人影がある。見覚えのある長身のシルエット。

私は鼓動が速くなるのを感じた。

その人物は私に気が付き、長い腕を大きく振り回した。

「奈津美さあ〜ん！ちよつと待って！」

大声で私の名を呼びながら足早に近づいてきたその人は、やはり圭介君だった。

今日はちゃんと服を着ている。

プリントTシャツの上にデニムのシャツを無造作にはおって、長い足によく似合うストレートのジーンズ

。やっぱり、背が高いなあ。

ぼんやり観察しているうちに、彼は私の目の前まで来て言った。

「家に行ったけどいかなかったから、ここだと思って。大きいから遠くからでもすぐに分かったよ。」

につこり笑う彼にお腹に私はパンチを入れる。

「大きいからはないでしょ？」

「・・・ごめん。失礼だった。」

私達は顔を見合わせて笑いあった。

何度か思い出した色素の薄い瞳が日に反射して金色に光っている。

この前会った時には日に焼けていた肌も少し白くなっていた。

見とれている私に気付かず、圭介君は高いテンションのまま話始め

た。

「あの時は本当にありがとう。お陰でまだ生きてるよ。仕事でトラブルが多くてなかなか来れなかったんだ。携帯番号も聞いてなかったし。今日はお礼参りとバスローブ返しに来たよ。」

仕事が忙しくて来れなかったのか。

私は何故かホッとした。

「あ、サーフボード拾ったんだけど、圭介君のかな？」

思い出した私が聞くと、彼はぎよっとした。

「うそ。渦に飲まれて戻ってきたのかな。それは縁起がいいから持つて帰らないとね。」

「じゃあ、家に来る？お味噌汁作るけど。」

「え、いいの？なんか朝食時狙ってきたみたいで悪いなあ。」

私のお誘いを彼は屈託なく受け止めた。

玄関の軒先に立ててあるサーフボードを見て、圭介君は微笑んだ。

「間違いなくオレの。もうダメだと思ったのに、おまえ悪運強いな。」

ボードをなでながら彼は目を細める。

「ね、圭介君。」

私は問いかけてから口を閉ざした。

「はい？」

「何でもない。どうそ、入って。」

「あ、どうもお邪魔します。」

彼は機嫌よく家に入っていた。

あの時、何があったの？

私は聞きたかったけど、止めておいた。  
聞いたところで私には関わりのないことだ。

この未来のある人と半分死んでる私の人生に接点などないのだから。

前と同じ椅子に彼は座って、大きな紙袋を突き出した。

「これ、バスローブ。ありがとう。中にケーキも入ってるから後から食べようよ。」

私は彼の気遣いが嬉しくて、微笑ましくて、心が温かくなった。

ケーキを持ってお客さんが来るなんて、この家に来てから初めてのことだ。

私を訪問するのは、お金と性欲を満たしに来るあの男だけだった。

今、目の前の訪問者は無邪気な顔でにこにこしながら、私が朝食を作るのを眺めている。

直弥も私が料理するのを見るのが好きだったな。

思い出して、私ははっとした。

やっぱり私は圭介君に死んだ息子を重ねてる。

「圭介君は、歳いくつなの？」

私はアサリを洗いながら聞いてみた。

「オレは36です。もう若くないですよ。奈津美さんは？」

「私は・・・秘密。」

自分より上だとは思ってなかったが、4つも下だとも思っ  
てなかった。たのでごまかすことにした。

彼もそれ以上聞いてこなかった。

多分、自分よりは上だと最初から思っていたに違いない。

「優しいのね、圭介君。」

私の言葉に彼は首をすくめて見せた。

食卓に以前と同じ、味噌汁とご飯を並べた。

「今日来ることが分かってたら焼き魚でも用意したのに。これじゃ、前と一緒にね。」

申し訳なくて私は溜息をつく。

「うまいからこれだけで充分ですよ。頂きます。」

全く気にすることなく圭介君は箸を付け始めた。

彼の旺盛な食欲を見ながら私は母親のように微笑んだ。

## 26話

秋の空気が清々しい朝だった。

最初に会った時はひどい嵐だった。

薄暗い部屋の中、バスローブに包まっていた彼と、今私の前に座っている彼とは別人みたいだ。

言うなれば精気がある。

死にたい声はもう聴こえてこなかった。

「元気になったのね。良かった。」

私は心から言った。

「この前は雨の中に捨てられた猫みたいだったのに。今日はもう大丈夫なのね。」

圭介君は照れくさそうに笑った。

「いろいろあったけど、まあ吹っ切れました。完全に割り切れた訳じゃないけど。」

「何それ？意味深ね。失恋でもしたの？」

私は興味深く突っ込んでみる。

息子にガールフレンドの話聞くような心境だ。

圭介君は困ったように髪をかきあげる。

「・・・黙っててもいい？話して奈津美さんに軽蔑されたら、オレまた死にたくなるから。」

私は黙って頷いた。

誰にでも秘密はあるものだ。

話すことが必ずしも救いになるとは限らない。

言いたくないことなら墓場まで持っていけばいい。

私は立ち上がってキッチンの窓を開けた。

さわやかな潮風が吹き込んで木綿のカーテンを揺らす。

家の前の草むらに彼の黒いワンボックスが止まっているのが見えた。

ナンバープレートがこの地方でないことに気が付く。

「圭介君はどこから来たの？」

「オレですか？ああ、車のナンバーね。」

私は車を見ているのに気付いて彼は窓に寄ってきた。

開けた窓にもたれている私の横に、同じ姿勢でもたれる。

彼の筋肉質の腕が私の腕に触れて、私は鼓動が速くなるのを感じた。

「オレ、出身は静岡県です。で、今は仕事で名古屋に住んでいます。」

私は納得した。

この海には波を求めてその方面からのサーファーがゴマンと集まるからだ。

高速に乗れば2時間もかからない距離だろう。

「一人暮らししてるの？」

「いえ、妹と一緒に住んでいますよ。妹はツアコンしてるのであんまり日本にいないから、仕事がない時は居候しにくるんだ。」

妹か。

それなら結婚はしていないということだ。

同棲している女性もいないということになる。

私は何故かほっとした。

彼は私の表情を読み取ってか、ニヤリと笑った。

「もしかして安心しました？」

凶星をつかれて、私は赤面する。

動揺しているのがみえみえだ。

「嫌な子ね。そりゃ、安心したわよ。妻子がいる男性がバツイチの女の家に行ったらマズイでしょ。」

「・・・ですね。オレだって妻子がいても変じゃない歳だもんね。」

圭介君は遠い目をして独り言のように言った。

風が彼の髪をさらさらなでいく。

私は彼と並んで窓に頬杖をついて遠くを見た。

高くなつた秋の空に雲が流れていく。

「奈津美さん、オレもう結婚しないと思う。」

突然、彼が口を開いた。

「え？何言ってるの？まだ若いのに。」

思わず発した素っ頓狂な私の声に彼は苦笑する。

「オレのものじゃない女の子をこれからも守りたいから、っていうのはカッコよすぎかな？」

私は首を傾げる。

「ごめん。どういふことなのか状況がよく分からないけど。カッコよすぎと思うわ。」

私の答えに圭介君はあははと笑った。

「いいよ、忘れて。くだらないことだから。」

私達はテーブルでお茶を飲みながらその後も話し続けた。

今日は自分のことも沢山話してくれた。

外国に憧れて全寮制の男子校に6年も入ったこと。

大学卒業後、公務員になったのにすぐ辞めて今の会社に転職したこと。

10年間、海外で生活していて2年前突然日本で働く羽目になったこと。

それから始めたサーフィンが全然上手くなくて、いつもボードに乗って浮いていること。

ギターが大好きなのに、弾いても女の子に全然ウケないこと。

私は自分と全く違う人生を送ってきた彼の話を、興味津々で聞き入った。

一方私は地元出身。高校卒業後、調理師専門学校を出てから結婚するまでずっと飲食店勤務。

思えばつまらない人生だった。

それでも、直弥が逝ってしまうまでは幸せだったっけ。

彼とのおしゃべりは楽しくて、文字通り時間の経つのも忘れていた。私がお茶を入れなおそうと立ち上がった時。

ピンポン・・・ピンポン・・・

玄関の呼び鈴が鳴った。

私は嫌な予感がして立ちすくむ。

「奈津美さん、お客さんじゃない？」

圭介君は無邪気に言った。

それが招かざる客であることは彼はもちろん知らない。

「ちよつと待ってて。」

青ざめた顔に気付かれないように、私は玄関に向った。

ピンポン・・・ピンポン・・・

引き下がる意志はないのだと言わんばかりに、呼び鈴が鳴り続ける。

間違いない。

招かざる客だが、圭介君に会わず訳にはいかない。

私は観念して玄関のドアを開けた。

想像通り、そこには先日お金をくすねていった私の元夫が、醜悪な顔を怒りで歪ませて立っていた。

私は恐怖でその場に凍りつく。

「奈津美、外の車はなんだ。分かってるんだよ。今、男がいるんだろっ？」

玄関に置いてあった圭介君の男性サイズのスニーカーを、康弘はつま先で蹴った。



## 27話

強引に家に上がり込もうとする康弘の前に、私は立ちふさがった。

「お客様なのよ。お金ならこの前持ってたばかりでしょ。今日は帰って！」

「・・・あんだと？男ができたら俺には用はないってのか？」

康弘は酒臭い息を吐きながら、詰め寄ってくる。

だが、私も今日は負けずに睨み返した。

「あなたなんか最初から用なんてないわ。離婚が成立して何年経ったと思ってるの。あなただってお金目当てに私を脅しに来るだけでしょ。お金ならまたあげるから今日は帰って。」

やつれた康弘の顔が、怒りで赤黒くなるのが分かった。

痩せた体が小刻みに震えている。

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！人殺しの分際で、偉そうな口ききやがって・・・」

逆上した康弘は土足のまま玄関に上がり、立ち塞がっていた私を壁に向って突き飛ばした。

ダン！

私が壁にぶつかって大きな音がした。

一瞬目の前が真っ暗になる。

頭を思い切りぶつけられ、私は壁にもたれて座り込んだ。

「奈津美さん？どうかした？」

キッチンから圭介君の声がする。

今の音が聞こえたのだろう。

万事休すだ。

康弘が圭介君を見て怒り狂うことより、この小さなアル中男が私の元夫だと知られることの方が私には耐えがたかった。

何が起きているのか分からず、圭介君はキッチンから出てきた。

そこに土足で廊下に仁王立ちになっている男と、頭を抑えてうずくまっている私が彼の視界に入る。

二人を見比べ、困惑した表情で彼はその場で立ち竦んだ。

「おい、お前が奈津美の男か？」

先に突っかったのは康弘だった。

土足のままズカズカ家の中に侵入し、圭介君の前で仁王立ちになるもつとも、完全に身長差がある彼の前で足を踏ん張る元夫は、滑稽にさえ見えた。

圭介君は困惑した表情のまま、彼を見下ろし、そして私を見た。

この人誰？オレ、何て言ったらいい？

と目が訴えている。

「てめえ、ふざけてんじゃねえぞ！奈津美の男かって聞いてんだよ！」

康弘は彼の沈黙に激昂した。

圭介君のデニムのシャツを掴んでいきまく。

本当はむなぐらを掴みたかったのだろうが、身長差のために圭介君のシャツにぶら下るような格好になってしまっている。

私に暴力を振るうのは構わない。

でも、圭介君が私達のことに関き込まれるのは絶対避けたかった。

私はよろよると立ち上がって、圭介君のシャツにしがみ付いている康弘を引き剥がした。

「康弘さん、もうやめてよ。この人はただのお客さん。サーフボード取りに來ただけなの。もう帰ってもらうから。」

康弘の背中を羽交い絞めにして私は言った。

圭介君は困惑した表情のまま、成り行きを見つめている。

本当にいいの？オレ、どうしたらいい？

彼の目が訴えていたが、私は敢えて無視した。

「ボード持って今日はもう帰って。ごめんなさいね。」

本当は帰って欲しくない。

帰らせたいのはこの男のほうだ。

だが、これ以上事態を悪化させたくなくて私は圭介君を玄関に促す。

「おい、本当におまえの男じゃないんだろ？ 嘘だったら承知しねえぞ。」

「違うわよ。さあ、早く帰って！」

暴れる康弘の背中を私は必死で抑えながら言った。

圭介君に飛びからんばかりの勢いだ。

彼はまだどうするべきか決めかねている表情のまま、私の声に仕方なく玄関から出て行った。

玄関のドアが閉まると、康弘は背中に抱きついていて私を乱暴に振り払った。

ふき飛ばされ、私は床に投げ出される。

康弘は圭介君が家から出て行ったのを確認すると、ドアの鍵をかけた。

床に転がったままの私を見下ろし、土足のまま私の太腿に蹴りを入れる。

「・・・い、痛っ！」

堅い革靴のつま先が突き刺さり、私は思わず悲鳴を上げる。

「さっきはなめたこと言ってくれたな・・・。」

筋張った康弘の手が伸びてきて、私のサマーセーターの襟首を掴んだ。

## 28話

康弘は怒りで赤黒くなった顔を歪ませた。

私の襟首を掴んで自分の前に引き寄せる。

この痩せた小さな男のどこから出てくるのか、すごい腕力だ。

私がいくら大柄でも、男の力には敵わない。

彼のアルコール臭い息がかかって、私は思わず顔を背けた。

「調子乗ってんじゃねえよ！このクソ女が、ああ？」

背けた私の顔に向って唾を吐きながら、康弘は怒鳴り散らす。

その時、私の中で何かがはじけた。

目の前の醜い顔を私は睨みつける。

調子に乗ってるのはどっちだ。

いつもの私なら黙って服従し、彼が欲望を満たすのをただ待っていただろう。

辛い時間ではあったが、終われば彼は帰ってゆくのだから。

だが、今日の私はこの男に言いようのない怒りを感じた。

血走った彼の目を、私は見返す。

「好きにすればいいわ。殺したければ殺せば？もうあなたに脅されて生きていくのはまっぴら。私は・・・」

言い終わらないうちに、彼の拳が私の左頬に命中した。

目の前に火花が散って、口の中に血の味が広がる。

「男ができたからって生意気言うようになったじゃねえか・・・。」

完全にキレた康弘はそう言つと、襟首を掴んで引き寄せていた私の体を床に叩き付けた。

殴られたショックでまだ視界が定まっていなかった私は、今度は床で後頭部を強打し仰向けに倒れる。

その上に彼はまたがり、サマーセーターを乱暴に引っ剥がした。

このまま殺されるのか・・・。

私は半ば観念して目を瞑った。

その時、突然私の上で馬乗りになっていた康弘の体がフワツと浮き上がった。

薄目を開けた私の視界に、ジーンズを履いた長い二本の足が映る。刹那、ガツツ！と鈍い音がして浮いていた康弘が吹き飛ばされた。痩せた体は転がるように壁にぶつかった。

「おい、あんた！何やってんだ。いいかげんにしろよ！」

靴を履いたままの長い足は倒れている私の脇を通り、壁にぶつかったままの姿勢で蹲っている男に蹴りを入れる。

ひいいい・・・と情けない声を発し、康弘は転がりながら逃げ惑った。その男を圭介君は片手で胸倉を掴んで持ち上げた。

今まで私が知っている穏やかな圭介君とは別人だ。

色素の薄いきれいな瞳が、怒りと興奮で真っ赤に充血している。

端正な顔を歪ませて圭介君は低い声で唸った。

「女相手に自分が何やってんのか分かってんのか。ここで警察呼ぶのと、オレにボコられるのどっちがいい？」

胸倉を掴まれて持ち上げられた康弘は釣られた魚の様に口をパクパクさせた。

息ができず康弘の顔が紫色に変わっていく。

私は必死で声を発した。

「やめて！もういい。もういいから・・・。」

圭介君は横目でチラリと私を見た。

悔しそくに紫色になった男の顔を睨みつけてから、床に下ろす。

康弘は咳き込みながらその場にうずくまる。

さっきまで猛り狂っていた彼とは打って変わった弱弱しさだ。

その姿は老人のようでもあり、いじめられた小さな子供のようでもある。あつた。

こんな男でも私のかつての夫であり、直弥の父親だったのだ。

「奈津美さんがそう言うなら・・・でも、警察呼ばうか？」

まだ興奮して肩で息をしながら、圭介君はジーンズのポケットから携帯を取り出す。

私は首を振った。

「いいの。もういいのよ。この人は私の夫だった人なの。」  
うずくまっているその男を横目で睨んで、彼は唇を噛んだ。

「・・・そんな気はしてた。でもだからって、こんなコト許せるの？」

「元はと言えば私のせいなの。私のせいでこの人は壊れてしまったんだから・・・。」

半べそをかきながらまだうずくまっている康弘のズボンのベルトを掴んで、圭介君は玄関まで引きずっていった。

「あんた、警察呼ばれたくなかったらこのまま帰れよ。」

低い声で圭介君が凄むと、康弘はよろよろと立ち上がり無言のまま出て行った。

外で車のエンジンがかかった後、ブロロ・・・と遠ざかる音がした。私はやっとほっとして、その場にへたり込む。

ブラジャーだけの裸の上半身に、後ろからデニムのシャツがふわりと掛けられた。

私は急に恥ずかしさを覚え、慌ててシャツに包まった。

「血、出てるよ。病院行く？」

後ろから圭介君の低い声がする。

私は慌てて顔に手をやった。

口の中だけでなく、唇も切れている。

私は努めて明るく言った。

「大丈夫よ。でも、圭介君帰ったと思ってた。どうやって家に入ってたの？」

彼は腕を組んで壁にもたれたまま、顎をしゃくってキッチンを指した。

さっき私達が並んで車を見ていた窓が、大きく開いている。

なるほど、あの窓から侵入したのか。

「あのまま帰れるわけないだろ。外まで殴った音が聞こえたよ。」

何が悪に入らないのか、低い声で不機嫌そうに彼は言った。

私はテヘヘ・・・と作り笑いをして見せる。

「あ、そうだね。ごめん。圭介君を巻き込んだな。でも、助けてくれてありが・・・」

「もういいよ！」

突然、圭介君が大声を出した。

私はビクッとして硬直する。

「もう笑わなくていいよ。頼むから・・・。」

彼の瞳が、今度は涙で潤んで真っ赤になっていた。

## 29話

「なんでさっき助けってくれて言わなかった？言ってくれたらオレ、出て行かなかったし、奈津美さんが殴られる前にあんなヤツ追い出してた。オレ、奈津美さんのこと何にも知らなくて、勝手に優しく強い人だっと思って思い込んで、呑気に朝ご飯もらいに来て・・・。ばかみたいだ。奈津美さんが辛いことがあるなんて全然気付かなかった・・・。」

言いながら、彼の頬に涙が伝った。  
私の為に泣いてくれる。

「だから、ゴメン。何にもできなくて、こんな目に遭わせちゃって。」

少年のように彼は腕でゴシゴシ顔をこすって涙を拭う。

そして床に座り込んだ私の腕を取って立ち上がらせた。

向かい合って立った目の前に、まだ赤い目のままの圭介君の顔がある。

彼の大きな手が私の切れた唇に触れた。

私はどぎまぎし、慌てて俯く。

「顔、腫れてきたよ。冷やした方がいい。他に痛いところない？」

「・・・ん。大丈夫。ありがとう。」

「女の人殴るってありえねえ。あんなヤツもつと殴ってやれば良かった。」

圭介君の顔が再び険しくなり、歯軋りの音がした。

私の為に泣いたり、怒ったりしてくれる人がある。

それだけで私は嬉しかった。

「いいの、もう。圭介君がいてくれて本当に助かった。ありがとう。」

心からそう言って、私は微笑んだ。

「・・・泣いていいよ。」



「え？」

低い声で圭介君は言う、いきなり私を胸に抱きしめた。

「だから、笑わなくていいしたら！今までだって辛くて、怖かったんだろ？無理に笑わなくていいよ。」

彼の胸の鼓動が押し付けられた耳に響いてくる。

堅くて、温かい胸に抱きしめられて、私は本当に泣きなくなった。

こんな風に優しくされたのは何年ぶりだろう。

何年もの間、我慢していた涙がせきを切ったように私の目からあふれ出した。

「・・・今だけ。泣いていい？」

「いいよ。今度はオレが助けなきゃね。」

圭介君の顔がやっと緩んだ。

私は彼の胸に顔を押し付け、子供のように泣き出した。

彼の大きな手が私の背中を優しくさすってくれるのを感じる。

今までの忘れていた涙が全部流れ出すまで、長い時間彼の胸で泣き続けた。

涙も枯れて、私がやっと落ち着いていた時、彼のＴシャツは水に浸かったかのように濡れていた。

私の大きめのＴシャツに着替えさせ、私は洗面所で涙で更に腫れ上がった顔を洗った。

鏡を見上げると、後ろで腕を組んで面白そうに見ている圭介君が映っている。

「ひどい顔ですね。」

「ひどいはないでしょ。圭介君が泣いてもいいって言ったから・・・。」

私はタオルで顔を抑えて恨みがましく言った。

「ねえ、顔冷やすのに海行きませんか？本当は今日、この前のお礼に夕食でも誘うつもりだったんだ。でもその顔だと出かけるの辛いでしょう？」

「外食なんて無理！」

「じゃ、一緒に海見ましようよ。」

彼は王子様のような大袈裟な仕草で私に手を差し出した。

私は気恥ずかしくなりながらも、その手を取った。

浜に出ると、もう夕焼けで空がオレンジ色に染まっている。

冷たい秋の潮風が熱を持った私の顔に当たり、心地よく冷やしてくれた。

この時間になると人もまばらだ。

夏の間、波間に浮いてひしめき合っていたサーファーの姿ももう見えない。

大きな波が次々押し寄せてくる様を、私達は砂浜に並んで座って眺めていた。

「あのね。」

「はい？」

私は膝を抱えて、横に座っている彼に呼びかけた。

彼に話したい、と突然思った。

「私ね、さっきの元旦那との間に子供がいたの。彼はまだ優しくて働き者で、私は結婚してから仕事も辞めて主婦してたのよ。裕福じゃなかったけど、いつも親子三人で私達幸せだったの。」

「そう……。」

「でもね、息子の直弥が7歳の時、私のせいで死なせてしまったの。この海で、よ。」

少しぎよつとした表情で圭介君は私を見た。

「ここで？」

「そう、ここでよ。」

私は波を見つめながら続ける。

「子供には危険だったのに、私は海を見せてあげたくて連れてきたの。ちよつと目を放した隙に彼は波に足を取られて流されてしまった。遺体が上がったのは二日後だったわ。」

硬直した表情で圭介君は私の話しに聴き入っていた。

「その二日間、私と康弘さんはこの浜を狂ったみたいに走り回って直弥を探したのよ。遺体が発見された時、康弘さんはもう廃人みたいにやつれてた。そしてそのまま本当に狂ってしまったの。」

私は膝に顔を埋めた。

口にするにあの時の光景がまざまざと思い出される。

「康弘さんはお酒を飲むようになって、会社にも行かなくなって、私を責めるように暴力を振るうようになったの。でも、全部私のせいだから、私は受け入れるつもり。直弥のことと、自分の罪を忘れない為に直哉が逝ってしまったここに住み始めた。康弘さんがお金が必要ならできる範囲で援助してきたわ。それが私なりの二人への償いなよ。」

圭介君は無言で私を凝視している。

私は彼を見て微笑んだ。

「この前ね、圭介君が海から這い上がってきた時、私なんだか直弥が海から帰ってきたのかと思ったのよ。でもその後、共鳴したのを感じて家に連れて帰ったの。」

「共鳴？」

彼は首を傾げる。

「そう、共鳴。私は死にたい願望のある人と共鳴するの。上手く言えないけど心の声が聴こえるのよ。だから圭介君は自殺しに来た人かと思ひ込んだ。」

ああ・・・と彼は少し納得した顔で髪をかきあげた。

「あの時、オレも頭がグチャグチャだった。なんかこの先どうやって生きていったらいいのか分かんなくなっちゃって・・・。正氣のまままでいられるのか自信なかった。」

「何があつたの？」

今度は私が彼の顔を覗き込む。

手で髪をグシャグシャかき混ぜながら彼は唸った。

「・・・言ったら軽蔑されるかも。」

「じゃ、泣く？泣いてもいいよ。」

私が悪戯っぽく肩を抱いてやると、琥珀色の目を細めて彼は少し笑った。

「聞いてから気持ち悪いって言うなよ。」

「何それ？言わないよ。」

しばし沈黙があった後、彼は低い声で言った。

「オレね、妹とずっと寝てたんだ。肉体関係アリで。」

### 30話

「妹と寝てたつて？」

私は意味がよく分からずオウム返しに聞き返す。

彼は困った顔をして再び、髪をかき混ぜた。

「だから、ずっと関係持ってたんだ。ホントの妹と。」

「妹とそんなことしていいの？」

私は我ながら間の抜けた質問を続ける。

圭介君は抱えた膝の中に顔を埋めた。

「よくないから悩んでるんだつて。どうしたらいいと思う？」

何と言つていいか分からず、私も真剣に考えてシミュレーションを建ててみる。

「それつて圭介君が脅迫してやってるの？」

「・・・んな訳ないでしょ。そういうキャラじゃないよ、オレは。」

「じゃ、妹さんも圭介君のこと好きなのね。」

「少なくとも今まではね。ホントに好き合ってたと思うよ。」

「じゃ、何が問題なの？」

「問題は・・・あいつが子供が欲しいだの、はじめをつけたいだの、色々言い出したんだ。」

私は眉間に皺を寄せた。

近親婚は確か良くないんじゃない？」

「分かつてるよ。遺伝子的にも良くないし、戸籍上結婚もできないから、生まれた子供は私生児になっちゃうだろ？倫理的にもオレは反対。大体、ウチの親に何て言ったらいい？圭介の子供を産みましたつて？」

二人ともまともに結婚もしないで、やっとできた孫が兄の子供なんてシャレにならないよ。」

ああ・・・そういう問題があるのか。

私は妙に感心した。

なるほど、親は二人で共有している訳ね。

圭介君は続ける。

「そしたら最近、会社のヤツが妹と付き合いたいって言うてきてさ。妹、バカだからあいつにオレのことばらしちゃったんだ。最悪の方法で。」

「それってどんな？」

私は興味をそそられて突っ込みを入れる。

横目でちらりと私を見て、彼は溜息をついた。

「この前ここから帰った時、あの台風の夜だ。家に入ったらいきなり妹に抱きつかれてさ。いつも通り抱けって言っからいつも通りにしたら、そいつが家の中にいたの。」

「つまりやってるところ見られちゃったの？」

「そう。」

私はその場面を想像し赤面した。

「それは恥ずかしかったね。」

「恥ずかしいとか、そういう問題じゃないよ。近親相姦がバレちゃったんだから。」

ふてくされて彼は言った。

「でも、そいつは本当にいいヤツで、全部分かった上でオレに挑戦してきたんだ。妹を振り向かせるって。オレなんか嬉しくてさ。こいつなら妹をやってもいいかなって。」

「そうね。なかなか男らしいじゃない。で、妹さんは？」

「まんざらでもないみたいで、デートしたりしてるよ。それはいいことだ。オレから離れて普通の男と付き合えば、結婚も出産もできるからね。」

私はまた眉間に皺を寄せた。

「それがいいことなら何が問題なの？」

「問題？問題はね、頭ではこれがいい方法だって分かっているのに、オレが踏ん切りつかないこと。オレ、あいつのことホントに好きなんだ。」

圭介君は砂の上に仰向けに寝転んだ。

「妹だっと思ってたことなんか一度もないよ。あいつがオレとしてきたことを他の男とするなんて許せない。あいつがこのまま二人きりでいたいって言うてくれれば、オレは何を捨てても一緒にいる覚悟だった。でも、子供欲しいとか、結婚したいって言われたらもうどうしようもない。それが女性としての願いなら、オレには叶える事ができない。だけど、本当はオレ・・・嫌なんだ。誰にも渡したくない。」

私は黙って話を聞きながら、考えていた。結婚に対する男女の温度差は確かにある。

落ち着いた生活や子育てに憧れを抱く時期って女にはあるものだ。男は彼女と一緒にいるだけで満足だろうが、女は変化を求めるかもしれない。

子供がなかなかできなかった私達が、体外受精までして直弥を授かったのは歳を取ることへの焦燥感からだった。妹さんは多分そういう時期なんだろう。

でも、それは女なら自然な欲求だ。

彼も分かっているから苦悩しているのだろう。

「難しいわね。どうするのが正しいなんて誰にも分からないわよ。」  
しばし考えた後、私はこう答えるしかなかった。

「奈津美さんならどうする？」

仰向けで天を仰いだまま彼は問いかけた。

潮風に吹かれてさらさらと砂が彼の体にかかる。

「私だったら？そんなの決まってるわ。」

「どうするの？」

「だまし討ちで妊娠して、姿をくらます。」

「なんで姿をくらますの？」

圭介君は面白そうに聞いた。

「だって私は好きな男の子供がいれば他には何も要らないもん。」

「好きな男は不在でいいんだ？」

私は笑った。

「だって男は所詮他人だけど、子供はずっと私のものでしょ？妊娠した時点で、生物学的に男の役割は終わるんじゃないかしら？」

「ひでえ……。遺伝子を残したらもう用無しってこと？」

「カマキリは受精したら雌に食べられちゃうらしいわよ。」

「オレ虫じゃないし……。」

私達は声を上げて笑いあった。

やがて青紫色に変わっている空に、三日月が切り絵のようにくつきりと現れた。

私は立ち上がった。

顔の腫れも潮風に冷やされて大分ひいたみたいだ。

「もう家に帰りましょう。寒くなってきたわよ。」

まだ仰向けで転がっている彼の腕を取って引つ張り起こす。

彼は苦笑しながら、起き上がった。

「やっぱり遅しいな、奈津美さんは。ゾウみたいだ。」

「失礼じゃないかしら？ゾウは。」

「褒めてるんだよ。奈津美さんは野生のゾウみたい。でも、妹は違うんだ。あいつは誰かが愛して、傍にいないと生きていけない、飼いたいな人間なんだよ。」

立ち上がった圭介君は寂しそうに言った。

「でもそれはオレじゃダメなんだ。悔しいけど。」

彼の琥珀色の瞳を私は見つめた。

愛情だったのか、同情だったのか、もしくは助けてくれた感謝だったのかは分からない。

でもその時、私の心はもう決まっていた。

「じゃ、私にしとく？あなたさえ良ければ、今夜……。」



彼は一瞬驚いた顔で固まったが、その後すぐ目を細めて微笑んでくれた。

### 30話（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。  
ここでこの章は終わり、次の展開に入っていきます。  
今後楽しんで頂けましたら幸いです。（^^）

### 31話

土曜日の朝、あたしは珍しく早起きしてシャワーを浴びようとバスルームに直行した。

仕事のトラブルで2週間ほど会わなかった岡崎君と、今日はデートする約束になってたからだ。

岡崎君に改めて告白されたあの日から3日後、シングルベッドが宅急便で届いた。

圭介は呆れながらも、サインをしてベッドを受け取った。

「これはオレに対する挑戦だな。」

二人で物置となっていた3LDKの一室を片付けてベッドを運び込みながら、圭介は舌打ちする。

「だって、天秤にかけていい方選べって言われたのよ。その間は圭介と一緒に寝てたらフェアじゃないでしょ？平等にジャッジしなくちゃ。」

「だったら浜松の実家に帰れよ。ここはオレの家だ。」

「やだ。お母さん、結婚しろって最近うるさいんだもん。圭介がしてくれならいいけど？」

「・・・それ言うのはハンデだろ？平等にジャッジしろよ。」

「じゃ、ここにいろしかないじゃん。」

圭介はブツブツ言いながらも部屋を掃除してくれた。

それからあたし達は自然と別々に暮らすようになったのだ。

バスルームには先客がいた。

圭介がタオルを腰に巻きつけたまま歯を磨いている。

休みの日はダラダラ寝てることが多いのに珍しいことだ。

土曜日なのにどっか行くのかな？

あたしは小さな声でオハヨ〜と言って、バスルームに入った。彼がちらりと横目であたしを見たのは気が付いたけど、ここは敢えて無視。

どっかいくのか、なんて聞かれたら気まずくなるのは明白だ。

「どっか行くのか？」

バスルームから出てきた途端、脱衣所で待ち構えていた圭介がお約束どおりの尋問をする。

「圭介、お風呂を覗くのも反則だよ。エッチ！」

あたしはバスタオルを体に巻きつけてベーっと舌を出した。

「おまえね、今更・・・。」

「とにかく、今はプラトニックでいなくちゃ、ね。」

あたしは脱衣所に彼を置き去りにして部屋に引っ込んだ。

髪を乾かし、お化粧して、デニムのロングワンピースを着てみる。

あとは革のブーツで決まりだ。

我ながら、30歳には見えまい。

八時半には岡崎君が車でここまで迎えに来てくれることになっている。

どこに連れて行ってくれるのか聞いてないけど、アウトドア派ではないあたしは遊園地や動物園に連れて行かれるのだけはゴメンだった。

できるなら、また彼のピアノを聴きたい。

あたしの願いはそれだけだ。

キッチンからコーヒーの香りがしてきて、空腹を覚えたあたしは部屋から出た。

ジーンズにＴシャツ姿で、圭介はキッチンのテーブルに座っている。

圭介が入れたコーヒーがちょうど沸いたところだ。

あたしは自分のマグカップに熱いコーヒーを入れた。

「お兄様にも入れる。もしくはそれ返せ。」

圭介の低い声が聴こえた。

「ごめん、時間がないの。もうでかけるから。」

「オレも出かけるんだけど。それが人のコーヒーを勝手に飲んでいい理由になると思ってんのか？」

「え、圭介も？どこ行くの？」

「おまえが言わないのに言うか、バーカ！」

「あ、バカって言った！」

「それがどうした。文句あるならコーヒー返せ。」

あたしたちはくだらないことで、くだらないケンカをよくするようになった。

ベッドが届いて部屋を分けてから、もともと生活リズムの違うあたしたちが顔を合わせることが減ってしまったのだ。

更に岡崎君との約束もあって、あたしは圭介と体の関係を持つことを断った。

すると不思議なことに、健康な兄妹の関係が構築されてきたのだ。ケンカしながらも仲がいい普通の兄妹。

結局、あたしたちは家族なんだ。

お互い、誰と付き合い始めようとあたしたちの絆が切れることはない。

あたしは圭介と離れることに不安は感じていなかった。

その時ポケットに入っていたあたしの携帯の着信音が響いた。

着メロはシヨパン「幻想即興曲」。

圭介の顔に血が昇るのが分かった。

あたしは慌てて着信ボタンを押す。

電話の向こうから岡崎君のはきはきした声が聴こえた。

「玲さん、おはようございます。起きてました？」

「うん、大丈夫。今どこ？」

「もうマンションの下に車止めてますよ。降りて来れますか？」

「うん、今・・・」

最後まで話し終わらないうちに圭介の長い手が伸びて、あたしの手から携帯を奪い取った。

「あ、圭介！ダメ！」

「うるさい！おい、岡崎か？」

圭介はあたしの顔を片手で押しやって携帯に向って怒鳴った。

「あ、主任。おはようございます。」

「てめえ、上司の家の前まで来て挨拶なしで妹を連れてく気か？」

「あ、すいません。ではすぐ挨拶に伺います。」

「行き先と日程も提出しろ。」

「それは勘弁・・・。」

3分も経たない内にピンポンと玄関でチャイムが鳴った。

あたしは駆け寄ってドアを開ける。

神妙な顔をした岡崎君がそこに立っていた。

今日はアイボリーの長袖シャツにジーンズという彼にしてはラフなスタイルだ。

銀縁のメガネが逆に浮いている。

「おはようございます。主任に挨拶に伺いました。」

きよろきよろ部屋を見回して岡崎君は礼儀正しく言った。

「ごめんね。あたしがすぐに降りれば良かったかな。」

「いえ、挨拶はむしろするべきでした。あ、主任おはようございます。」

振り返ると圭介が腕を組んだ姿勢で壁にもたれて岡崎君を睨んでいる。

岡崎君は突然赤面して顔を下げた。

そつえば、この前のアレがどうやらトラウマになっているらしい、

と圭介が言っていた。

会社でも圭介の顔を見て突然動揺したりしてるそうだと。何を想像してるかは、想像に難くない。

純情な彼には刺激が強すぎたようだ。

「あの、すいません。玲さんをお借りします。」

岡崎君はペコリと頭を下げた。

圭介はやつと表情を緩めて、笑みを見せた。

「何でおまえが照れてんだよ。恥ずかしいところ見られたのはオレなのに。」

「あ、いえ、そんなつもりは……。」

「どこいくのか知らないけど、気をつけてな。車で事故るなよ。」

「それは許可ですか？」

「そーだよ！早く行け。」

思いのほかあっさり、それだけ言つと圭介は中に引っ込んでしまった。

「許可もありだし、行こうか？」

あたしはシヨルダーバッグを掴んで、岡崎君の手を取った。

白い、指の長い手だ。

表情の乏しい整った顔が笑った。

「ぼくは主任も大好きですよ。多分、玲さんと同じくらいにね。」

### 32話

あたしたちはマンション前の歩道にとめてあつた岡崎君の車に乗り込んだ。

メタリックなワインレッドの軽自動車だ。

ドアを開けると芳香剤の香りがした。

開けるとタバコの匂いがして、座ると砂がお尻につく圭介のワンボックスとは大違いだ。

あたしが助手席に座つたのを確認して、岡崎君はドアを閉める。

完全にお姫様扱いであたしはいい気分だった。

自覚しているのだが、あたしは高飛車で横着だ。

尽くされるほのいい気になつてしまふ体質。

この彼と付き合いたしたら、輪をかけて何にもしない人間になつてしまいそうだ。

岡崎君は運転席に乗ると、ナビで地図を検索し始めた。

「どこに行くの？」

「リクエストありますか？」

あたしたちは顔を見合わせた。

「決まつてないの？」

「いえ、玲さんの意向を確認しようかと。」

なんだ、そりゃ。

あたしは考え込んだ。

「あたしのお願いは一つだけ。ピアノ弾いて欲しい。」

「ピアノですか。まだ朝だしBlueMOONはやってないですよ。それに他の客もいるから何でも弾くつて訳にはいかないんです。」

「そっか……。そうだよな。」

あたしはがっかりして肩を落とした。

しばし沈黙した後、岡崎君が口を開いた。

「いいところがあります。おいしいランチが食べれて、ピアノも弾



き放題。ワインもコーヒーも輸入品を取り揃えています。時間制限もないですよ。」

「ピアノも弾けるの?」

あたしは目を輝かせた。

「はい、そこなら手取り足取り教えてあげれます。」

「いいじゃん。どこの、そこ?」

はしゃぐあたしを見て、岡崎君は顔を白い顔を赤らめて真剣に言った。

「ぼくの家です。今日はぼくの家にお招きするつもりで来ました。」

「あ、いいよ。あたし、出歩くのあんまり好きじゃないんだ。」

あっさりとあたしは了解した。

車は街中を通って、少し郊外まで来た。

彼は真剣な表情で前だけ見て運転に集中している。

男の人の部屋に入るのは初めてだ。

入ったということは、みだらな行為は承諾済みということになるのだろうか。

申し訳ないのだけど、今のところ彼から男性的なセクシャルなものを感じることができなかった。

フェロモンってあるんだとあたしは思う。

圭介はその方面においては天性の才能がある。

男の色気なるもの、どんな女でも身を委ねたいと思わせる何かを圭介は持っている。

一方、岡崎君は恵まれたルックスにも関わらず、女が気付かず素通りしていくタイプ。

彼とキス以上のことをすることがイメージできないのだ。

少なくとも、今の時点でのあたしの評価は低かった。

あたしがぼんやり分析している間に、車は5階建てくらいのマンションの駐車場にとまった。

圭介のマンションから30分もかからない、ご近所さんだ。

「玲さんのところから近いでしょう？会社を中心に通勤しやすいマンションを斡旋してもうらうから、結構この辺で会社の人間に会いますよ。」

あたしの疑問が顔に出ていたのか、岡崎君が説明した。

「岡崎君は一人暮らしなんだ。実家は？」

「岐阜です。」

「え、近いじゃん。」

「でも親元にはもう住めませんからね。社会人になってからはずっと一人暮らしですよ。」

お坊ちゃんかと思ってたのに、なかなか骨があることというじゃない。あたしは少し感心した。

5階の角部屋が彼の部屋だった。

どうぞどうぞと言いながら、彼はリビングに招き入れた。

リビングにはソファ、テレビ、そして電子ピアノが置いてある。

さっぱりとしながらも観葉植物が置いてあったり、ラックに入った雑誌が置いてあったり生活に潤いを感じる部屋だ。

殺伐としたあたしたちのマンションとの差は何なんだろう。

「実は今日は最初からそのつもりで念入りに掃除しておいたんです。」

岡崎君はあたしにスリッパを勧める。

あたしは置いてあった電子ピアノに近づき、そっと蓋を開けてみた。鍵盤を指で押しても何の音もしなかった。

「電源入れないと音しないですよ。」

岡崎君は後ろから近づいて、電源を入れた。そういうものか。

「お茶にしようと思いましたけど、先に弾きたいですか？」

あたしの背中の中のすぐ傍で彼の声が聴こえた。

「教えてくれるの？」

「いいですよ。座って。」

あたしは鍵盤の前に座った。

岡崎君はあたしの後ろから腕を回して鍵盤に触れる。

彼の息まで聞こえる至近距離だ。

あたしは少し、胸の鼓動が速くなったのを感じた。

「ごめん、玲さん。教えるのはまた今度にしましょう。」

突然、あたしから離れて岡崎君は言った。

「えー！！何で？」

期待を裏切られて、あたしはぶーぶー文句を言う。

「今教えるのはぼくにとつてマイナスになりますよ。」

「なんでよ？」

「だって、玲さんが自力で弾けるようになったら、ぼくなんか要らなくなっちゃうじゃないですか。ぼくは玲さんの専属ピアニストですからね。」

恥ずかしそうに彼は笑った。

### 33話

日当たりのいい、明るい部屋だ。

少し空いた窓から秋の爽やかな風が入り、レースのカーテンを揺らす。

あたしはソファに深々座って雑誌を読み始めた。

インテリアの雑誌、カントリー小物の雑誌、海外旅行の雑誌はエステ特集……。

男性が読むとは思えないものばかりだ。

しかも妙に新しい。

あたしの為にここまで用意していたに違いなかった。

その彼は今、あたしに背中を向けてキッチンに立っている。

ランチの用意を始めているのだ。

圭介にこんなお嫁さんがきたら、あたしも安心だろう。

あたしはこっそり後ろから近づき、そおと彼の肩越しに何をしているか覗いてみた。

後ろから見た彼は圭介と同じくらい大きくて、広い背中をしている。その大きな体と白い美しい指で、彼は海老のワタを抜いているところだった。

「岡崎君、そんなの食べちゃうから大丈夫だよ。」

見るからに面倒くさくて無駄な作業に思えて、あたしは思わず声をかける。

「母親がいつもやってましたので、ばくもいつもやってるんです。」

「面倒くさいじゃん?」

「大丈夫ですよ。」

彼は慣れた手つきでさっさと海老を洗った。

あたしはその後もうロウロと彼の背中から料理が作られていく様を観察した。

やがてリビングに出された木製のテーブルに今日のランチが並べられた。

先ほどの海老がふんだんに使われたペスカトーレ。

手作りのドレッシングがかかった野菜サラダ。

カボチャのポタージュスープ。

女としてあたしは岡崎君に完全に負けている。

「お口に合うといいですが。この前作ったパスタよりは素材がいい分マシだと思います。」

にこやかに岡崎君はあたしに勧めた後、突然赤面して俯いた。

そのパスタを食べた直後、起こったあの事件を思い出しているに違いない。

あたしは苦笑して、食事に手をつけた。

おいしい。

上品な味付けなのにどこかお母さんの味がする。

あたしの健康を考えて作ってくれたメニューだからかな。

食べているあたしを岡崎君は、テーブル越しに向かい合って見つめている。

メガネの奥の目は睫毛が長くて、黒い瞳がきれいだ。

「今日は来てくれてありがとうございます。また玲さんにご飯食べたかったです。」

改めて言われて、あたしは照れ隠しに笑った。

「こちらこそ。そういえばあの日以来ね。あの時はごめんね。」

「いえ、お二人の事情が分かってむしろ良かったと思ってます。」

再び赤面して、彼は俯いた。

真面目な秘書が実は純情というギャップがかわいい。

「あたし誰にも話したことなかったから……。もう嫌われたと思ってた。」

ポタージュをスプーンでかき混ぜながら、あたしは小さな声で言った。

「主任にも言いましたが、ぼくの気持ちは変わりませんでしたよ。」  
「・・・なんで？あたしのこと何にも知らないのに・・・。」

前から思っていた疑問だった。  
どこから見ても生意気で我儘な三十路の女のどこが良かったのだらう。

彼は真面目な顔になって言った。

「ぼくが感じてきた孤独感を玲さんなら共有してくれるのではないかと、勝手に思ったんです。」

ああ・・・とあたしは少し納得した。

圭介みたいに仲間にも囲まれていつも表にいる人間には分からない、あたしは陰の側にいる人間だ。

クラスで人気者のグループが大半を占める中で、あたしはいつも孤立していた。

いじめとかそういうのではないけど、気がつけばいつも一人なんだ。岡崎君もあたしと同じ匂いにする。

一匹狼という言葉が彼にはよく合っていた。

この前のパーティーで圭介が他の世界の住人みたいに輝いて見えた。あの時の寂しさ。

この人はそんな孤独を知っている。

食事が済んで片付けられたテーブルには食後のコーヒーが並んだ。

「これは本場ブラジルのコーヒーです。砂糖は大量に入れて下さい。最初はミルクなしで味わって。」

執事の如く、彼は注意事項を並べた。

「あ、ブラジルはツアコンで行ったよ。むちゃくちゃ濃いなだね、食後のコーヒーが。」

あたしは忘れかけていた自分の職業を思い出した。

「玲さんはツアコンダクターなんですか？」

岡崎君は心底意外そうに目を見開く。

さぞかし、客が振り回されるツアーだろうと、言いたいのか。

「そう。今はオフなんだ。仕事が出来たらまたしばらく日本を離れるかも。だから圭介のところに転がり込んでるの。」

「いつからです？」

「・・・わかんない。」

あたしは目を逸らした。

実は何度か仕事の話はきていた。

だけど、最近なんとなく体調が悪くて、体力的にこれ以上この仕事を続けられるか、あたしは迷っていた。

病は気からとはよく言ったものだ。

30 になってから突然、朝起きるのが辛くなり疲れが体に残るようになった。

オマエは何にもしてないじゃん、と圭介に笑われたが、起きるのが本当に辛いのだ。

あと、もう一つの理由は、目の前にいるこの人だ。

この人のことをもう少し知りたい。

今、ここを離れたくない。

あたしは漠然と思っていた。

### 34話

「玲さん？」

「あ、うん。」

あたしは我に返った。

「まだ次の仕事は来ないんだけど。そうね。そろそろかも。」

「ぼくは待つてていいですね。」

彼の祈るような瞳が訴える。

その健気な表情がかわいくて、あたしは微笑んだ。

「・・・いいよ。まだ天秤に乗ったままだけど。」

「乗ったままでいいですよ。」

岡崎君は笑みを見せて言った。

「お兄さんとは縁切れないですよ、玲さん。無理して忘れなくても、両方好きでぼくは構わないです。」

上手く言えないけど、ぼくも主任が好きだし・・・そんな玲さんが好きなんですよ。」

あたしは首を傾げた。

そんなんアリ？

「それって二股じゃない？」

「主任の許可は得てますので。」

「へんなの。」

「ぼくは変ですよ。だから会社で嫌われてるんです。」

あたしはあはは・・・と声を出して笑った。

岡崎君が、あたし達の全てを知って、理解しようとしてくれることが嬉しかった。

きっと、圭介も嬉しかったから、許可したんだろう。

あたし達はいつも、バレたらどうしようって怯えていた。

世界にあたし達しかないような孤独感がいつも付きまっていた。



この人はそれもひつくるめて、そのままのあたしを受け入れてくれるのかな。

あたしはテーブルをずらして、胡坐で座っていた彼の前ににじり寄った。

そのままあたしは首を伸ばして彼の形のいい唇にキスする。

目の前の整った白い顔が真っ赤になった。

口を押さえて岡崎君は後ずさる。

「あ、今の・・・？」

「なんか嬉しくてキスしたくなっちゃった。嫌だった？」

「そんな訳ないですけど、驚いた。」

「じゃ、もう一回してもいい？」

「・・・どうぞ。」

あたしは彼の首に両腕をかけた。

銀縁のメガネを外して彼の頬に触れる。

今度はゆっくり、あたしは唇を重ねた。

圭介がするように時間をかけて舌で唇を潤していく。

広い胸に体を委ねて、あたしは彼の唇を貪っていた。

やがて、おずおずと彼の長い腕があたしを抱きしめ、髪に触れ、首筋をなぞり始める。

「玲さん・・・。」

「なに？」

「もう制御がきかなくなりそうなんだけど・・・。」

「やめる？」

「・・・まだ早くないですか？その、時間的に。」

確かにまだ真昼間だけ。

あたしも圭介もその方面でのモラルが乏しい為、あまり時間に捕らわれることはなかった。

あたしは彼の口に舌を入れて黙らせる。

二人の唾液が混ざり合って、彼の白い顔を濡らしていく。いつもの真面目な顔が、快感に抗うかのように歪んだ。あたしは彼の真面目な殻をぶち壊したい衝動に駆られる。この人をもっと知りたい。色んな顔を見たい。

「あたし、岡崎君のこともっと知りたいの。」

「あ、はい……。」

荒くなつた息の下から、彼は呻いた。

「だから、いいじゃん。一緒に壊れちゃおうよ。」

「……了解。でも、お願いが……。」

「なに？」

「岡崎って呼ぶの止めて下さい。玲さん、主任と口調が似てるんですよ。」

「了解、悠樹！」

柔らかいラグの上に、あたしは彼を押し倒した。

### 35話

彼のシャツの下からあたしは手を差し入れ、体の線をなぞる。  
見かけよりガツシリした締まった体。

意外に厚みのある胸。

細い指に似合わない、筋肉質な肩と腕。

邪魔になってきた彼のシャツをあたしは頭から引つ張って脱がせた。  
白い彼の裸体が、昼下がりの日差しに照らされて顕わになった。  
きれいな体。

男の人ってこうなんだ。

圭介しか見たことのないあたしには、彼の何もかもが新鮮だった。  
横たわっている彼の首筋に下を這わせて、耳たぶをそつとかじる。  
いつも圭介がしている仕草を、あたしは無意識に繰り返していた。  
あたしの息が彼の首筋にかかる、彼は声にならない声で呻いた。  
あたしを抱く腕に力が入る。

今だ、快楽から逃れようと抵抗している彼がかわいくて、あたしは  
もつと壊したくなる。

圭介もあたしを抱く時こんな気持ちなんだろうか。

「声、出してよ。悠樹の声聞きたい……。」

圭介がするみたいに、耳元で囁く。

彼は仰向けになったまま、目だけ動かしてあたしを見た。

「ねえ、玲さん。」

「なに？」

「あの、いつもこんな感じなんですか？」

少し困惑したように、彼は言った。

「今、その話聞きたいの？」

あたしはキスで彼の口を塞いだ。

やがて彼の白い指があたしのデニムのワンプの前ボタンに触れた。一つつつゆつくりとボタンが外され、あたしの胸元がはだけられていく。

少し冷たい部屋の空気が、ひんやりとあたしの素肌に当たって鳥肌が立った。

「寒い？」

「ん……。ちょっとだけ……。」

彼はあたしに口付けながら、尚もボタンを外していく。

最後のボタンが外された時、あたしのブラをしただけの小さな胸が顕わになった。

あ、ヤバイ。

あたしの貧乳は他人に見せられるような状態じゃないのに。思い出してあたしは慌ててワンプで胸を隠した。

「ねえ、待って。やっぱり夜になるの待とうよ。」

「……。なんでですか？」

可哀相な彼は愕然とした。

仕草が一々ドラマチックだ。

「だってやっぱり恥ずかしいんだもん。あたしもう若くないし、人に見せるようなものじゃないし。」

ああ……。という顔で彼は微笑んだ。

「大丈夫です。メガネ外してから細かいことは見えてないので。多少のコンプレックスは気にしないでいいですよ。」

「……。どういう意味？」

あたしは彼を睨みつける。

貧乳がコンプレックスなのがバレてたみたいじゃない。

「ぼく姉が二人もいるんで、女性の気にしてることとか、好みとか、何となく分かっちゃうんですよ。」

頭をかきながら申し訳なさそうに悠樹は答えた。

「それ故、女性には絶対服従が岡崎家の家訓です。」

「いい心がけね。高田家もそうよ。」

「では、続きはどうします？」

「・・・見えてないなら、このまま続行で。」

あたしは偉そうに頷いた。

彼は優しい笑みを見せて、再び唇を重ねた。

あたしもそれを受け止める。

その間に彼の長い指はあたしのブラの中に侵入し、敏感になってきた先端で遊び始める。

「あ・・・。」

「声出していいですよ。」

思わず声を漏らしたあたしの耳元で彼が囁く。

やがて長い指によって、ワンピースが脱がされ、肩紐が下ろされ、ブラが外された。

下着一枚だけになったあたしを彼は軽々抱き上げ膝に乗せると、あたしの薄い胸に唇を這わす。

「あ・・・や・・・ああ・・・。」

今度はあたしが声にならない声を出す番だった。

僅かに残されたあたしの衣類に彼は手をかけ、ゆっくりと引っぱり下ろした。

膝に乗せた、完全に生まれたままの姿になったあたしを、彼は眩しそうに目を細めて見つめる。

昼下がりの日当たりの良い部屋は、あたしの裸体をまんべんなく照らしている筈だ。

あたしは恥ずかしくて、視線から逃れるように横を向いた。

「きれいですよ。こんなきれいな人、見たことない。」

「・・・もう！どうせ見えてないんでしょ？」

ハハ・・・と笑って彼は頭を掻いた。

「メガネの使用を許可してくれます？」

「絶対ダメ！」

あたしはべーっと舌を出す。

彼は笑いながら、膝に乗せたあたしを長い両腕で抱きしめた。

あたしの薄い胸に彼の厚い胸が密着する。

大きな体に抱きしめられて、あたしは彼の体温を全身で感じていた。  
「どうしよう、玲さん。あなたが好きだ。」

再び始まった激しいキスをあたしも無心で受け止める。

「・・・でも、あたし、まだ・・・。」

「構わないよ。あなたが誰を思ってたように・・・どうでもいい。」

あたしは抱かれたまま、ラグの上に寝かされた。

彼はあたしを見下ろした姿勢で体にもキスを続ける。

やがて彼の長い手で、あたしの両膝は少しづつ左右に開かれていった。

これから起る事にあたしも彼も緊張して、呼吸だけが激しくなっていく。

自分が求めているものに、あたしはもう気付いていた。

「ね、玲さん・・・。」

懇願するような彼の掠れた声がした。

「許可してくれます？」

「・・・ん。」

あたしは喘ぎながら頷き、そして目を閉じた。

### 35話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございました。

ここで第7章終了です。

このままもう少しお付き合いして頂けましたら嬉しいです。  
(^^^)

### 36話

海岸沿いの奈津美さんの家は、夜になると本当に静かだ。

遠くで潮騒が微かに聞こえるのと、周りの草むらから秋の虫の声。

車も滅多に通らない。

外灯もない家の外は本当の闇だ。

月明かりだけが、窓辺の置かれた彼女のベッドをスポットライトみたいに照らしている。

「わたしにしとく？」

あの時、奈津美さんが言った最後のセリフをオレは受け止めた。

旦那を追い返したお礼か、寂しいのか、もしくはオレが玲の話なんかしたから報われなくて可哀相だと思ってくれたのか。

いずれにせよ、彼女がオレのことを考えてくれたことには素直に嬉しかった。

やがて真っ暗な部屋のドアがゆっくり開いて、彼女のシルエットが浮かび上がった。

ネグリジェみたいなロングドレスを纏っている。

無造作に縛っていた長い髪を下ろし、すごい色っぽい。

彼女はゆっくりオレが腰掛けているベッドに近づいて来た。

シャンプーの甘い香りが立ち込める。

硬直しているオレの横に、彼女は体をぴったりくっ付けて座った。

柔らかい大きな胸がオレの腕に当たる。

今まで感じたことのない質量感にオレは緊張した。

「リラックスして。」

彼女はベッドにオレを仰向けで寝かすと、そつと唇を重ねた。



「奈津美さん・・・無理しないでよ。」

「無理じゃないけど？」

「オレとこんなことしたら後悔しない？」

「しないわよ。」

「これってお礼？それとも同情？」

「どっちでもないと思うわ。」

「おれは・・・甘えたいだけかも。それが失礼ならやめた方がいいよ。」

「失礼じゃないわ。あたしがエッチしたいだけかもよ。」

ウェーブのかかった黒髪に縁取られた彫りの深い顔立ち。

大きな黒い瞳が艶かしく、濡れている。

外国で見た夜の女みたいに、彼女はオレを挑戦的に見つめた。もう逆らえなかった。

オレは緊張しながら彼女の顔にそつと触れた。

その手を掴まえて、人差し指を口に咥えると彼女はゆっくりしゃぶっていく。

彼女の舌の動きと、時々当たる歯の感触に鳥肌が立つてくる。

全ての指を口にした後、彼女は唾液で濡れたオレの指をドレスの胸元に誘った。

質感のある二つの胸の谷間をオレの指がなぞっていく。

日焼けした顔に似合わない程真っ白な胸が、ドレスからはみだした。その片方の胸を掴んでオレは口を含む。

「・・・う・・・ん」

彼女の口からせつない声が洩れた。

オレは彼女の大きな体を抱き寄せ、背中のファスナーを開く。

緩くなったドレスがスルリと肩から落ちて、玲とは全然違う成熟した女体が現れた。

オレは彼女をベッドに押し倒して、その体を観察した。

大きな胸、曲線を描く腰から太腿へのライン。

全体に丸みを帯びたシルエット。

柔らかな白い肌は体に吸い付いてくるみたいだ。

彼女は恥ずかしそうに横を向いて目を閉じている。

これからオレにされることを覚悟して待っているかのようだ。

そんな彼女がかわいかった。

「きれいだよ、奈津美さん。」

彼女はビククリした顔でオレを見上げた。

「ウソ。見え透いたこと言わなくていいの！」

「なんで？ウソじゃない。きれい過ぎてオレ、すごくその気になってきた。」

オレは着ていたシャツを脱いで投げ捨てた。

仰向けに寝ている彼女に襲い掛かり、唇を貪る。

それを避けるかのように横を向こうとする彼女の頭を抑えて、オレは尚も攻めた。

指で彼女の口元を押さえつけ、オレの舌は彼女の口の中を侵略していった。

二人の唾液が彼女の口元から滴る。

オレはそれを見てこの人をもっと穢したい衝動に駆られる。

何だろう。

こんなに女性を征服したいって思ったのは初めてだ。

玲は小さくて、やせっぽちで大柄なオレが触ったら壊れてしまいそうだった。

だからオレは、華奢な彼女を壊さないように大切に扱っていた。

生まれつきのキャラの違いも大きい。

長男のおっとり性格のオレに比べて、末っ子の玲はオレに対していつも強気だ。

加えて、オレには彼女の人生をブチ壊してしまったという良心の呵責なるものが常に付き纏っていた。  
要するに、オレは玲には勝てない。

だけど玲におねだりされ、それを実行し、彼女が喜ぶ顔を見るのが、オレの幸せだった。

今、オレの目の前にいる女性はそんな今までのオレの全てを破壊する力を持っている。

男の中の野生の部分が、彼女を前にすると前面に飛び出してくるのだ。

掛け値なし、駆け引きなし、ただの雄と雌になって交尾したくなる。そして彼女はそれを受け止めてくれる優しさと強さを持ち合わせていた。

女性として幸か不幸か分からないけど、奈津美さんには男を狂わす天性の才能がある。

オレもいつの間にか、その狂った男の一人になっていた。

時折、邪魔をしようとする彼女の両手をオレは片手で掴まえ、頭の上で押さえ込む。

顔がオレの唾液で濡れてくるほど、オレは彼女の口を攻め続けた。顔を離すと彼女は大きく肩で喘ぎ、大きな胸がそれに伴って上下に揺れる。

彫りの深い顔が上気して、黒い瞳が涙で潤んでいる。

「きれいだよ、奈津美さん。」

オレはもう一度言って、今度は優しく頬にキスした。

彼女は喘ぎながら、目を細めて微笑んで言った。

「今度はあなたがリラックスしてよ。」

オレのジーンズのジッパーが彼女の柔らかい手によって、ゆっくり下げられていった。



### 37話

彼女の手によってオレは完全に裸にされ、ベッドの上に座らされた。今度は彼女がオレを観察する番だ。

彼女の黒い瞳がオレを嘗め回すように見つめるのに、オレはヘンな興奮を覚えた。

少し前、風呂場で玲を吊し上げて見た事があつたっけ。

玲もオレにされる時ってこんな気持ちだったのかな。

兄にこんなことされるのってホントに嫌じゃなかったんだろうか。

そんなことをふと考えた時、ベッドの上に座っていたオレの足に彼女の長い髪がかかった。

下半身に生暖かい感触を感じ、オレは思わず仰け反る。

彼女の舌が動く度、オレは呻いて手で口を押さえた。

ほつといたら大声で喚いてしまいそうな、すごい快感。

「あ、あ、ちよ、ちよつと、奈津美さん・・・」

思わず後ずさるオレの腰を逃がさないように抱きしめ、彼女は舌による運動を繰り返す。

逃げ場を失ったオレは、せめて彼女の中で果てないように快感に耐えるしかなかった。

「あ、あ、あの・・・奈津美さん！もうヤバイかも・・・。」

オレは女の子みたいに手で口を押さえて、泣きそうな声を出した。

やっと彼女はオレの腰を解放し、手の甲で口の周りを拭くとニヤリと笑った。

「妖艶。」

そんな言葉がよく似合う。

さっきまでのゾウみたいな穏やかな奈津美さんではなく、男を餌食にする肉食動物みたいだ。

オレを仰向けに押し倒すと、彼女はゆっくりとオレの上に乗った。腰を深く沈めて、痛みに耐えるかのように肩で大きな息をする。オレは彼女の尻の肉を掴むと本能に従ってゆっくり前後に動かした。彼女はオレの上で仰け反り、快感に悲鳴を上げる。オレ達はお互いの本能に突き動かされるまま、体を合わせた。

やがて二人の汗と体液でお互いの体が湿ってきた。

オレは喘ぎながら彼女に囁く。

「ね、奈津美さん。」

「・・・ん？」

「終わってもオレのこと食べないでよ。」

「あたし、虫じゃないわよ。」

激しい息の下でオレ達は小さく笑い合った。

オレは最後に彼女を背中から羽交い絞めにして後ろから攻めた。首筋に歯を立ててキスし、大きな胸を鷲掴みにして爪を立てる。痛みと快感で彼女は声を上げた。

オレはその声を聞きながら、彼女の中で果てた。

ベッドに手足を投げ出して、仰向けに倒れる。

まだ心臓がバクバク鳴って、心地よい脱力感。

陸上部だった時の短距離のレースを思い出した。

すごい充実感だった。

ただの雄になつて本能のまま性欲を満たした気がする。

奈津美さんは優しく微笑みながら、まだ痙攣しているオレの体を抱きしめ、オレの髪をかきあげ、額にキスしてくれた。

「きれいよ、圭介君。すぐその気になっちゃった。」

艶かしく彼女は笑うと、ペロつと舌を出した。

オレは思わず苦笑して、彼女の胸に顔を埋める。

「敵わないな、奈津美さんには。」

「眠ってもいいよ。見ててあげるから。」

彼女は母親のようにオレを抱くと、柔らかい羽布団をかけた。

「・・・ありがとう。じゃ、少しだけ・・・。」

温かい胸の鼓動を聞きながら、オレは意識がなくなっていくのを感じた。

### 38話

ピピピピ、ピピピピ、と聞き覚えのある電子音でオレははっと目を覚ました。

一瞬ここがどこだか分からず、オレはキョロキョロ周りを見回した。隣で眠っている柔らかな女性を見て、オレはやっとさっきまでの一連のコトを思い出す。

ピピピピ、ピピピピ・・・

止まる気配のない電子音の音源を探して、オレは裸のままベッドから這い出した。

さっき脱ぎ捨てたジーンズのポケットが緑の光で点滅している。

鳴っていたのはオレの会社用の携帯だ。

嫌な予感がして、オレは携帯を手取る。

寝ている彼女を起こさないように、背中を向けて着信ボタンを押した。

「はい、高田です。」

「俺だ。鈴木だ。今、おまえどこにいる？」

しゃがれた50代の男性の声。

輸入部の部長だ。

「どこって・・・家ですが。」

自宅とは言っていないけど、家には違いない。

オレはさらりと嘘をついた。

「今、ヨーロッパ支部の駐在員から連絡が入った。この前、台風でやられたコンテナの保障で追加発注してたのがあるだろう。」

「ああ、岡崎がもう手配してますよ。」

「クライアントの次の出荷に間に合わないらしい。商品が集まらないらしいんだ。」

「はあ？そんなバカな・・・」

「こっちで同じ商品を大量入荷した企業があるらしい。そっちに先



を越されて売り出されたら、クライアントは契約解消だ。」

「そんなこと……。」

いや、あるかも。

何がきっかけでブームが来るか分からない。

くだらんダイエツト番組でバナナが宣伝されたら、アジア中のバナナが一時品切れになったことがあった。

だからオレ達商社は、常にアンテナを張って世の中の動向に目を光らせなければならない。

確かに最近のオレ、たるんでたな。

オレは舌打ちして、髪をグシャグシャかき混ぜた。

「岡崎に連絡して、明日の便でヨーロッパ支部に行くようにさせる。現地で何とか調達するか、クライアントと交渉して代用品を持ってくるか……。どっちにしても面倒だな。」

鈴木部長のしゃがれた溜息が聞こえた。

オレはちよつとの間考えてから、覚悟を決めて言った。

「オレが行きますよ。岡崎じゃまだ役不足です。気がつかなかったのはオレの監督不行き届きだ。」

部長が少しホツと安堵したのが、電話越しに伝わる。

「どちらでもいいんだが、とにかく明日の便で行ってくれ。チケットは空港で発行。詳細はメールで送っとく。」

「了解しました。」

オレは静かに電話を切った。

「お仕事？」

奈津美さんの声にオレはビクつとして振り返った。

月明かりに照らされたベッドに、彼女は裸のまま足だけ布団に入っ  
てオレを見つめている。

乱れた長い髪が胸を隠して、アンデルセンの人魚姫みたいだ。

オレは無理矢理、笑って見せた。

「ごめん、奈津美さん。オレ帰らなきゃ。」

「何かあったの？」

彼女の顔が不安そうに曇る。

オレはベッドに近づいた。

「いつもの呼び出し。でも今回長引くかも。片付いたらまた来るから。」

何か言いたげに口を開いた。

オレはその口に素早くキスする。

「ごめん。オレ、行くね。」

早く行って何とかしなければ。

そうしないと、担当の岡崎にしわ寄せがくる。

彼女を背にオレは散らばった自分の服をかき集めた。

「行っちゃうのね？」

彼女の声が再びした。

玲みたいなの、頼りない猫みたいな声に、オレは堪らず振り返って彼女を抱きしめる。

彼女の長い髪に顔を埋めて、オレは耳に囁いた。

「また来るよ。あ、オレの携帯番号おいていくから。奈津美さんも教えてよ。」

しばし沈黙した後、彼女は意を決したように言った。

「……ごめんなさい。それは要らないわ。あたしも教えない。」

「えっ？」

まさかの拒否に、オレは耳を疑って思わず、顔を見た。

彼女は菩薩のような笑みを浮かべて言った。

「今夜のことは忘れようよ。圭介君があたしのこと愛してないのは分かってるもの。圭介君は、妹さんのことで悩んで甘えちゃったのよ。あたしはあなたとこうしたかっただけ。二人とも愛し合ってたことじゃないでしょ？まだ未来のある圭介君が、こんなところで

死んだ子供の墓守をしてるような女に深入りしちゃダメよ。」

オレは黙って唇を噛んだ。

少なくとも前半は返す言葉がない。

愛し合ってた行為ではなかった。

オレは玲を忘れる自信はまだなかったから。

「じゃ、もう会えないの？」

オレは子供のようにおずおずと聞いた。

「会えるわよ。あなたか会いたいときにここに来ればね。でも、あなたが二度と来なくてもあたしは構わないわ。だから、約束するのはやめましょう。」

彼女は月明かりに照らされて微笑む。

全てを許してくれる女神のような、慈悲深い笑顔だ。

「オレ、奈津美さんのこと好きだよ・・・。」

「分かってる。でも、あたしが一番じゃないでしょ？あたしが一番に愛されたいんだもん。」

言い返せなかった。

オレは玲を忘れない。

このまま奈津美さんと逢瀬を重ねても先のない体の関係だけが増えていき、結局は彼女を都合のいい女にしてしまっただけだ。

それでも、オレは奈津美さんを愛してるって言えなかった。

オレの気持ちを見透かして彼女は優しく言った。

「あなたは何も悪くないのよ。あたしがエッチしたくてあなたを誘った。それだけでしょ？だから、早く行って。」

オレは心を決めて立ち上がった。

「ごめん。今は帰らなきゃ。必ずまた来るからまたゆっくり話しよう。」

玄関の外は月明かりでバカみたいに明るかった。  
ドドー・・・という潮騒がすごく近くに聞こえる。  
携帯の時計を見ると10:00を過ぎている。  
オレはさっきまでオレ達が寝ていたベッドの上の窓を振り返ると、  
黒い影が部屋の奥に消えたのが見えた。  
後ろ髪を引かれる思いでオレは車に乗り込んだ。

### 39話

海沿いの国道を走り抜け、市街に出る。

ゴタゴタした小さな市街地を抜けると、一気に道が広くなり、高速のインターの看板が見えた。

これに乗れば、12時には家に着くだろう。

玲はもう寝てるのかな。

起きてたら、旅行カバン出しといてもらおう。

オレはインターの直前のコンビ二に車を止めた。

携帯で自宅の電話にかけてみる。

ツアコンのくせに、玲は携帯電話をいつも携帯していない。

もつとも職業柄、オフの時くらい持ちたくないのかもしれないけど、しばしコールした後、誰も出ないことを確認して、オレは電話を切った。

こんな時間までどこほつつき歩いてんだ、あの不良娘。

その時、すっかり忘れていた朝の出来事を思い出して、オレははつとした。

まさか、こんな時間まであいつといるのか？

もうすぐ11時だぞ。

まさかあいつの部屋にいるんじゃないや・・・。

身勝手なオレは逆上して携帯を握り締める。

今まで奈津美さんとしてたことは棚に上げて、オレは怒り心頭で岡崎の携帯に電話した。

しばらくコールが続いた後、岡崎の落ち着いた声がした。

「あ、主任。お疲れ様です。」

その相変わらずの落ち着きっぷりに、オレの頭に血が昇った。

「お疲れ様じゃねえよ！おまえの担当の球根、入荷間に合わないからな！オレ、明日からヨーロッパ支部行くけど、玲に手え出すんじ

「やねえぞ！」

「一気にまくしたてたオレを待って、ヤツの声が少し慌てた。

「どういうことですか？あれはもう手配済みだったのに。」

「よく分かんないけど、多分、安値で大量に買い占められた。とにかく、オレは明日から行くから、こっちでのフォローは任せる。いいな。」

「了解しました。」

ヤツの落ち着いた声で、オレもやっと落ち着いた。

こいつは了解したら、必ずオレの言う通りに動く。

ちよつと融通が利かないけど、こいつの仕事は信頼できる。

これで仕事の件は大丈夫。

オレは深呼吸してから、核心に迫った。

「玲、そこにいるのか？」

「……。」

しばし沈黙があつた後、ヤツの落ち着いた声がした。

「いますよ。替わりますか？」

「……。」

いるんだ、やっぱり。

オレは殴られたような衝撃を感じた。

と、いうことは今まで一緒にいたのか。

仲良くやってるんだな。

我儘な玲がこんな長い時間、一緒に居られる相手なんてそうそういるもんじゃない。

こいつなら玲を任せられる。

これでオレの希望は叶った訳だ。

でも、オレは……？

オレはあいつを忘れられないのに！

「……いいよ、別に。オレがいない間、あいつのこと頼む。明日

からいないけどちゃんとメシは食うようにって……。」

オレは小さい声でやっと、それだけ言った。

「あ、主任？ちよっと待って……。」

「圭介！！」

電話の向こうで聞きなれた高い声がした。

岡崎の手から携帯を剥ぎ取ったんだろう。

キャンキャンと甲高い声が響いて、オレは携帯を少し耳から離れた。

「圭介、何それ？急過ぎるし！明日からいつまで行くの？」

「分からない。解決するまで。クリスマスまでには戻ると思うけど。」

「

「ねえ、圭介。あたし話したいことがあるの。聞いてくれる？」

オレには何の話か大体想像がついた。

聞きたくない……。

オレはもう泣きたくて呻いた。

だけど、最後の饞にネガティブなこと言うわけにはいかない。

これはオレの中の僅かな兄としての矜持だ。

「いいか、玲。オレがいない間、何かあったら何でも岡崎に相談しろよ。」

「ねえ、聞いて圭介。あたしね。」

「先にお兄ちゃんの話聞けよ！」

尚も何かを伝えようとする玲をオレは遮った。

岡崎のことが好きになったとか、岡崎に抱かれたとか、だからゴメンなんて、そんな話はどうしても彼女に言わせたくなかった。

「もう何にも言わなくていいよ。おまえは自分が一番幸せになれる場所にいけ。オレはお兄ちゃんだから。オレ達は家族なんだから、いつでも守ってやる。だから、おまえはおまえが好きになったヤツのところに安心して行っていいんだ。分かったな？」

「……うん。ありがと、圭介。」

電話を握って微笑む玲の顔が目に見えるみたいだ。

オレは携帯を切って、ポケットにねじ込む。  
精一杯の見栄を切ったオレは、深呼吸をして空を仰いだ。

車に乗ってエンジンをかけると、つけっ放しだったFMから懐かしいピアノのイントロが聴こえて来た。

高校の時、オレが大好きだったブライアン・アダムスの Ever  
ything I Do I Do It For You。

英語で君のためなら何でもやるって言ってる。

何だよ、このタイムリーな一曲。

オレは苦笑した。

ロックの神様がオレを慰めてくれてんのかな。

ハスキーな歌声を聴いてるうちに、ボタボタ流れてくる涙をもう止めることが出来なくって、オレはハンドルに突っ伏した。

あいつと幸せになれ、玲。

オレはそれでもおまえを愛してる。

曲が終わるまで、オレは声をあげて泣いた。



## 40話

高田主任がヨーロッパ支部に行ってから早、2ヶ月が経とうとしていた。

彼の尽力で何とか商品は集まり、足りない分はぼくがクライアントとその都度交渉して、事態は何とか収まった。

12月に入った街はもうクリスマスモード一色で、どこを歩いてもクリスマスソングが聞こえる。

高田主任は問題がこれ以上起きなければ、今週末の便で帰国する予定になっていた。

「圭介が帰ったら三人でクリスマスパーティーしようね。」

玲さんは無邪気に彼が帰る日を指折り数えて待っていた。

お兄さんと、ぼくと、彼女のパーティー……。どうなんだろう。

ぼくはもちろん賛成だけど、主任がそれに参加してくれるか自信がなかった。

あれから主のいなくなった主任のマンションに彼女は居たがらず、今度はぼくの部屋にやってくるようになった。

最初は彼女から電話が鳴る度、ぼくは車で迎えに走っていた。

だけど、彼女のマンションで過ごして、ぼくが帰った直後に「迎えに来て。」、寝る直前に「今から来て。」と電話がだんだんエスクレートしてかかってくるようになった。

それがお互い苦痛になってきて、ぼくはとうとう切り出した。

「もう主任が帰って来るまで、ここに居てください。」

彼女はその言葉を待ってたかのように、嬉しそうに頷いた。

ぼくの帰りを彼女は何も食べずに待っている。

有り合わせの物で作ったぼくの料理を顔を綻ばせて食べてくれる。それから寝るまで、ぼくらはピアノを弾いたり、雑誌を二人で眺めたり、穏やかな時間を過ごす。時々、ぼくは幸せで怖くなる。

「こんなに幸せでいいんですね。」

ぼくは寝る前に彼女にキスしながらいつも聞いてしまう。

「いいんだよ、きっと。」

彼女は笑ってキスを返してくれる。

ぼくはそれを確認してから、彼女を抱きしめて眠りにつくのだ。

仕事は順調だった。

無表情だったぼくの顔が最近人間らしくなったと会社で噂になっているらしい。

以前は人間でさえなかったのかと複雑な気分だが、多分ぼくは本当に変わったと思う。

てめえ生意気なんだよ、と主任に笑われそうだけど、守りたい人が家で待つただけでいろんなことに頑張れるようになった気がする。それまでは他人の為に何かしようなんて考えたこともなかった。

これだから、孤立してしまっていたのだと今更気付く。

今は社内ではそれなりに良好な人間関係を構築しつつあった。

もうじき主任が帰ってくる。

それについて心配なことがいくつかあった。

一つは当然、彼女がまた彼の元に帰ってしまうこと。

ぼくは彼女がしたいことは全てリスペクトするつもりだ。

彼女が戻りたいと言うのなら、それを妨げることはしなくなかった。だけど、このささやかな今の幸せが消えてしまうのは、さすがに耐えがたい。

主任に再会した彼女がどんなリアクションを見せるのか、ぼくには

分からなかった。

もう一つの気になっていることは、彼女の体調だ。この2週間位、だるさを訴え寝ていることが多くなった。

何でも食べてくれたばかりの料理も、最近は手もつけずに残してある。ツアコンの仕事も断わっているみたいだ。

もともと細かった体が更に細くなって弱々しい。

ぼくにできることはなるべく早く仕事を切り上げ、彼女の傍にいてあげることだけだった。

そんなぼくを彼女は優しく抱きしめる。

「ありがとう。悠樹は心配しないで。」

なんか今までの勝気な女の子のイメージと違うのだ。

そんな殊勝なことを言い出す彼女を見て、主任は何て言うだろう。おまえ、病気か？って笑うに違いない。

「でも、保護者としては病院に連れてくべきか・・・。」

ぼくはぶつぶつ言いながら、寒くなってきた街を家路に向った。

「ただいま、玲さん？」

マンションのドアを開けると、部屋の明かりが消えたままだった。真っ暗な玄関でぼくは手探りでスイッチを探す。

主任のマンションに帰ってるのかな？

時々、マンションに戻っては着替えを持ってきてたのは知ってた。リビングには誰もいない。

ぼくは寝室を覗いた。

ベッドが微かに動いたのを見て、ぼくは声を掛ける。

「玲さん？寝てるんですか？」

ぼくの声に反応して布団がムクリと起き上がった。

その布団を頭から被って、彼女はベッドの上に座り込んでいる。

なんだ、いたのか。

ぼくは取り合えずほっとして、彼女の前に座った。

「気分が悪いんですか？ご飯は？」

聞きながら、ぼくは彼女の尋常でない表情に気付いてギョツとした。顔は蒼白で、細い腕がブルブル震えている。

目が赤く腫れているところを見ると、泣いてたみたいだ。

「どうかしました？病院行きます？」

ぼくは彼女が被っていた布団を跳ね除け、細い手首を握って脈を確かめる。

冷たい手だった。

「・・・病院なら・・・今日行ってきたの。」

彼女は声を震わせて、やっと言った。

ぼくははっとして口を閉じた。

彼女は涙をぼろぼろ流して、ぼくに言った。

「どうしよう、悠樹。あたし妊娠してるの。」

ああ、やはりそうきたか。

ぼくは彼女を抱き寄せ、頬にキスした。

「怖がらなくていいよ。玲さん。ぼくと結婚しよう。」

ぼくは真っ直ぐに彼女を見詰めた。

こうなった時は必ずこう言おう。

ぼくは以前から決めていた。

「でも、もう4ヶ月だって。」

彼女は尚も泣きながら訴える。

4ヶ月？

僕達がそういう関係になったのはまだ2ヶ月前だから・・・？

ぼくは上手く回らない頭を必死に回転させた。

え、つまり・・・？

「あたし圭介の子供を妊娠してるの！どうしよう、悠樹・・・。」

主任の子供？

つまり、それは実のお兄さんとの・・・？

何と言っていいか分からず、ぼくは彼女を抱きしめるしかなかった。

## 41話

「落ち着いて、玲さん。泣かなくていい。ゆっくり話そう、ね。」  
ぼくは自分を落ち着かせる為にも、彼女に言った。

ぼくの腕の中で小さくなつて泣いている彼女は、迷子になった子供  
みたいだ。

それでも、ぼくの言葉に彼女はコクンと頷いた。

リビングに明かりをつけてソファに座らせてから、ぼくはホットミ  
ルクを作つて彼女に勧めた。

「ありがと……。悠樹。」

泣き腫らした目でぼくを見つめて、彼女はミルクに口をつける。

真つ青だった彼女の頬に少し赤みが差してきた。

こんな時、何を言ったらいいのか。

せめて自分の子供だつて言われたなら、もう少しマシな対応ができ  
ただろうけど。

彼女が、この事態を喜ばしく受け止めているのかどうか、それも微  
妙なところだ。

考えているうちに、彼女の方が小さな声でボソボソと話し始めた。

「生理がきてなくて……。でも、ピル飲んでたから大丈夫だと思  
つてたの。でも、最近気持ち悪くて、ご飯も食べれなくて……。  
まさかと思って今日病院に行ったの。そしたらもうすぐ5ヶ月に入  
るって。多分、8月か9月……。まだ悠樹に会う前なの。圭介の  
子供よ。」

一度は止まった涙が、彼女の目からぼろぼろ溢れ出した。

「……。高田主任は今週末帰国予定です。まだ現地と連絡つきま  
すけど。報告しますか？」

動揺からか、自分でも滑稽なほど業務口調になってしまい、ぼくは

焦った。

ダメだ、こんな時はもつと柔らかく話してあげなくちゃ。

「・・・怖い。圭介に知られるのが。」

ぼくの言葉に彼女は首を横に振る。

「どうしてですか？」

「圭介は子供つくるのにずっと反対してた。戸籍だの、遺伝子だのつて。だから墮ろせて言うと思う。」

「まさか、そんな・・・。」

高田主任がそんなことを言う筈はない。

ないけど、実際生まれたら父親は主任になるのか？

仮にぼくが認知したとして、ぼくは主任の子供を育てることになるのかな？

主任はそれについて、なんていうだろう？

考えたこともなかった、ややこしい事態にぼくは腕を組んで考えた。

「・・・玲さんはどうしたいんです？」

「産みたいよ。絶対産む！」

彼女は突然、キッと顔を上げてぼくを睨んだ。

「あたしは一人でも産んで育てるわ。圭介が認めなくても、シングルマザーとして生きていくもん。」

「いや、なんにもシングルにならなくても。だったらぼくと結婚しましょうよ。」

ぼくは真面目に言った。

彼女はまた泣きそうな顔になる。

「結婚したら、この子を岡崎の苗字にしてくれる？」

「結婚後に出生届出したら必然的にそうなりますよ。」

「だって、岡崎君の子じゃない。圭介の子だよ。」

「でも、玲さんの子でしょ？結婚したらぼくの子ですよ。」

彼女は両手で顔を覆った。

嗚咽を堪えて、細い肩が上下に揺れている。

「・・・ありがとう。」

小さな声で彼女は言った。

ぼくはその細い肩をそっと抱く。

「まだ、心配なことがあります?」

「い、遺伝子が・・・」

彼女はしゃくり上げながら言った。

「近親婚だと子供に障害が出るかもって・・・」

「ぼくも聞いたことあります。でもね。古今東西、近親婚なんてよくあったんですよ。権力者であればあるほど、他人を入れないように身近にいる人間でくっついてたんです。だから確率的には多くても全てがそうとは限らないと思います。だからそれを理由に今から諦めるのはナンセンスでは?」

彼女は潤んだ目でやっと笑った。

「悠樹、ヤフーの知恵袋みたい。」

「論理的と言って下さい。」

ぼくは彼女を引き寄せ、胸に抱きしめた。

小さな彼女が、痩せて更に小さくなっている。

でも、この小さな体の中にはもう一つの命が宿っているのだ。

「ね、玲さん。心配しなくていい。主任に話すなら、帰ってからぼくから話します。今はご飯食べて、体力つけて・・・」

「うん。」

「他に心配なことは?」

「・・・もう大丈夫。ありがとう。」

ぼくの胸に抱かれて、彼女はやっと安堵した表情で微笑んでくれた。そうだ、今、言わなければ。

ぼくは咳払いを一つしてから、背筋を伸ばした。

「玲さん。では、改めて申し込みます。ぼくと結婚してくれますか?」

彼女は涙で潤んだ瞳で見つめた後、微笑んで頷いた。

「・・・はい。よろしく願います。」

やった!



ぼくは抱きしめ唇を重ねた。

彼女の体の重みの中にはもう一人分の生命が入っている。

ぼくは彼女の夫になり、父親になるということか。

考えながら、ぼくは何だかくすぐったくて、顔が緩んだ。

「悠樹、また一人で何か考えてる。」

彼女の声にはぼくは我に返った。

「・・・いや、これからはモーツァルトでいこうと思って。頭をかきながら、ぼくは照れ笑いする。」

「何、それ？」

「妊婦さんと、胎教にいらしいですよ。」

ぼくらはもう一度、優しいキスをした。

## 42話

金曜日の朝、いつもの通りメールチェックを始めると高田主任からメールがきていた。

帰国予定の報告だ。

今夜のフライトで日曜日の夜に中部国際空港に到着予定。

ぼくは溜息をつく。

この日を待っていたような、きて欲しくないような。

複雑な心境の理由はもちろん、こちらから報告することがあるからだ。

一つ目はぼく達の結婚の報告。

そこまで許可してねーよっていつもの口調で怒鳴られるに違いない。これが認められたら、彼は晴れてぼくのお兄さんになる。

あとは、当然彼女の妊娠の件だ。

ぼく達はまだ、主任に真実を告げるべきかどうか迷っていた。

ぼくはいずれ分かってしまうなら、最初から本当のことを話すべきだと主張した。

なにしろ、生まれた子供がぼくに似ていることは有り得ないのだから。

いくら呑気な主任でも、いつかは疑うに違いない。

彼女は中絶しろって言われるのが怖いと、最初からぼくの子だと嘘をつくつもりだった。

ぼくは高田主任がそんな小さい男だと思ってないし、第一、嘘がつけない性格なのでそれには反対した。

ぼく達は結婚には前向きなもの、その件については平行線だった。

年末に向けて取引先の外資系企業はすでにクリスマス休みに入って

いた。

今年はもう大きなヤマはない。

周りを見ても、暇になった社員達が時間潰しにネットを見ている。今年ももう終わりだ。

ぼくはさつさと仕事を片付けていった。

少しでも早く、身重の妻の顔を見るために。

マンションに帰ると、彼女はリラックスした表情でソファにかけてテレビを見ていた。

「おかえり。」

「あ、ただいま。大丈夫です？」

ぼくは彼女の横に腰掛け、頬にキスする。

彼女は穏やかに微笑んだ。

大分顔色がいい。

「大丈夫よ。下着とか、マタニティ用に変えたらすごく楽になった。」

「そういうもんですか・・・。」

ぼくは首を傾げながら適当に返事をした。

そればかりは姉がいるとは言え、男のぼくには想像がつかない。

「妊娠ってどんな感じなんですかね？」

「うーん。幸せ、かな？ここにいると思うと、なんか嬉しいの。」

彼女はお腹をさすって笑った。

まだ全然大きく見えないお腹を、ぼくもそつと触ってみる。

「・・・動きませんね。」

「やだ、まだ早いよ。外から分かるのはもっと先らしいよ。」

「はあ・・・。あ、そうだ。」

ぼくは姿勢を正して、咳払いをした。

「まずは主任に報告、ですが、その後は玲さんのご家族にもご挨拶に行かなければね。そしてぼくの家族にも報告しなければならなし。そろそろ日程をたてておきましょうか。」

「そうだね。じゃ、いつも年末に圭介も一緒に里帰りするから、浜松に来て！」

彼女は子供のように喜んだ。

遊びに行くんじゃないですよ・・・。

大はしゃぎの彼女を見つめてぼくは苦笑いする。

ぼくは既に妊娠している彼女と結婚する報告を両家にしなければならぬのだ。

まさか親に主任の子だとは言えない。

ぼくらはお互いの親には嘘を突き通すことで合意していた。

と、いうことはぼくはデキ婚の報告をしにいくのだ。

彼女の父親に殴られる資格は充分にある。

「悠樹の実家は岐阜だよな？雪降る？」

彼女はもう旅行にでも行くように目を輝かせている。

「岐阜って言うても大垣だから、ここから一時間くらいですよ。ぼくの住んでるところにはさほど降りません。」

「豪雪地帯じゃないの？」

「それは高山のほうでしょ？岐阜は広いんです。」

なあんだ、と彼女はガツカリした。

「悠樹はスキーで学校に通ってたかと思った。」

「いくら岐阜でも、平成の世の中でそれはないですよ。」

ハハ・・・とぼくは顔だけで笑った。

岐阜県民というだけで、よくされるこの質問。

実はぼくはスキーができない。

「式場もそろそろ予約しないと。出産前に式を挙げるなら体調が安定した頃がいいですね。あ、予定日は？」

「5月の始め。」

「いい時期ですね。では2月頃？」

「嫌よ。もうお腹が大きいじゃない。ドレスが似合わなくなっちゃ

う。」

「じゃ、すぐしますか？ぼくは構わないけど、体調を優先にしない  
ちゃ。」

うーん、と上を向いて彼女は考えてから、言った。

「圭介は何ていうかな？」

「さあ……。いつでもいいって言っただけじゃないですかね。」

あのやさぐれた甘いマスクにタバコを啜えて「勝手にやってるよ。」  
と言う高田主任が目には浮かんだ。

果たして彼は祝福してくれるのだろうか。

ぼんやり考え込んだぼくの肩を彼女が叩いた。

「ね、明日帰って来るんでしょう？空港に迎えに行こうよ。」

「え？セントレアまで？遠いですよ。夜の便だし、まだ安定期でな  
いんだから止めた方がいい。」

ぼくは首を横に振った。

「行くならぼくが一人で行きますよ。」

「やだ、そしたらあたしが一人になっちゃうじゃない。」

「じゃ、主任には電車で帰ってきてもらわなくては。大丈夫。どん  
な方法で帰ってきてても、会社から経費は落ちます。」

ぼくは強引な理屈で断わった。

何となく、彼に会うのが怖かったのかもしれない。

運命の分岐点って本当にあると思う。

この時、ぼくらが迎えに行くことになっていたら、全く別の物語に  
なっていたに違いない。

ぼくは死ぬほど後悔することになることを、まだ知る由もなかった。

## 43話

その日は、天気の良い穏やかな日曜日だった。

玲さんを車に乗せ、帰って来る主任のために買い物にでかけた。

何しろ、主任が日本を離れてから彼女はマンションに戻ってないのだ。

食べ物がないもないのが救いだが、部屋の空気くらいは入れ換えとかなければ。

と、ぼくが主張したので、彼女も賛同した。

近くのスーパーでシャンプー、トイレトペーパーなどの日用品や、最低限の食料を買い込み、ぼくらは彼のマンションに向った。

玲さんはゆったりしたマタニティチュニックにレギンスというスタイルだった。

もとは細いので今まで変化を感じなかったが、若干お腹がせり出してきているのが分かる。

いつも見ているぼくが分かるくらいだから、久しぶりの再会の主任が見たら一目瞭然だ。

ぼくの子供だと思っていきなり殴られたらどうしよう・・・。

先にメールで知らせとくべきか？

いや、デリケートな問題だから会って伝えた方がいいかも。

また一人でブツブツ言い出したぼくを見て、彼女はクスクス笑った。前より笑顔が優しくなっている。

そしてなんと言うか、表情が落ち着いた。

女の子から女、いや母の顔に変わったのか。

これも妊娠効果なのかな。

ぼくは知らない女性が隣に乗っているような気がして、少しどきどきした。

久しぶりの主任のマンションは、ぼくの期待を裏切らなかった。彼女が鍵を開けると同時に、ぼくはズカズカ部屋に侵入した。

湿っぽい空気にタバコと、スナック菓子の匂いが充満している。窓を開け放つと、冷たい師走の空気がさあっと部屋中に入ってきた。2ヶ月間放置してあったタバコの吸殻が入ったままの灰皿、コンビニ弁当のパック、スナック菓子の袋、ビールの空き缶……。

殆んど男の一人暮らしの状態だ。

ぼくはゴミ袋を片手にそれらを片っ端から回収していく。

「ありがと、悠樹。ごめんね。」

彼女は体がだるいのか、ソファにもたれるように腰掛けて、働くぼくを見ていた。

「いいですよ。ぼくはこういうのを見ると燃えるんです。掃除機あります?」

彼女が指差した方に、使われた形跡があまりない掃除機を見つけて引っ張りだした。

「あたしたち、ガサツで怠け者なところはそっくりなの。外見は全然似てないのにね。」

「そうみたいです。でも、ぼくは違いますから。結婚すれば、玲さんの衛生管理は保障されますよ。」

ぼくはガーガーと掃除機をかけながら、大きな音に負けないように怒鳴る。

彼女はあはは・・・と笑ってからふと真面目な顔を見せた。

「ね、悠樹。あたしと圭介の子供ってどっちに似るのかな?」

独り言のようにポツリと彼女は言った。

ぼくは返事に困って黙り込む。

少なくともぼくには似てないのだから、返事のしようがない。足して2で割った感じでしよう、なんて言ったら失礼かな。

「ね、悠樹。どっちに似てても、この子のこと愛してくれる?」

彼女の声にはぼくは掃除機を止めて立ち止まった。

鈍感なぼくは、彼女が言わんとすることにやつと気付いた。

子供のことが心配で仕方がないんだ。

もうお母さんなんだから。

ソファに座って真剣な表情をしている彼女をそつと抱きしめる。

硬直して、ぼくの返事を待っている彼女の耳に、ぼくは囁いた。

「ぼくと結婚するんでしょ？ だったら、どっちに似ててもぼくの子ですよ。」

「・・・ありがとう。」

彼女はやつと安心した顔で微笑んだ。

掃除が終わり、布団を干し、放置されていた食器を洗い、部屋はなんとか人が帰って来れる状態になった。

「玲さん、今日はここにいますか？」

ぼくは聞きにくかったことをやつと口にした。  
今日だけでなくこのまま、彼女がここに居座ってしまうのが恐ろしかった。

「圭介が帰ってくるまでいるよ。でも、話が終わったら悠樹のところに帰る。」

ソファに座って雑誌をめくりながら、思ったよりあっさり彼女は答ええた。

「・・・いいんですか？」

「だって、やっぱり圭介には妊娠の報告しなくちゃ。悠樹もいてくれるんでしょ？」

「そりゃ、そこまではいますけど。その後、帰ってきてくれるんですか？」

ぼくの質問に彼女はキョトンとした表情で、ぼくの顔を見た。

「だって、あたしたち結婚するんでしょ？」

その言葉にぼくは胸が熱くなった。

自惚れていいんだろうか？



彼女がぼくを選んでくれたと。

缶のトマトソースをかけただけの簡単なスパゲティの夕飯を終えた後、ぼくらはソファに座ってテレビを見始めた。

時間はもう10時を回っている。

確か7時に到着の便だったから、そろそろ帰ってきてもいい頃だ。テレビを見ていた彼女はいつの間にか、ぼくにもたれて眠り込んでいる。

電車で帰ってくるなら名古屋まで1時間くらいだろう。

もしかして、自分の車で行って駐車場に留めっ放しにしてたのかな？ 頭打ち料金があるはずだから2万円くらいで置いておけるだろうけど。

その時、玄関においてある自宅電話から着信メロディーが流れた。

何故か、そのメロディーがショパンのノクターン。

もしかして、ぼくのこと考えてくれてた？

嬉しいけど、この優しい音色じゃ着信に気付かないだろう。

案の定、彼女は起きる気配もなく寝息を立てている。

ぼくは苦笑して、電話に向った。

多分、高田主任だ。

ぼくが出たら、何でてめえがウチにいるんだって怒鳴るかな？

「はい、高田です。」

電話を取って、ぼくは言った。

「あ、高田圭介さんのご自宅でしょうか？」

期待していた声とは違う、聞き覚えのない男性の声だ。

ぼくは首を傾げた。

「はい、そうですか？」

「ご家族の方ですね？」

「はあ、まあ。失礼ですが？」

ぼくは何か胸騒ぎを覚えながら聞いてみる。

「H警察署の澤田と申します。8時頃、知多半島道路で大型トラックを含む6台の玉突き事故が発生しました。高田圭さんと思われる男性がこれに巻き込まれ、現在、H市市民病院に搬送されています。本人が携帯していた免許証と携帯電話からこちらに連絡させて頂きました。」

男性は、早口で、しかしはっきりとした声でそこまで一気に言った。ぼくはまだ状況が把握できず、黙って聞いていた。なんだって？

高田主任が高速道路で事故に巻き込まれたってことか？

「今、病院なんですか？」

「はい、ご家族の方はすぐに向って、身元の確認をお願いします。病院の場所は分かりますか？」

「あ、はい。あの、彼の様態は？」

ぼくは受話器を握り締めた。

「搬送された方が複数いますので、詳細は把握できていません。高田圭さんかどうかの確認もまだできていませんので。すぐに病院に向って下さい。失礼します。」

電話は一方的に切られた。

ツーツーと音を聞きながら、ぼくはしばらく立ち尽くしていた。

## 44話

あたしは夢を見ていた。

中学生だった時の夢。

実家の二階にある圭介の部屋。

あたしはドキドキしながら、そっとドアを開けて、忍び込む。

そこにはいつも同じ姿勢でギターを弾いている圭介がいる。

あたしは後ろから彼の首に巻きつき、耳の後ろに唇を寄せ、息を吹きかける。

それが合図だ。

抱えていたギターを下ろし、彼の長い腕はあたしを捕まえる。

膝の上に抱かれたあたしは、彼の色素の薄いきれいな目を見上げる。おねだりしようと顔を近づけるあたしを、彼は笑って受け止めてくれる。

そして、彼の唇の感触、濡れた舌、服の中に入ってくる大きな手。

彼の全てをあたしは全身で感じるのだ。

「玲さん、玲さん、起きて！」

あたしを呼ぶ声に、はっと目を開けた。

一瞬、夢を現実の区別がつかなくて、部屋を見回す。

そうだ、圭介のマンションを今日は掃除して・・・。

「あれ？悠樹？」

目の前に銀縁メガネを掛けた白い顔を更に白くさせた悠樹がいた。

「今、警察から電話が入りました。高田主任が高速道路で事故に巻き込まれたみたいです。H市市民病院に搬送されたいらしい。すぐに行きましょう。浜松のご両親にも連絡したほうがいいかもしれない。」

寝耳に水とはこのことだ。

あたしはまだ働いていない脳を必死で回転させ、悠樹が言ったことを理解しようとした。

圭介が事故？

病院に搬送？

あたしは慌てて立ち上がろうとした。

思いとは裏腹に力が抜けて、ソファから立ち上がれない。

「悠樹、どうして？圭介大丈夫なの？」

「きつと大丈夫ですよ！それを確かめに行くんです。体調を考えたら連れて行きたくないけど・・・、あなたは行くべきだ。」

悠樹はあたしを抱き起こしてソファから起こした。

でも、足が震えて上手く立てない。

「悠樹、どうしよう。圭介に何かあったら・・・。」

「しっかりして！車まで何とか歩いて下さい。後はぼくが連れて行きます。」

悠樹の力強い腕に抱えられて、あたしはよろよろと歩き出した。

H市市民病院。

悠樹の車のナビで検索するところから50分くらいだ。

昨日まで元気でドイツにいた筈なのに、帰ってきた途端、こんなに近くで事故に遭うなんて。

高速道路だつて言ってた。

だったら、空港から名古屋に戻って来る時に巻き込まれたんだ。

あたしは運転に集中する悠樹の横顔を見つめた。

一言もものを言わず、彼はハンドルをきる。

いつものポーカーフェイスも今日はさすがに蒼褪めていた。

圭介じゃありませんように。

早く圭介に会いたい。

そう願う自分と、このまま着かないで欲しいと願う自分がいる。

万が一の最悪な結果を受け止められる自信があたしにはなかった。交通量が減った夜の街を、あたしたちは無言のまま車を走らせた。

やがて、病院の看板が見えてきた。

ただっ広い駐車場に車を止めて、あたしと悠樹は病棟に向った。

救急車が救急病棟の前に横付けになっていて、白い服を着た隊員がうろつろしている。

悠樹はあたしを抱くように支えて、救急病棟のレセプションにいる看護婦さんに声を掛ける。

「連絡もらいました、高速道路の事故でこちらに搬送されている高田の家族ですが。」

看護婦さんが悠樹に応えているのを、あたしはぼんやり見つめていた。

こんなにリアリティのない現実であるだろうか？

さっきの夢のほうが本当なんじゃないかな？

ほら、今も夢みたいだもの。

だって圭介がこんなところにいるなんて。

あたしは薄暗い病棟の廊下を見てぞっとした。

「玲さん、高田主任らしい人が今いるところ分かりました。」

悠樹が怖い顔であたしに言った。

「集中治療室です。そこで、医師から話を聞くようにと・・・。」

「そこって・・・危篤の人が入るんじゃないの？」

「まずは行きましょう。まず確かめなくちゃ。主任だったら、玲さんが来るのを待ってる筈です。」

ああ、そうだ。

圭介だったら、あたしのこと待ってるに違いない。行かなくちゃ。

あたしは再び悠樹の腕に支えられて、薄暗い病棟の中を歩き始めた。

ナースステーションで、看護婦さんに声をかけたらすぐに先生らしい人が飛び出してきた。

早口な先生は業務的に今の状況を説明する。

玉突き事故に巻き込まれたのは11人。

トラックが無理な追い越しをしようと最初の車に接触し、横転。

追い越しレーンを走っていた後続の車4台が次々衝突。

その中に圭介も入っていた。

彼は意識不明の重体。

臓器の損傷が激しく、今夜がヤマになるだろうとのこと。

ヤマを越えても、この先移植が必要になるかもしれない……。

「玲さん、大丈夫ですか？」

悠樹が硬直しているあたしを悠樹が揺さぶる。

今夜がヤマ？

どういうこと？

圭介が今日で死ぬかもしれないの？

あたしは乾いた唇を必死で動かした。

「……圭介に、兄に合わせて下さい。」

最後のお別れだと思ってるんだろうか。

先生は黙って、頷いた。

あたし達は先生の後について、ICUの中に入った。

そこで圭介は眠っていた。

薄い布団がかかった彼の体には無数のチューブが差し込まれ、肌が見えないほどに包帯で巻かれている。

酸素マスクで覆われた顔に黒っぽい血液が、まだついている。

「高田圭介さんに間違いありませんか？」

先生が後ろで問いかけるのに、あたしは黙って頷いた。

あたしはベッドに近づき、跪くと彼の耳元に顔を寄せた。

「・・・圭介。あたしだよ。」

いつもみたいに息をかけてみる。

ピクリとも反応しない圭介の体をあたしはそつと触った。

温かい。

なのにどうして起きないんだろう。

顔だつてきれいなのに。

でも、なんでかな？

涙が出ない。

今、ここに寝ているのが圭介だつて信じられないのかな。

もう少ししたら起きるって思ってるのかも。

やがて看護婦さんが申し訳なさそうにあたし達の前に立った。

「今夜はここで様子を見ます。お気持ちは分かりますが、外の待合室でお待ち下さい。ご家族には・・・すぐにでも連絡を取った方がいいと、先生が仰ってます。」

悠樹があたしを抱き寄せ、立ち上がらせる。

「玲さん、外で待ちましょう。待つしかありません。実家の電話番号教えてください。早くしないと親御さんに・・・。玲さん！」  
彼の大きな声にやつとあたしは我に返った。

「だつて、悠樹。変なんだもん。こんなの・・・夢みたい。」

「分かつてる！だからばくが動きます！玲さんは主任を信じて部屋の外で待つて下さい！」

目に涙を溜めて悠樹が怒鳴った。

## 45話

何時間経ったんだろう。

時計を見たら1時だった。

隣に座っていた悠樹がいつの間にかいなくなっている。

あたしは薄暗いICUの前の長椅子に一人で腰掛けていた。  
寝てしまったんだろうか。

こんな時に寝れるなんて、あたしも図太いな。

さすが、大雑把な圭介の妹だ。

「・・・・・・！」

何故かは分からない。

突然、あたしは圭介に呼ばれた気がして立ち上がった。

虫の知らせってこういうことなのかな？

何の戸惑いもなく、ICUの扉を開ける。

普通の人は入っちゃいけないって分かっている筈なのに。

まるで中から圭介に呼ばれてるみたいだった。

部屋の中は静寂だった。

あらゆる計器が設置されているのに何の音もしない。

淡い光が彼が横たわるベッドをぼんやり照らしている。

薄暗い部屋の中を、あたしは光を目印に彼のもとにまっすぐ歩いて  
行った。

そこにはさっきと同じ姿勢で横たわっている圭介がいた。

看護婦さんに見られたら怒られるかな？

あたしは上からそつと彼を見下ろす。

薄い布団の中から彼の手を取った。

遅しかった長い腕には2本もチューブが刺さったままになっている。  
その時。



大好きだった色素の薄い瞳が薄く開き、あたしを見上げた。

「おかえり、圭介。」

あたしはその手にキスして囁いた。

「ごめん、玲。心配かけたな。」

圭介の目がそう言ってる。

あたしは笑って首を振った。

彼は酸素マスクして、喋れる状態じゃないのに。

あたしには圭介の低い声が聞こえる。

本当に聞こえているのか、あたしが空想しているだけなのか、区別がつかない。

全てが夢みたいにあやふやな感じだ。

「かつこ悪いな、オレ。手足ついてる？」

苦笑いした時の自嘲的な話し方。

いつもの圭介だ。

あたしは握った彼の手を見せながら言った。

「手足はついてるよ。でも、内臓がダメだって先生が言ってた。」

「そっか……。でも、そんな気がした。」

圭介は目を細めた。

瞳から光が消えていく。

あたしは彼の手を握り締めた。

「逝っちゃうの？」

「ごめん。今度はおまえとは別の家に生まれてくるよ。」

圭介が少し笑った気がした。

あたしは必死で手を握る。

「また会えるといいけど。」

「会えるよ。きつと。」

あたしも笑ってそう言った。

最期の瞬間に彼が怖くないように。

心配しないで旅立てるように。

あたしは出来る限りの最高の笑顔を作った。

返事の代わりに、彼の瞳は笑ってるみたいに細くなっていき、やがて再び閉じられた。

突然、声が止み、ツー・・・という音が耳に入ってくる。

ドラマでよく見る、心拍数の計器。

波打つことなく直線に伸びている。

今のは夢？

どこからどこまで？

圭介はさっきと変らない姿勢で、目を閉じて眠っていた。

さっきの声はもう聞こえない。

「玲さん！何してるんですか？」

突然、聞きなれた悠樹の大声がした。

バタバタと音を立てて、看護婦さんや白衣の先生達が部屋に飛び込んできた。

ベッドの横にぼんやり突っ立っていたあたしを、悠樹が引きずり出す。

「心臓マッサージ始めます。ご家族の方は外で待って下さい！」

あたし達は看護婦さんに外に追いやられ、ICUの扉が目の前で閉められた。

あたしには分かったた。

その時、もう圭介が逝っちゃったってこと。

目頭が熱くなって、頬に涙が伝う感触に気付く。

あたし泣いてる？

ポロポロこぼれ落ちる涙をもう止める事はできなかった。

全身の力が抜けて、座り込みそうになるあたしを、悠樹が慌てて支える。

圭介がもういない。

血を分けたあたしの分身上の存在だったのに。

こんなにあっけなく、もう動かない。

人って儚いものだ。

でもね。

こんなに早くお別れするのが分かってたら、あたし圭介を困らせた  
りしなかったのに。

結婚とか、未来とかそんなのどうでも良かったね。

ずっと、圭介のものでいれば良かった。

あなたを悲しませなければ良かった。

でも、もう遅いんだね。

ごめんね、圭介。

「玲さん！玲さん、聞こえますか？しつかり・・・。」

悠樹の腕が倒れ掛かるあたしを必死で抱き止める。

力が出ない。

目の前が急に暗くなる。

あたしは壊れた人形みたいに崩れ落ちて・・・そして何も分からなくな  
った。

## 46話

言いそびれてしまったな。

ぼくらの報告。

でも、それを聞いたら主任はあの世からでも戻ってきそうだな。聞いてねーよ、そんなことって怒鳴られたかな。

ベッドで眠っているみたいな主任をぼくは見つめた。

不思議と涙が出ない。

闘病生活の後、亡くなったならまだしも、こんな突然の状況でさめざめ泣ける人がいるんだろうか。

ありえない。

ぼくの大好きな先輩がもう目覚めないなんて。

ぼくはまだ、彼の死を認識していなかった。

高田主任の葬儀は、ぼくらが病院に駆けつけたあの日から僅か三日後に執り行われた。

結婚式は1年も前から準備するのに比べて、葬式は迅速だ。

故人の思い出に浸る間もなく、葬儀屋というプロ集団の手によって、滞りなく勧められていく。

ご両親の意向で、慎ましく済まそうと実家の近くの葬儀センターで執り行われたのだが、何しろ、故人は顔が広くて人気者の主任だ。友人から会社の関係者から想像以上の人が押し寄せ、街の小さな葬

祭センターは人で溢れかえった。

手伝いに借り出されたぼくら会社関係者は、その対応に追われて、焼香する暇さえなかった。

葬式のスタッフには悲しむ暇が与えられないのだ。

それがぼくらには幸いだった。

ぼくは高田主任の直属の部下として、高田家に付き添って動いていた。

玲さんは実家に戻ってから姿を見せなくなるし、年老いたご両親は突然のことに右往左往するばかりで葬儀屋との段取りもろくに出来ない状態だった。

ぼくは高田家の執事宜しく、葬儀屋を相手に葬祭を取り仕切った。仮にも営業マンのぼくらには、そのくらいの段取りは仕事の延長上だ。

むしろ、そうすることで式に参列することから逃げていた。

式に参列したら、認めることになるじゃないか。

ぼくも彼の死をまだ受け入れられないでいた。

大学卒業後、実家を離れていた主任の写真をご両親は見つけることができなかった。

仕方なく、遺影は彼が24歳の時にウチの会社に入った時の履歴書の写真を使った。

人事部に調べさせてやっと出てきたのがこの一枚だったのだ。

ぼくは入り口で受付をしながら、時々祭壇に飾られた彼の写真を眺めた。

入社当時24歳の彼は、まだ色白で子供みたいな顔をしている。

初めての転職の履歴書だったんだろう。

緊張した面持ちで真面目くさって写っている。

この時、8年年下のぼくは16歳だった筈だ。

この頃にあなたに会っていたら、ぼくはもつと明るい人間になったかも。

そうしたら一緒にバンドなんかやってたかも知れないですね。

多分、ぼくのキラйнаロックバンド。

ぼくは、写真の中のまだ若い彼に向って話しかけた。

玲さんはとうとう葬儀には顔を出さなかった。

実家に引きこもっているようだ。

彼の死を受け止められないのだろう。

妊娠4ヶ月という不安定な状態であることを考えると、無理して参列して倒れるよりは自宅待機していてくれたほうがぼくは安心だった。

葬儀屋とは支払いが終わった時点で、契約が終わったようなものだった。

さくさくと葬儀は進み、事なきを得て終了し、支払い後は彼らはぼくらを丁重に見送ってくれた。

さすがプロ集団だ。

この期間、ぼくは浜松市のホテルに宿泊していたが、明日の朝には名古屋に戻ることにになっていた。

仕事もそろそろ正常化させなければ。

主任の引継ぎも誰かがやらなければならないだろう。

嫌でも、彼の死にぼくらはこれから向かい合わなければならない。

その前に彼女にどうしても会いたかった。

彼女はあの日、病院で意識を失って、目を覚ましてもぼんやりして口も利けない状態になっていた。

彼女を実家に帰してから、今までぼくらは顔を合わせていない。こんな時だけど、彼女が妊娠していることにご両親が気が付かないはずがない。

変な風に分かってしまう前に、ぼくはキッチンと報告したかった。

はじめて見たご両親は年金暮らしの仲のいい老夫婦といった感じだ。玲さんそっくりな鋭い切れ長の目をした、背の高いお父さん。

主任そっくりなパツチリした、琥珀色の目をした小柄なお母さん。

ぼくはまだ、葬儀屋のホールでソファに座っている彼女の両親に近づいた。

二人とも疲れた表情でぼんやりと座っていたが、ぼくに気がつく慌てて立ち上がって深く礼をした。

「この度は色々ありがとうございます。本当に良くして頂いて、圭介もいいお友達に恵まれて幸せでした。」

「あ、いえ。こちらこそ。主任には本当にお世話になりましたから。」

元はと言えば、ぼくのミスを尻拭いに行った帰りの事故なのだ。ぼくは唇を噛んだ。

何も知らないお母さんは優しくぼくに微笑んでくれた。

ああ、似てる。

主任は完全にお母さん似だ。

印象的な琥珀色の目。

笑った顔が主任の明るい笑顔を連想させる。

ぼくは覚悟を決めた。

「あの、お二人にお話があるんです。」

「はい？」

老夫婦は二人で顔を見合わせてから、ぼくを見た。

「ぼくは、玲さんと結婚前提でお付き合いさせて頂いてます。こん

なことになるなければ、年末にご挨拶に伺う予定でした。」

「あら、まあ、そうなの？ 玲がそんな・・・。」

お母さんは目を丸くして口元を押さえた。

その目が嬉しそうに細くなる。

「あの子も圭介も結婚しないんだと諦めてました。もう孫の顔を見ることはないだろうって。でも、岡崎君なら玲も安心だ。」

玲さんに良く似たお父さんも表情を柔らげた。

「・・・あの、その孫ですが。」

ぼくは口ごもった。

後から改めて言うより、今ここで、この勢いで言っしまいましたかった。

「実は玲さんは今、妊娠しています。この責任は取ります。玲さんと、赤ちゃんを幸せにします。だから、玲さんをください！」

ぼくは一気に言い放って、ガバッと頭を下げた。

しばらく沈黙が続いた。

二人の反応を見るのが恐ろしくて、ぼくは礼をしたまま地面を向いて目を瞑っていた。

やっぱり、マズかったか？

お父さんに殴られても文句は言えまい。

ぼくは上目遣いでちらりと二人の顔を見た。

両夫婦は優しい表情でぼくを見下ろしている。

お母さんはハンカチで涙を拭った。

「圭介がこんなことになって、私達は生きてても仕方ないって思ってたのに。孫ができるんじゃ、もっと頑張らないとね。」

「娘をよろしくお願いします。」

両夫婦はまだ頭を下げているぼくに、二人して深ぶかと礼をした。二人の温かい言葉に思わず、目頭が熱くなる。

認めてもらえた。

主任も喜んでくれるだろうか。

「ありがとうございます。玲さんにも報告しなければ。」



「その玲なんですが・・・。」

お母さんの顔が急に曇った。

「浜松に戻ってから、圭介の部屋に立て籠もって出て来ないんです。ご飯も食べてないんですよ。あの子達、仲が良かったからシヨックが大きかったんでしょう。岡崎君、玲を何とかしてやってくれませんか？」

その時、ぼくは自分の無力を思い知った。

彼女が本当に愛してるのは、やっぱり主任なんだ。

ぼくにはそれが、痛いほど分かっていた。

## 47話

初めて来た浜松は、都会と宅地が隣接した落ち着いた街。そんな印象を受けた。

海が近いせいか、風が強い。

気温は岐阜のほうが断然低いのだろうが、この冷たい強風が体感温度を下けている。

彼女が生まれ育った家は、宅地の方にあった。

よくある二階建ての住宅。

築30年といったところか。

エキセントリックな兄妹が愛を育んだ場所としては、あまりに平凡だった。

彼女の両親とともに、ぼくは彼女の生まれたこの家に足を踏み入れた。

「どうぞ、おさがり下さい。」

お母さんが先に入ってスリッパを勧めてくれた。

小さいけれど、掃除が行き届いた玄関。

下駄箱の上には小さな花瓶に花が挿してある。

少なくとも、あの二人がガサツに育ってしまったのは親に似たわけではないことが分かった。

ぼくは玲さんが立て籠もっているという二階の主任の部屋に案内された。

「玲さん？いますか？」

返事がないのは分かっていた。

が、一応ノックしてからドアをそっと開ける。

鍵はかかっていなかった。

部屋の中には勉強机にギターのアンプ。

弦の張ってない古いギター。

そしてタバコの匂い。

壁に貼られた、タバコの煙で変色した外人ヘビメタバンドの古いポスター。

スノーボードや、サーフボードが部屋の隅に立てかけてある。

ここは既に彼の物置として使用されていたようだ。

その部屋の真ん中に彼女はポツンと座っていた。

「玲さん、大丈夫ですか。」

彼女はぼくの声に何の反応も示さない。

ぼくは彼女の横に胡坐をかいて座った。

彼女はうつろな目をしたまま、宙を睨んでいる。

「玲さん。さつき、ご両親には挨拶しました。」

彼女は反応しない。

ぼくは構わず続けた。

「ぼくと一緒に名古屋に帰りましょう。」

彼女はゆっくりぼくを見た。

虚ろな目はぼくを見ているのに、通り越して遠くを見つめているみたいだ。

「あたしねえ、ここで圭介と愛し合ってたの。」

彼女は昔話をするように、彼女は微笑んで言った。

ぼくはぐっと言葉に詰まる。

想像はしてたけど。

もちろん、その言葉はぼくの胸にはイタかった。

「圭介は死んだんでしょ？あたし、病院で最期のお別れしたのよ。

でも、ここに来たら圭介がいたの。今でもあたしの横にいるんだよ。」

何を言ってるんだ？

ぼくは楽しそうに話す彼女を見て愕然とした。

「そんなこと言わないで下さい。主任はもういませんよ。亡くなっ  
たんです。ぼくじゃダメですか？やっぱり、主任の代わりにはなら

ない？ぼくと生きていくのは嫌ですか？」

ショックで錯乱状態なのか。

彼女の気持ちは分かった。

責めるつもりもなかった。

だけど、つい強い口調になってしまふ。

だって、主任ずるいですよ。

死んじゃったら、勝ち逃げでしょう。

この先、ぼくは一生あなたを越えることができない。

彼女は一生、あなたの思い出を美化して生きていくんだ。

でも彼女に今必要なのは、死んだあなたではなく生きてるぼくだ。

ぼくは自分の無力さが情けなくて、齒軋りした。

心の中で主任に悪態をついてみる。

主任はなんて答える？

知らねーよ、そんなことって言って、タバコを啜えるだろうな。

彼女はうつろな目でぼくを見ていた。

その目から一筋、二筋、涙が零れ落ちる。

泣かせてしまった。

でも、ぼくは譲らなかった。

ここで、彼女が立ち上がってくれないと、このまま主任の所へ逝ってしまふ。

そんな気がした。

ぼくは彼女の手を取って、もう一度言った。

「もう主任はいない。ぼくと帰ろう、玲さん。」

彼女は涙をこぼしながら、首を横に振った。

「ごめん、悠樹。あたし、行かない。ここで圭介と一緒にいる。圭介はここにいるんだよ。ほら、今だってあたしを抱いてくれる・・

。

「

彼女は話し掛けるように、何もない宙を見つめる。

ぼくは苛立ちを抑えきれなくなった。

「主任がぼくの前でそんなことする筈ないでしょう。ぼくは幽霊とか信じませんからね。百歩譲っていたとしても、そんなの悪霊だ。主任が玲さんが前向きに生きていくのを邪魔する筈ありませんよ。」

ぼくはヤケっぱちになって、きつい口調で言い放った。

それを聞いて、初めて彼女の顔色が変わった。

「悠樹にあたしたちの何が分かるの？圭介はここにいる。だからあたしも帰らない！もう出てってよ！」

涙をばろばろ零して、彼女は吐き出すように言つとそのまま蹲った。

これが彼女の答えか。

ぼくは立ち上がった。

悲しいけど、もはや彼女はぼくを見ていない。

死んだ主任の面影をこの部屋で必死で集めようとしている。

それが今の彼女の唯一つの生きる支えになっているのだ。

彼女がぼくを愛してくれたことは多分、嘘ではなかった。

ただ、それは主任がいつも近くにいるという条件下のことだったんだ。

その主任がいらない今、彼女は生きる基板を完全に失ってしまった。

最初からぼくでは駄目だったんだ。

「……分かりました。」

ぼくはそう言つて彼女を残して部屋を出ると、ゆっくりドアを閉めた。



## 48話

どのくらい月日経ったんだろう。

あたしはまだ圭介とこの部屋にいた。

圭介と最初に愛し合ったこの部屋をまだ出るつもりはなかったからだ。

ここには、圭介のタバコの匂いが残っている。

彼の気配を感じる。

あたしはここに居る限り、あの頃の戻れるんだ。

「ね、圭介？」

あたしは壁に向って話しかける。

そこには相変わらず、腕を組んで壁にもたれている圭介がいた。

圭介は何にも喋らない。

腕を組んだまま、ただじっとあたしを見てる。

時々、笑みを見せたり、困った顔をしたりしてくれるけど何も言わない。

あたし以外は誰にも見えないんだってことは分かってる。

幽霊なんかじゃないと思う。

そんなのいないってあたしだって分かってる。

多分、これは壊れちゃったあたしの頭が勝手に作り出してる圭介の残像。

いつ消えてもおかしくない。

だから、あたしはここから離れない。

妄想でも、残像でも何でもいい。

圭介の気配が感じられるこの部屋で、あたしはただ居座っていた。

悠樹は何度か、あたしの様子を見に来てくれた。  
あたしを見て、現実を見つめるとか、逃げちゃダメだとか色々言うてくれる。

本気で心配してくれる悠樹には感謝していた。

でも、あたしはまだ前に進めない。

いつまでも、ここにいたい。

圭介と一緒に。

それだけが今のあたしの願いだった。

「ここに居てもいいでしょ、圭介？」

あたしは壁に向って話しかけた。

圭介は少し困った顔で微笑んでる。

「もうどこにも行かないよ。あたしは圭介とずっとここにいたいからね。」

あたしは古い圭介のギターを彼に代わりに抱きしめた。

完全に迷走しているあたしの心とは裏腹に、お腹だけはどんどん成長していく。

圭介が死んだ時は殆んど分からないくらいだったのに、最近になって急に大きく張ってきた。

時々、硬くなって突っ張る感じがする。

お腹の中で赤ちゃんが時々動くのも分かるようになってきた。

この子はあたしと圭介の赤ちゃんなんだ。

圭介は結局何にも知らないまま逝っちゃったね。

あたしが出産するって言ったらどんな顔したかな？

壁にもたれた圭介は困った顔をしてみせる。

そうだね。

知らないほうが良かったのかも。



死の間際にそんなこと聞いちゃったら、死んでも死に切れないよね。

お母さんが一日三回食事を運んでくれる他は、あたしはここに一人だった。

悠樹の子供だと思っているお母さんは、孫に会えるのを楽しみにしてて妊娠中のあたしを気遣ってくれる。

騙しているみたいで、あたしは少し罪悪感を感じたけど、真実を話すつもりもなかった。

全てを話すことが正しいことではない事位、あたしでも分かった。

結婚式は悠樹が延期にするように話したらしい。

確かにまだ祝い事をする雰囲気ではなかったし、何よりあたしがここから出てこないで話が進まない。

正直、あたしは結婚していいのか、分からなくなっていた。

悠樹のことは好き。

でも、圭介がいることが前提だった。

あたしは兄妹という絆がある圭介と別れるなんて想像だにしてなかったことに気付いた。

彼がいなくなつた今、あたしは自分を支えていた大きな存在が無くなった事に初めて気付いたのだ。

こんな女と結婚したら悠樹が可哀相だ。

窓から見る外の景色は、もう春が来ていることを教えてくれた。

桜があちこちの公園で咲き始め、新しい制服を着た中学生らしき集団が家の前を歩いていく。

多分、今は四月の上旬。

出産予定は確か五月の始めだった。

もうすぐ出産だというのに、あたしは何の準備をする訳でもなく、ただぼんやりとこの部屋で一日が終わるのを数えているだけだ。

「ねえ、圭介。あたしも連れてってよ。」

あたしは壁に向って話しかけた。

腕を組んでこっちを見ていた圭介の顔が少し険しくなった気がした。  
「もういいでしょ？あたしもそっちに連れてって。圭介のところに行きたい。」

もう全てがどうでも良かった。

悠樹も、子供も、結婚も、未来も、圭介のいなくなったこの世の全てがあたしには意味のないものになってしまったのだ。

圭介、何て言うだろう？

連れてく訳ないだろ、バーカっていつかな？

その時。

今までに感じたことのない傷みを下腹に感じて、あたしは蹲った。

お腹がすごく硬くなって、張りだしている。

下半身にズツシリくる嫌な痛みが続いている。

その時、下着から濡れた感触を感じた。

得体の知れない液体が太腿を伝って流れているのが分かる。

何これ？

どうしよう。

あたしは壁の圭介を見て、目を疑った。

さっきまでいた圭介がいなくなっている。

続いてやってきた大きな痛みの波に、あたしは窒息しそうになる。  
痛い！  
痛い！

痛い！何なの、これ？

出産までにはまだ1ヶ月もある筈なのに。

「助けて、圭介！助けて！」  
あたしはお腹を抱えて必死で叫んでいた。

## 49話

突然襲ってきた耐え難い痛みは5分程続くと、嘔のように引いた。  
な、何？今の。

もう生まれちゃうの？

まだ何にも準備してないのに。

パニックになりながらも、あたしは床を這いずって何とか部屋の外に出る。

階段から顔を出し、出来る限りの大声を出した。

「お母さん！助けて！」

痛みの為にお腹に力が入らず、蚊の鳴くような声が階下に小さく響く。

その間にも太腿を伝って生暖かい液体が流れ出していく。

これってもしかして破水？

どうしよう。

どうしよう、圭介？

お母さんが階段の上で這いつくばっているあたしを見つけて、悲鳴を上げて駆け上がった。

「救急車・・・お願い。早く・・・」

再び襲ってくる鈍い痛みを感じながら、あたしはその場で再び蹲った。

救急車で病院に運ばれたあたしは、担架で病室まで運ばれた。

待ち構えていた看護婦さんたちが手際良く、服を着替えさせ、血圧を測る。

お腹だけ出してベッドに寝かされたあたしの前にメガネをかけた女医さんが座り、エコーで胎児の心音を計り始めた。

ドクン、ドクンという規則正しい心音が大音量で聞こえて、あたし

は少しほつとした。

赤ちゃんは生きてる。

「今、何ヶ月？」

冷静な顔で女医さんはエコーで胎内を見ながら尋ねる。

「9ヶ月半です。」

「少し早かったけどもう破水してますからね。このまま出産するしかないでしょう。」

こんなことは日常茶飯事だと言わんばかりに、女医さんは表情も変えずに言った。

「もう生まれちゃうんですか？」

「あなた初産でしょ？多分今からが長いですよ。ご主人には連絡しました？」

「あ、主人・・・？」

あたしは口ごもった。

あたし達は結局、結婚もしてない。

悠樹には散々酷いことを言ってしまった。

もう愛想をつかされてもいい頃だ。

彼が結婚する気がなくなったら、あたしとはもう何の関係もない人だ。

ここに来る理由すらない。

「悠樹君には携帯に連絡いれておいたわよ。出なかったから留守電だけ。」

黙り込んだあたしを見て、お母さんが助け船を出してくれた。

あたしは返事に困って唇を噛み締める。

悠樹が来るかどうか、あたしにも分からない。

何度も浜松まで来てくれた彼を、あたしは邪険に追い返していたのだから。

来てくれなくても、それが彼の答えならあたしは受け入れるしかなかった。

あたしはそれだけのことを言ったし、彼には選ぶ権利がある。

だって、彼の子供じゃないんだから。

そのうちにまたあの鈍い痛みが襲ってきた。

繰り返す波のように、痛みは引いては振り返し、しかもどんどん強くなっていく。

下半身が砕けそうな痛みにあたしは呻き声を上げた。

「まだ、陣痛の感覚が長いですね。これからもっと強い痛みが短い間隔でくるようになります。それまでこの部屋で待機してて下さい。水分は取ってもいいですよ。軽いものなら食べても大丈夫です。」女医さんは表情も変えずにマニュアル通りに説明すると、部屋を出て行った。

これよりもっと痛くなるの？

今でももう耐えられないのに？

こんな時、圭介がいたら何て言うかな？

「オレは代われないからな。おまえが頑張るしかないだろ。」

突き放した言い方しながら、ずっと傍にいて見ててくれる。

そんな気がした。

でも、その圭介はもういない。

さっきまで見えてた幻影まで消えてしまった。

あたしは一人で頑張るしかないんだ。

この子を産む為に。

下半身からこみ上げてくるような痛みはどんどん強くなって、あたしは耐えられず悲鳴を上げた。

看護婦さんが慌てて飛び込んできて背中をさすってくれる。

「落ち着いて。痛くなったら大きく息を吸ってからゆっくり吐いて。パニックになると過呼吸になるわよ。」

あたしは言われたとおり息を大きく吸って吐く。

こんなのでは気休めにしかなかった。

あたしは一人で頑張らなきゃいけないの？

この痛みにいつまで耐えなきゃいけないの？

「・・・圭介・・・圭介・・・。」

無意識に彼の名を呼びながら、あたしは痛みと心細さで泣き出した。

怖い。

一人じゃ怖い。

ここに来て、圭介。

「圭介さんって旦那さんの名前？早く来てくれるといいですね。」

看護婦さんはあたしの背中をゴシゴシさすりながら、優しく言った。

違います。

圭介は死んだ兄です。

もういません。

ここには誰も来ないんです。

あたしはそう返事しようとしたが、もう痛さで声にならなかった。  
痛い！

圭介、助けて！

「あたしもうダメ！」

あたしはそう叫ぶと看護婦さんの手を振り払ってベッドから飛び降りた。

「ちよつと、あなた何言ってるの！もう頑張るしかないでしょ！」

看護婦さんは部屋から逃げようとするあたしに追いつがってくる。

「怖い・・・あたしには無理・・・もうダメです。」

「あなた、母親になるのよ？バカなこと言ってちゃダメでしょ！」

子供のように泣き出したあたしに看護婦さんは厳しく言い放つ。

ああ、また痛みの波が来た。

あたしは立っていられず、床に蹲る。

苦しい・・・。

息ができない・・・！

痛みで頭がおかしくなりそうだ。

目の前がだんだん暗くなって、意識が遠くなってくる。

「完全にパニックになってます。」

「高田さん、落ち着いて。大きく息を吐いて。」

看護婦さんと、さっきの女医さんの声が遠くに聞こえた。

「玲さん！大丈夫ですか？」

その時、聞きなれた大声が聞こえて、あたしは一瞬我に返った。

「・・・悠樹？」

瀕死のあたしの姿を前にして、蒼白になっている懐かしい顔。

スーツとネクタイを着用した悠樹が、あたしの視界に飛び込んだ。  
た。



## 50話

ドアを開けたぼくの目に飛び込んできたのは、床に転がって看護婦さん達に囲まれている彼女だった。

「・・・悠樹？」

ぼくの声に気が付いた彼女が、声を出した。

半分白目を向いていた彼女の顔が、正気を取り戻すのが分かる。

ぼくは駆け寄って、看護婦さん達の中に割って入った。

「お母さんから連絡入って、名古屋から新幹線で来ました。でも、やっぱり遅くなりましたね。・・・何してるんですか？」

どうして彼女が床に転がっていたのかよく分からず、ぼくは質問する。

「奥さん、パニックになつて病院から逃げようとしてたんですよ。母親になるんだから腹をくくらないと。圭介さん、これから奥さんのサポートお願いしますね。」

うんざりしたように看護婦さんが質問に答えた。

なるほど、病院から逃げようとは彼女らしい。

ぼくは苦笑してから、ふと気付いた。

この人、今ぼくのこと何て呼んだ？

「・・・圭介さんって？」

ぼくは看護婦さんに聞き返す。

「奥さん、さつきから旦那さんの名前呼んでたんですよ。あなた圭介さんでしょ？」

何も知らない看護婦さんは、冷やかすようにニヤニヤ笑って言った。

ああ、そうか。

ぼくはぐったりしている彼女を見た。

一番苦しい時にあなたが呼んだのは、やっぱりぼくじゃなかったんですね。

もちろん、その事実は胸に突き刺さったが、今はそれどころではない。

ぼくは彼女を抱き上げ、ベッドに戻る。

ベッドに寝かされた彼女は弱弱しく、ぼくを見上げた。

いつもの鋭い視線が、まるで別人のように光を失っている。

「・・・悠樹、ごめんね。」

彼女は泣いていた。

ぼろぼろこぼれる涙をぼくは、そっと拭いてやる。

「なんで謝るんですか？」

「だって、だってあたし、やっぱり・・・。」

言いかけたところで彼女が口を押さえて、体を丸めた。

顔を歪ませ、物凄いい力でシーツを握り締めている。

ぼくはオロオロと立ち上がった。

「痛いのか？玲さん？」

「痛い！助けて！あたしもう無理！」

悲鳴を上げて暴れる彼女をぼくは必死で押さえつけた。

「だめですよ。暴れたらベッドから落ちて大怪我します。看護婦さ

んの指示に従わないと・・・。」

「だって痛いんだって！怖いのか！助けて！圭介！」

こんな時、あなたなら何て言う？

彼女を腕を押さえながら、ぼくは必死で高田主任を思い出そうとしていた。

彼の低い声。

投げやりな仕草。

笑った時の顔。

横目で睨むクセ。

そくだよ、あなたはいつもカッコ良かった。

その上、死んじゃって、ぼくは一生あなたに追いつけない。

でも、ぼくはぼくだ。

あなたの身代わりになる気はない。

シヨパンがガンスに負けるわけないですからね。

だけど、今だけ。

彼女が必要としてるのがぼくじゃないなら。

今だけ、あなたの力貸してください。

「おい、玲！しっかりしろよ！」

ぼくは暴れる彼女の手を握って怒鳴った。

ぼくを振り切ろうとしていた彼女の体がビクツとして硬直する。

「・・・悠樹？」

彼女は目を見開いてぼくの顔を見た。

「泣いててもしょうがないだろ？オレは代われないから、おまえが頑張るしかないからな。」

ぼくは高田主任みたいにウィンクしてみせる。

思えばこれも、キザな癖だ。

「どうしたの？悠樹・・・？」

「うるせえ！悠樹って言うな！オレは圭介だ。そう思って、オレの手握ってる。」

一瞬、呆気にとられていた彼女の顔が綻び、笑みが洩れる。

「圭介だっと思っていいの？」

「今だけ・・・、オレはおまえのお兄ちゃんだからな。そう思って頑張れ！」

「・・・うん。」

やっと笑った彼女の顔が、再び苦痛で歪んだ。

ぼくの手を握っていた手に物凄い力が入る。

引きちぎるんじゃないかと思うくらい、全身全霊をかけて握ってくる。

今度は彼女は逃げなかった。

ぼくの手を握ったまま、規則的に呼吸を繰り返し、必死で痛みと闘っている。

時々うわ言のように圭介、とぼくを呼ぶ。

ぼくはその度に、なるべく高田主任に似た低い声で、頑張れと応えた。

それを聞いて彼女は安心した顔で笑みを見せる。

そして再び、産みの苦しみに耐えるのだ。

彼女が必要としているのがあなたなら、ぼくはあなたの名前で呼ばれたって構わない。

あなたのモノマネだってやってやる。

でも、これから先、彼女に必要なのは生きてるぼくですからね。

ぼくには時間がある。

いつかあなたを越えますよ。

それが、いつもぼくを助けてくれたあなたへの恩返しになると思うんです。

ぼくはあなたの妹と、あなたの子供を幸せにしますからね。

ぼくは苦しそうな彼女の額の汗を拭いてやりながら、主任に話しかけた。

4時間が経った。

彼女は疲労困憊ですでにくったりしている。

看護婦さんがやって来て素早く診察する。

「子宮口全開。分娩室に入ります。旦那さんは外でお待ち下さい。」

看護婦さんはそう言うと、彼女をベッドごと分娩室に運んでいく。

一人で大丈夫だろうか？

「玲！頑張れよ！」

ぼくは高田主任みたいな、なるべく低い声で叫んだ。

彼女はそれに応えるようにベッドから弱弱しく手を伸ばして、ひらひら振って見せた。

もう大丈夫だ。

ぼくはほっとして分娩室の前の椅子に腰掛けた。

女性ってすごい。

それに比べて、こんな時の男は何と無力なんだろう。

やがて分娩室から産声が響き渡った。

思わず立ち上がったぼくの目には涙が溢れ出ていた。

## 51話

ぼくは看護婦さんに案内されて分娩室の中に入った。まだ分娩台の上で横たわる彼女の頬をそつとなでる。ぼくの気配に気付いた彼女はうつすら目を開けた。

「お疲れ様。玲さん。」

そういったぼくに彼女は穏やかに微笑んだ。

「産まれたよ。女の子だった。」

「あ、それはおめでとうございます。」

ぼくは目をゴシゴシこすりながら、また的外れな返答をしてしまう。看護婦さんが生まれたばかりの赤ちゃんを抱いて、近寄ってきた。

「おめでとうございます。女の子ですよ。」

タオルに包まれた赤い物体をぼくは覗き込んだ。

これが生まれたての人間……。

人ってこんなに小さいんだ。

これがさつきまでお腹の中にいたなんて……。

ぼくは感動で涙が止まらなかった。

「名前、つけなきゃね。」

看護婦さんが出て行ってから、彼女はおずおずと言った。

その前にすることがある。

ぼくは市役所から取って来た婚姻届の用紙をスーツのポケットから引っ張り出した。

「出生の届けは2週間以内なら大丈夫です。その前に結婚しましょう。そうすればあの子は自動的にぼくの子ですよ。」

彼女は全て記入済みで後は捺印するのみの用紙を見て吹き出した。

「あたしでいいの？」

「玲さんこそ、ぼくでいいんですか？」

ぼくらは顔を見合わせた。

「あたしは・・・やつぱり圭介のこと忘れられない。でも・・・悠樹がきてくれて嬉しかった。」

「それでいいですよ。前にも言いましたけど、忘れる必要はありません。ただ、ぼくは主任にはなれない。」

そうだ。

ぼくは主任にはなれない。

あのモノマネはできればもうしたくない。

ぼくは彼女を見つめた。

「分かってる。だから・・・ありがとう。無理してくれてありがとう。」

彼女は美しい笑みを見せた。

女神のような慈悲深い微笑みだ。

さつきまでベッドで暴れていた人とはまるで別人。

ぼくは彼女の頬に顔を寄せてキスした。

「・・・悠樹こそ、あたしなんかでいいの？」

「ぼくの気持ちは変わりません。初めて会った時からね。」

ぼくらは顔を見合わせ、笑った。

彼女によると、あの時の高田主任のモノマネは神がかり的にソックリだったそうだ。

「圭介の霊が悠樹の体に移ったのかと思った。」

オカルト的なことまで言い出した彼女にぼくは応えた。

「だから言ったでしょ？ぼくも高田主任のことが大好きだったんです。玲さんと同じくらいにね。」

彼女は嬉しそうに微笑んだ。

願わくはもうモノマネをする必要がなくなりますように。  
ぼくはぼくで、あなたにはなれませんから。

主任はなんて言うかな？

きつとぼく達を見て笑ってくれてるに違いない。

これからきつと、うまくいく。

彼女はあなたを忘れないけど、ぼくもあなたを忘れない。

あなたの思い出を共有しながら、ぼくらは生きて行きますよ。

「じゃ、玲さん。改めて言います。ぼくと結婚してくれますか？」

「・・・はい。お願いします。」

薄暗い分娩室の中で、ぼくは彼女に唇を重ねた。

彼女は嬉しそうに微笑んでいる。

自惚れていいんだろうか？

彼女がぼくのところに戻ってきてくれたって。



## 52話

季節は初夏。

蒸し暑くなってきた部屋の窓を開くと、新緑の匂いがする。さつきまで曇ってた空が少し雲が切れて明るくなってきた。あたし達が出発するのに、縁起のいい兆候、かな。

低体重で生まれてしまった赤ちゃんは1週間ほど入院を強いられた後、あたしと一緒に元気に退院した。

圭介が死ぬほど心配した先天的な問題は今のところ見られず、あたしと悠樹は一先ず胸を撫で下ろした。

その後、この浜松の実家に居座りながら、あたしは慣れない子育てに奮闘していた。

とにかく、眠れない。

赤ちゃんは3時間おきに乳を求めて泣き始め、満足するとまた眠ってしまう。

あたし以上のマイペースな我儘っぷりに、最初の一週間は翻弄され続けた。

こんなに小さいのに生きる為の本能はフル活用されている。

あたしは生への健康的な力に振り回され、圭介のことを忘れていた

くらいだった。

これがきつと正しいんだよね、お兄ちゃん。  
あたしは時々彼に話しかける。

壁に映ったあの幻影はもう現れなくなった。

連れてってなんて言ったから、消えちゃったのか。

最初からあたしの妄想だったのか。

今となっては、どちらでも良かった。

あたしはこの新しい人間を、どうにか寝かしつけようと毎日全力で  
闘っていたのだから。

「子供の名前はぼくが決めます。」

いつもはあたしにお伺いを立てる悠樹が珍しく宣言した。

「えー、なんで？」

「だって、いくら主任が好きでも圭子だけは勘弁ですよ。」

本当に嫌そうな彼を見て、あたしは思わず吹き出す。

「今時、そんなレトロな名前付けるわけないじゃん。」

「悠子も勘弁ですからね。」

「だから、今時そんなのつけないって。」

圭介以上にセンスがなさそうな彼の発想にあたしは一抹の不安を覚  
えた。

きつと、彼もあたしのセンスを疑っていたんだろう。

実はずっと前から決めてあったんです、と彼はポケットから折りた  
たんだ和紙を取り出した。

彼のスーツのポケットからは色んなモノが出てくる。

そこには墨で書かれた達筆な文字。

春香

「はるか？」

「いいでしょう？ ばくが病院から出る時に桜の香りがしたんです。これしかないなって勝手に思いました。」

自慢げに彼は勝手に語り始める。

自我自賛している彼は放っておいて、あたしは、赤ちゃんに向って  
はるか、と呼んでみた。

眠っていた筈の赤ちゃんがピクリと動き、薄く目を開いた。

圭介みたいな色素の薄いきれいな瞳が現れる。

気に入ったのかな？

岡崎春香ちゃん。

あなたを世界一幸せな赤ちゃんにしてあげる。

あたしは赤ちゃんの鼻先をそっとつついた。

今日からあたし達は実家を離れて悠樹の住むマンションに引っ越す  
ことにした。

いわゆる里帰り出産の時期も過ぎ、そろそろ親子三人での生活を始  
める為だ。

お母さんは孫と離れるのが辛くて、一緒に名古屋に行きたがったが  
そうもいかない。

「困ったことがあったらすぐ連絡するのよ。」

涙目でそういうお母さんをあたしは抱きしめた。

「すぐに里帰りするから、大丈夫。」

お母さんにとっては初孫なんだ。

この子を産んだことで少しは親孝行できたのかな。

あたしの服に加えて、ベビーベッド、ベビバス、オムツ、哺乳瓶  
セットと荷物は膨れ上がり、悠樹は2トントラックをレンタルする  
ハメになった。

これだけの荷物がどうやったら彼のマンションに全部納まるのか、あたしには謎だ。

お父さんと悠樹がトラックに荷物を積んでいる間、あたしは春香を抱いて二階に上がった。

この家を出る前に、あたしにはすることがある。

いつもみたいに階段を上がったら、細い廊下。

その突き当たりのドアが圭介の部屋だ。

あたしはそつとドアを開ける。

懐かしいタバコの匂い。

古いギター。

あたし達が迷宮に迷い込んだのはこの部屋からだったね。

あたしはもう一度圭介の部屋を見渡した。

ねえ、圭介。

圭介は今度は別の家に生まれてくるって言ったけど、あたしは圭介がお兄ちゃんであつたよ。

だって、妹じゃなかったらこんなに愛してくれなかったでしょ？

あたしは今度生まれ変わっても、また圭介に愛されたいもん。でもね。

圭介のことは忘れないけど、あたしはまだ現世が忙しくなりそうだよ。

こんなあたしでもママになつたんだからね。

あたしは圭介に語りかけた。

でも、もう圭介の幻影は現れない。

タバコの匂いのする部屋は時が止まったかのように静謐だった。

「さよなら、圭介。」

あたしは最後に小さな声で呟く。

二人が迷いこんだ迷宮を封印するかのように・・・あたしはそつと部屋を出てドアを閉めた。

## 52話（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。  
次回最終回です。

もう少しお付き合い下さい。

## エピソード

「ねえ、なんで今日は旅行行くの？」

「今日はね、春香の誕生日とパパとママの10年目の結婚記念日だからよ。」

あたしは暇になってパパの運転する車の中でゴロゴロしていた。弟の悠介はママの膝に頭を乗せて寝ている。

あたし、岡崎春香は家族でアツミハントーに向って高速道路を走っていた。

車を運転してるのはパパ。

色白で銀縁メガネの真面目そうなパパは、会社員であたしのピアノの先生。

ピアノを弾いてるパパはすごくイケてるって友達は言ってる。ちょっと変な喋り方だけど、かっこいいから皆の憧れのパパ。

ママは少し怖い顔。

でも、学校では美人で評判のママだ。

真っ黒なサラサラの髪で、日本人形みたい。

家ではママが一番強くて、二人がケンカをするといつもパパがケイキを買ってくる。

弟の悠介は今8歳。

甘えん坊で今でもママと一緒にでなければ寝ない。

姉弟ゲンカは絶えないけど、彼のモノはあたしのモノで、あたしのモノはあたしのモノだ。

今のところあたしが優勢。

パパそっくりな顔してるけど、あたしとは全然似てない。

まあ、フツの男の子だ。

似てないって言えば。

あたしは家族の誰にも似てないんだ。

強いて言えば、浜松のおばちゃんに似てる。

茶色のサラサラヘアはあたしのトレードマーク。

学校でも、きれいだねって言われる。

でも、目が変な色なんだよね。

ママの目は真っ黒でメジカラあるのに。

彼氏はまだいないけど、それでも人気あるんだから。

オマセなところはママそっくりだねっていつもパパに言われてる。

あたし達は海の近くのホテルに到着した。

ホテルの裏側は砂浜が広がってて、海が目の前に見える。

名古屋に住んでるあたし達は、海にきたことがあまりなかった。

岐阜のおばちゃんの家にはよく行くんだけど。

岐阜って言っても大垣だから、雪も降らないし、パパはスキーがで  
きなからつまんない。

ママはチェックインするのにホテルの中に入っていき、あたしはパ  
パと弟の三人で砂浜に出た。

「あんまり遠くに行っちゃダメだよ!」



弟と砂で山を作りながらパパが怒鳴った。

「はい！」

あたしは二人を残して砂浜を歩き出す。

潮風が気持ちいい。

そういえば、今日はあたしの誕生日でもある。

二人はあたしが生まれた日に結婚したんだって。

結婚直前にママのお兄さんが亡くなって、バタバタしてたんだって。別に言い訳しなくてもいいのにね。

デキ婚だったことくらい、10歳でも分かるんだから。

その時、バシャバシャと波を蹴りながら、海からサーフボードを担いで出てきた男の子が見えた。

まだ子供だ。

あたしのクラスの男子とそんなに変わんない。

まだ子供なのにサーフィンやってるんだ。

あたしは何となく、その子を見つめて立ち止まった。

視線に気が付いて、男の子はこちらを向く。

細長い手足。

日に焼けて褐色の肌に、大きな瞳。

あたしみたいな変な色だ。

日の光が反射して金色に光ってる。

なんか外国の子供みたい。

あたしと視線が合って、その子は少し笑った。

あ、なんかカワイイ。

「サーフィンできるの？」

あたしは近寄って、話しかけた。

近くに寄ると、彼の体から海の匂いがした。

「うーん。今練習中。ウチにずっとこれがあったから、使ってみようと思って。」

彼は濡れた髪をグシャグシャかき混ぜながら、傷だらけのサーフボードを見せて言った。

「ウチ、こっから近いんだ。毎朝、母ちゃんとワカメ拾いに来るんだよ。」

「へえ、いいなあ。あたしのウチは名古屋。海なんて滅多に来れないよ。でも、今日はあのホテルに泊まるの。」

あたしはホテルを指差して言った。

「えー、スゲーじゃん。オレ入ったこともないよ。」

大きな目を更に見開いて、大袈裟に彼は答える。

「でも、ここに住んでたら泊まる必要ないじゃん？」

「あ、そうか。」

あはは・・・とあたし達は声を上げて笑った。

「春香！もうホテル入るぞ！」

パパが弟の手を引っ張って怒鳴っている。

「はい！今戻るよ！」

あたしも負けずに怒鳴り返した。

「あれ、お父さん？」

その子は目を細めてパパのほうを指差した。

「そうだよ。それと弟。」

「いいなあ。」

少し寂しそうな顔で彼は言った。

ああ、そうか・・・。

10歳だって大人の事情くらい分かる。

「お父さんいないの？」

「うん、ウチ、ボシカテー」

なんて事もなさそうに彼は言った。

今時、珍しくもない。

ボシカテーの友達はクラスにも沢山いた。

あたし達子供にはどうすることもできないけど。

黙り込んだあたしを見て、彼は慌てて言った。

「変なこと言つてゴメン！ 気にしないで。オレも気にしてないから。」

「……うん。頑張つてね。」

慰めにもならないけど、あたしは笑つて言った。

笑つたあたしを見て、彼はやつとホツとした顔になった。

「オレの母ちゃんは子供が欲しかったから、父ちゃんはいなくても平気なんだつて。オレも母ちゃんと二人で楽しいしな。」

「ふーん。深いわね。」

あたしはパパは欲しいけどな。

考え込んだあたしに、彼は笑みを見せる。

お日様みたいな温かい笑顔だ。

「名前は？」

「春香。岡崎春香。あんたは？」

「オレは中野圭介。父ちゃんと同じ名前なんだつてさ。オレ、父ちゃん見たことないんだけどな。」

彼は濡れた髪をくしゃくしゃかき混ぜながら言った。

「いい名前じゃん。」

「ありがと。」

彼は目を細めて笑った。

「春香！ もう行くぞ！」

パパの怒鳴る声がまた聞こえた。

彼はパパのほうをヒョイと見てから、あたしに笑顔で言った。

「じゃ、オレ行くわ。バイバイ。」

「バイバイ。頑張つてね。」

あたしも手を振る。

彼はボードを担いで、砂浜を走っていった。

イケメンだけど、遠距離じゃ仕方ないわね。  
もう会うこともないかな。

あたしは走り去っていく彼の背中を見つめた。

「春香！いいかげんにしなさい！」

うわ、パパが切れ始めた。

「はい！今行きまーす！」

怒鳴り返して、あたしも砂浜を走り出した。

## エピソード（後書き）

今までお付き合い下さいました皆様、  
ありがとうございました。  
お疲れ様でした。

お楽しみ頂けましたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9014r/>

---

ラビリンスの終焉

2011年5月19日23時15分発行